

希望（論文集）

近藤良樹

目次

第一章 希望とは—^{こい}望むこと—

第二章 希望とその可能性—主観的願望から確かな希望へ—

第三章 希望・期待、ときに失望—希望は燃える—

第四章 夢と希望

第五章 絶望

第六章 絶望から希望へ

キーワード：希望，期待，夢，願望，失望，絶望，失意，挫折

hope, expectation, dream, will, disappointment, despair

第一章 希望とは—^{こい}望むこと—

1. 「水を希望します」とは？

（生理的欲求などではなく、社会的な要求）「水を希望します」という。これは、水を観望しての知的理解や美的な評価ではなく、おそらくは水を求めての意志表明と受け取られるであろう。「水」を求めるとき、その要求や欲求は、多様な形をとる。「水が欲しい」「求める」「願う」等という。「希望」は、それらと置き換えできそうであるが、「希望する」の

は、単に「欲しい」というのではない。「水がほしい」という場面では、「飲みたい」という生理的な欲求がまず想起される。これに対して「水を希望する」のは、それ自体は直接的には飲みたいという欲求を表明するわけではない。ひとりである場合、独り言して、「水が飲みたい、欲しい」といってもいいが、「希望する」とは言わない。希望するのは、水を用意してくれる相手があってというのが一般的であろう。「誰かに」水を希望するのである。

「水が欲しい」ということで満たされるのは、のどの渇き、いわば動物としての欲求である。これに対して、「希望が叶えられる」場合、その充足では、生理的な欲求は問われることはなく、前面に出ているのは、社会的な満足であろう。自分の求めをだれかに、担当の者等に聞き入れてもらえたということである。自分の願いが尊重され、しっかりと応答してもらえたということに満足するのである。

(**対社会的なものとしての希望**) 「水を希望する」のは、「水を、誰かに、希望する」のであり、その誰かを前にしての発言であろう。その誰かは、目的としての水について、これをもたらす媒介的な立場にあるひとである。この、水を準備してくれる社会的な役割を担う者に、「水を自分の手もとにもってきてくれること」を乞い求めるのが「希望する」ことであろう。厳密にいうと「水」ではなく、「水をもってくること」を希望するのである。希望は、社会的な要求・要請の一形式になろう。「水が欲しい、飲みたい」のは生理的主体であるが、これを「希望する」のは社会的対人的主体になる。「水がほしい」という言葉にその担い手を指す「誰に」の入る余地はない。だが、「水を希望する」場合、間接目的語を入れて「水を（もってきてくれることを）、給仕係に、希望する」という。この「誰に」と乞い願う契機が希望の特徴をなす。

ほしがる生理的欲求と、「希望」は、その欲求の成層を別にしていて、希望は、高度の知的社会的な人格相互の営みに見られるものである。社会的な生の営みをリードしコントロールする知性と意志のもとに機能している、対人的、対社会的な要求のあり方のひとつとしてあるのが希望になる。希望の目的をめざし、それを実現する手段となるものに働きかけて、その担い手や支持者に対して依頼するのが希望であろう。希望は、欲求実現のための手段・媒介となる者に、欲求するものを請い求めるのである。

(**一方的な要求ではなく、慮りのある依頼**) 希望する者は、その関与する人に、その希望内容を望み求め希う。その姿勢は、強引に押し付けてこれを強要したり、強圧的に命令するような要求の仕方ではないし、相手の意向など顧慮することなく一方的に我意を主張するものでもない。希望は、希（こいねが）うのである。「希う」のは、「乞う」ことであり、「願う」ことであろう。「乞う」のは、価値あるものを自分にもたらししてほしい、振り向けてほしいと、その実現のための力ある相手に対して、身をひくくして、これを頼み、頼りにすることであろう。「願う」のも、同様で、希望の内容について、その実現を求め念じて

思いつづけるのである。念願の実現をその能力ある相手に頼み求め続ける、乞い願う態度を、希望は、その「希」においてもつ。

「ダイヤモンドを希望します」というのは、これを「要求します」と自分勝手な我意を表して、一方的に権利主張をしているのではない。これを「希望する」のは、自分のダイヤモンド所有への欲望を踏まえ、その所有への権利を踏まえつつ、この欲望実現について、その相手に対して、穏やかに配慮ある依頼をするのであり、これを許して欲しいと許可を請い、実現に努力してもらいたいとお願いするのである。

(自らに叶えようとする意志でもある)「ダイヤが希望です」という言表では、だれかひとにお願いする場面よりは、希望する者自身が自らに懸命に働いて、望みのダイヤを購入するような場面が想起されるかもしれない。人生の大きな希望は、多くが自身で叶えていくものである。「希望の大学」、「希望の仕事」等、各人の希望は、各人が自らに切り開いていく。

期待と希望のちがうところである。期待は、傍観的であるが、希望は、主体的実践的である。「教師になることを期待しています」という場合、教師になるのは、自分ではない。期待する者は、傍観するのみである。だが、これを「希望しています」という場合は、教師になるのは自分である。傍観し待ち望むだけの期待とちがい、希望は、実践的で、未来に描いたその目的を自らに叶えて行こうとする意志・意欲である。

ただし、もっぱらに自分だけでと思われるようなものも、たとえば入試の「希望の大学」について、これを自分だけで決めたとしても、それを「志望」とせず、「希望」というかぎりは、だれかに希望している面をもつ。親に許可を求めていたり、手間のかかる書類作りをしてくれる高校の先生にそうお願いするものでもあろう。もちろん、当の大学に対しても希う姿勢をもつ。そういう気持ちをうちに含んでの「希望」であろう。

(現実的で分をわきまえた意欲) 希望は、希い、身を低くしてだれかに向けられるのであれば、その内容はこの相手に受け入れ可能なもので、具体的になっている必要がある。曖昧模糊としていることも多い願望とか夢とちがい、希望は、目的意識は明確で、それを依頼したい相手もそれに応じてはっきりしているのがふつうであろう。はじめにあげた「水の希望」にしても、水という目的はもちろん、その相手も明確である。

自分の希望の対象は、希な望みである点では、最高の価値あるものであるが、客観的に最高の夢をえがくのではない。その相手に希っても大丈夫であることをふまえ、おのれに実現可能なものをふまえてのこととなる。自他の能力・分限を周知しての現実的な望みである。自身の実現可能な最高のものが希望の目的となる。宝石店に行って「希望の品」として指差すのは、その店で最高級のダイヤではない。自分が購入できる最高のものにと限定していて、客観的には低価格の真珠などとなる。それが希望である。希望は、自身にと

って「希」有の「望」みであるが、分相応の実現可能な現実的なものを「希（こいねが）」い「望」むものである。希望は、自己規制に富み、周囲を慮る。

「希望」は、実現可能な高い価値あるものを、ひとに希い、自身もその実現に努めるものとして、つぎのようにこれを定義しておけようか。「希望とは、自身にとって現実的に可能な高い（しばしば希有の）価値ある人間的な営み（或いは、そこにもたらされる価値物）について、これをひとに頼み希い、かつ、自らもその実現に努めこれを望みつづけることである。」

（高貴な感情でもある）希望は、可能な未来への意志・意欲であるとともに、つらい絶望感の対極に位置するさわやかな感情でもある。陰鬱な絶望の感情状態から解放されたときにいづく希望においては、特に、心身は軽やかで生の躍動感に満ち心地よい感情をともなう。だが、絶望感とちがい、感情としてそれ自体を自覚できるまでになることは多くはない。「胸をふくらませる」とか「燃える」といわれるような希望は、開放的で躍動的な感情をともなうが、希有な望みであっても、湿り気のある希望（遭難で生存の希望が残っている場合など）では、燃えることはできない。

感情は、ひとの動物的下位層から、高貴な知的精神の層までを快不快で貫いているが、希望は、幸福感とともに、精神の最高位層に位置する快系列の感情である。動物的下位層の中心になる食欲と性欲の場合、快自体が目的となり、この快感情にひと誘惑されがちであるが、人間の知的社会的生活に固有の感情、いわゆる喜怒哀楽になると、もう、快は、伴うだけのもので目的とはならない。喜びでは、その快感情自体は目的ではなく、価値物の獲得が目的である。さらに上位の、個別的な現在の時空を超越した、その人間的生の全体を反省・総括し指針を出していく精神のレベルになると、それが、過去や現在を想っての幸福感や、未来に向けて人生を描く希望になるが、快は、ささやかで、「自分の半生は、恵まれていて幸福だった」と反省し総括しても、幸福の快感情がともなわないことも少なくない。希望もそうである。

しかも、下位層の不快（をもたらす事柄）は、それが高貴な精神の幸福や希望の有効な手段となるのであれば、避けられることがなく、その不快・苦痛において精神は、充実感をいづくことにもなる。恵みに満たされた幸福とちがって、希望は、不満足・不快をうちにもつ精神の快である。希望は、その目的とするものに関して現在は無・不充足であり、欲求は不満な状態にある。しかも、現在はその達成に向けて手段としての苦労を背負っている。未来の希望の達成への有意義な現在という意味づけにおいて、希望は、苦しい心身の現在のもとに、充実した精神的な心地よさをもつ。逆に、精神の不快、つまり不幸や絶望は、下位層の快を無意味なものとし、真にはひとを楽しませず、ときには快自体を感じさせなくもしてしまう。日頃は、人生の根本の危機ではないので、「甘いものには弱くて」

などと動物的快感情にながされているが、どんなに美味のケーキであっても、猛毒が混入されていると知ったら食欲すら失ってしまう。難破船のなかで豚は喜々として餌をあさるが、ひとは、蒼白になって失われそうな未来にうちひしがれる。ひとは、動物ではなく、その高貴な知的精神において生きる存在である。精神の根本的な絶望は、やがては肉体をも蝕んでいく。絶望するのは人間のみである。したがってまた、希望があるのも人間のみである。希望は、動物には不可能な高貴な精神の営みであり（少なくとも日本語では、「希望」や「絶望」を動物には想定しない）、未来に向かう精神のさわやかな快感情になるが、なによりも、それは、ひとの未来を切り開きその人間らしい現在をつくる高貴な意志・意欲である。

2. 「a (W) を、Pに、希望する」

希望は、「何かを」希望する。希望する者の希い望みもとめる高い（希有の）価値あるものをその直接目的語としてもつ。かつ、他方では、それをめぐって、「誰かに」希っていくのであって、いわゆる間接目的語をもつとってよい。希望の表現を、さきの「水を希望します」でいえば、「水 (W) を持ってきてくれること (a) を、給仕係り (P) に、希望する」ということになる。つまり、希望は、「a (W) を、Pに、希望する」という形に一般化することができる。

(Wではなく、厳密には、a (W)) 希望の目的対象として目立つのは、Wつまり、「水」とか「ダイヤ」という価値物である。だが、厳密には、Wは、希望の対象そのものではないというべきである。希望するのは、直接的には、(Wを目的語とする) aである。Pというひとに対して望むもの・希望するものは、aという人為であろう。「水を希望する」場合、Wつまり水が求めるもので価値あるものになっているのだとしても、その価値は、生理的欲求にとって価値があるのであって、希望そのものの直接の対象・求めるものは、aつまり、水を配給してくれる人の行為である。

「汚物 (W) を除去してくれること (a) をPに希望する」、「暴力 (W) を振るわないこと・取り締まること (a) をPに希望する」ということが可能だが、これらの希望の場合、そのW、つまり汚物や暴力を望むことはありえない。希う希望の直接の対象＝目的は、Wではなく、aにある。希う相手Pの態度や行為、ないしは希望者自身のあり方・行為としてのaである。この(Wを目的語とする)人為aは、希望では、つねに価値ある事柄であって、Wのように反価値であることはありえない。aが反価値である場合（「汚物をまきちらすこと」とか「暴力をふるうこと」）は、これを希望することはない。かりにそれを希望の対象にするとしたら、それは、その反価値の行為が敵にむかっていて、希望する者自身には、やはり価値あることとなっているのである。希望の対象は、(Wを目的語とする)

人為aであり、このaは、希望する者自身にとっては、常に望ましいもの、価値あるものとなっているはずである。

(周知のものでは、Wのみに) だが、「弁護士(W)を希望しています」というように、日本語ではしばしば希望の直接目的語として、望んでいる価値物をあげる。希望の対象が人為a(Wを内にもつa)だということは一般化されるものではないようにも思える。しかし、「弁護士を希望しています」という発言だけを聞いて、「弁護士ぐらいが、結婚相手には一番と、これを希望しています」と知ることができるであろうか。「Wが希望です(Wを希望します)」とするのは、あくまでも、その会話で、aが自明で省略できることになっているからであろう。希望する場面は、ひととひととの関わり合いの場になって多くの自明の前提をもち、自明のことは、省略することにと傾く。さらに、人為aは、とくにその人為の主体が希望の相手Pである場合には(このひとに請い願うのであるから遠慮気味となり)、直接にはなく控え目に婉曲に語るか、できれば省略したいと思うことになる。結果、aを略して、Wのみを示し、かつ、このWが多くの場合、価値物になるので、Wをもって希望の価値対象そのものであるかのように表現することになるのではないか。

さらに、希望の対象がaのはずなのにWとなることが多いのは、別の理由がある。希望は、だれかに託すと同時に、自身が積極的に関与していくが、自身の営為としてのaは、希望する意志と同一の主体の営みであるから、このaは「希望する」ことに吸収されやすくなる。「ダイヤが希望です」という場合、ダイヤに「あこがれ、うっとりとし」、これを「強く求め欲している」、「指にはめてみたい」「皆に見せびらかしたい」と思い、「その所有を望む」のである。ダイヤ(W)をめぐるそういう多様なこころの動きを簡略に語る場合、その場面で一番高級で倫理的な振る舞いである「希望する」にまとめ、したがって下賤な欲望をベールで覆い、その欲求の対象Wを「希望」の目的とするのであろう。

しかも、遠大な希望の場合その達成には多くの過程のあること、つまり、aの内容は単純ではなく多くの段階・手段の積み重ねからなっていることがある。「裁判官になる」ことa(W)を希望する者は、その最終目的a(W)を描きつつ、このaを具体化して、司法試験合格 m_1 を中間目的にし、そのために法学部合格 m_2 を目指し、それにと予備校の試験の好成績 m_3 を志す。希望の具体化は、裁判官Wになることへの一連の努力になり、aには $m_1m_2m_3$ が連続している。その間、裁判官(W)がつねに念頭にある。任官すること(a)のみではなく、厳正な裁判官としての自分を想像してみることもあろう。希望の一連の過程の目的自体は、厳密にいうとaであるけれども、それ以前のこともそれ以後のことも描かれ、そのなかで変わらないものは、裁判官Wの姿になる。このような場合、希望では、aよりはWが描かれやすくなり、aは省略されがちとなることであろう。

(Pを必ずもつ) 希望は、a(W)を目的にえがくとともに、さらに、それを希う相手(P)

をもつ。このPは、第一にa (W) を実現してくれる行為者である。だが、希望は、傍観的な期待とちがい、自らが努力し実現するものでもある。希望は、Pに「託する」とともに自身が「叶える」。自身が叶えていくことが主となっている希望では、Pは、一見存在しないようにも思える。「希望は、裁判官です」とか「プール付きの豪邸が希望です」等の遠大な希望の多くは、人頼みではなく、自身が力を尽くして実現していくもので、希うような相手 (P) は必須とはならないようにも思える。だが、希望が、「夢」や「願望」あるいは「志」「志望」ではなく、希望であるのは、ひとつには、相手 (P) をもつことにあるように筆者には思われる。希望というかぎり、「裁判官に自分になる (のを見守ってくれる) ことを、周囲の者 (P) に、希望しています」「プール付きにする (のを許容してくれる) ことを、家族などの周囲 (P) に、希望している」ということになるのではないか。周囲の者・関係者 (P) は、ここでは、単に許可・許容し見守るものにとどまっているのであるが、それがあから、希う希望になるのであって、もし、Pがなくて自分だけだとすると、それは、希望ではなく、「志す」とか「憧憬する」等になる。希望する限りは、Pが何らかの形で意識されることになっているというべきであろう。

(「二つの希望」－目的としての希望と、意志としての希望) ところで、希望では、「希望する」こととともに、この希望の働きの対象自体も「希望」という。「まだ、希望が残っている。捜索の継続を希望します」という場合、残っている希望は、実現の客観的可能性のある目標・目的そのもの (目的の人為aであり、多くの場合、その目的物Wでもある) を指している。事故で地中に閉じ込められた者の生存の可能性、したがって救出の可能性がなおあるとき、その生存者 (W) の救出 (a) という希望の対象・目的 (aあるいはW) を、「希望」と言い、これが「残っている」といっているのである。あとの「捜索継続を希望します」というのは (名詞化すれば、「捜査継続は、命令できる訳ではありません、希望です」という場合の「希望」)、捜索隊に乞い願うこと、依頼する意志としての希望である。

この希望の目標・目的 (a (W)) では、その実現に関して、二つの異なった希望のあり方が問題になってくる。希望a (W) をだれが実現するのかという問題である。「希望する」場合の希望では、「希望する」者は、この動詞の主語ひとつ、つまり「希望者」である。だが、目的としての希望の場合、それを担う者は、希望する者のみではない。希望 (目的) は、一方では、これを「Pに」希望するのであるから、その主体となるのはPで、Pがa (W) を担うのである。かつ、他方では、期待などちがって、希望a (W) は、自身が実現していくものでもある。他力依存と自力中心の希望の違いとなる。自力中心の希望では、希望はそのPに「託する」ものになる。希望a (W) をそれに力あるPに託し依頼し「希い」その実現を「望む」のである。他方で自己の力を主とする希望では、自身がそのa (W) を実現していくのであり (Pに許容してもらい見守ってもらいながら)、希望は自

身が「叶える」のである。

3. だれか (P) に希う

(誰に?) 「ダイヤモンドを希望する」「就職を希望する」というとき、ひとは、「なにかに」対して希(こいねが)うという契機をもつが、これは、希望の対象自体、つまり「ダイヤモンドに」希うのではない。まさか、「就職に」希うこともない。その乞うもの、願うものは、別にある。その希望の対象をもたらしてくれる人である。希望は、希望する相手を常にもっている。ひとは、個として独立し自立面をもつが、本源的に社会的な存在であり、他者と協力・共同して生きる存在である。希望は、自身でかなえていこうとする自立性に富み、相手に控え目で遠慮し、その相互の自由・自立を尊重しているといえるが、他面では、同時に、他者に依頼する契機を、希(こいねが)う面をもっている。

希望は、だれか (P) に、希い望みもとめるのだが、このだれかは、だれでもいいのではない。まず、人間以上でなくてはならない。犬や猫には「希望」はしないであろう。希望の目的のための手段的役割を犬も担うことがときにできる。しかし、犬自体に「希望する」ことはない。「留守番を希望する」とき、頼りないとしても娘になら希望できるが、いくら頼りにできる飼い犬であっても、これに「希望する」ものはいないであろう。

(希望の理解と実行の能力) 「希望」を自然や動物に託さないのは(日本語ではそうである)、希望というものをその相手が理解できなくてはならないと、希望する者が思うからであろう。自分のは希望であり、命令でも哀願でもないこと、「これは、私の希望であって、命令ではありません。する・しないは、あなたの自由です」というようなことを了解できる相手にのみ希望は通じるのである。だから、犬には無理でも、娘になら、その理解だけではできるから、希望できるのである。希望の目的実現までの手段の過程を未来に向けて描き、この手段を自主的に担うといった高度に人間的な能力を相手はもっててはならないのである。希望は、はるかな先に目的を描くことが多い。手段となり、担い手になることは、はるかな先から見てのことで、その目的と手段的なものについての十全な理解と、「希う」ひとに対する自主的な応答は、人間的な知性がなくてはかなわないことである。

希望は、単なる願望とちがいがその実現が想定されているから、実行力の伴っていることも条件になる。理解できても、そのことについて実行する能力がないのでは、希望するだけ無駄である。「ダイヤが希望です」と言われても、それを購入する資力がない者には、その希望の受け入れは無理である。希望するとき、ひとは、そのことを心得ているから、相手にとり実現可能なものを「希望」する。お土産には、ダイヤは無理だから「アメジスト」ぐらいにするのである。さらには、その願いを聞き入れてもらえる関係であることも踏まえている。いくら資力はあっても、それがすべてまわしてもらえるわけではない。その能

力のどの程度を自分の希望の実現にまわしてもらえるのかということがある。お土産の希望を聞かれた場合、そのことをふまえていて、妻なら「アメジスト」を希望できても、近所づきあい程度の間柄の場合、希望できるのは、「絵葉書」レベルである。

(倫理的になる所以) 他者に関係なく自分が自身で希望を叶えていくような場合にも希望をいう。これを「希望」として表明するのは、やはり、だれか(P)をふまえてのことであろう。どんな事柄も、社会的存在である人間の場合、周囲の支えがあつて可能となることである。それを思うか思わないかは、当人の姿勢しだいである。尊大な者は、ひとの稼いだものすらも、自分の手柄にしようとするし、謙虚な者は、自分が圧倒的に力あつてのことでも、「皆さんのおかげ」とする。自身で叶えていくことが基本のものを「希望」とするのは、この点からいうと、当人の周囲への気遣い・謙虚さのなさしめるものということができる。あるいは、自分ひとりですることであっても、謙虚に控え目に、周囲への迷惑などにも配慮して、「ひとりですることのわがままを許してくれるようにと希い希望するのである。

希望では、だれかにこれを求め希うのであるが、それは単純に要求するのではなく、控えめに依頼するものである。相手の自主性にうたがひをお願いするのであり、相手に対する配慮に富む。希望は、相手の自由を尊重する。「ここでは、タバコを吸わないように希望します」という場合、「吸わないよう命令します」というのと違って、その対象者の自主性を尊重していて、無理強いはいしない。相手が、「吸う・吸わんは、わしの勝手じゃろうが！」とやってこれを拒否して喫煙することを容認する、穏やかさ・控え目の姿勢を希望はもっている。相手を慮り、自らの望み願うものを小さめにと制限する。

(託される者は、周囲の者だが、未来の人たちでもある)「願望」も願うものだが、一方的で主観的であつて、願う相手と状況について何らの配慮をしていなくても、よい。だが「希望」は、現実的であり、そのこいねがう相手についても、これを現実的に限定し明確にしている。就職を希望して希う相手は、特定の企業と特定の関係者になる。ただし、希望の担い手になり支持者となる者(P)は、身近で限定的だといつても、現在の周囲に限定されるわけではない。希望は、はるかな未来に向かって描かれることがあり、そういう場合は、希望を託する相手(P)は、未知の未来のひとともなる。自分のはるかな希望を将来の子孫に託すこともあれば、民族や人類にと希望を託すこともある。希望は、未来に向けてその目的a(W)を描くが、その担い手Pも、未来の人々にまで広がることになる。

はるかな希望は、その担い手を求めて、はるかな未来の人類へとひろがっていく。未来の人類が頼りになりうると思うから、そこへと希望を大きく広げていくことができる。希望は、単なる願望や夢ではない。現実実現可能なものを描く。未来の人類に希望を託するという事は、そのはるかな可能性がこの現在において見出せているということである。

こういう方向での希望では、希望を託し「希う」とともに、はるかにと「望む」契機が顕著となる。個を超えて類としての精神に生きる希望は、はるかなかなたをのぞみ見る。

(絶望では、Pは、人に限定されない・・・) 希望が絶たれたとき、絶望する。老舗を継いでくれる(a(W))という希望がなくなって、「どら息子(P)に」絶望する。「自分に」絶望し、「みんな(P)に」絶望する。だが、絶望の場合は、Pは、ひとには限定されない。希望とちがひ、自然にも絶望する。日本では「雨を希望する」ことも「雨に希望する」こともできないが、「長雨に絶望する」ことはできる。

根本的な希望が不可能となり未来を剥奪されて絶望するのだが、希望を剥奪するもの、絶望させるものは、人間だけではない。人間の営みを挫折させるのは、周囲の自然条件等によることも少なくない。絶望はつらく、なんとしても回避したいことであるが、それには、絶望させるものを排除することが肝要となる。絶望では、この絶望させるもの・条件に注目する。絶望をもたらすものは、自他の人間にはとどまらない。自然をふくむ「最悪の条件」に絶望することになる。ということで、絶望では、ひとに限定せず、自然をもそのろいの対象(P)にするのである。

絶望を通して見えてくることは、希望のささえは、周囲のひと(P)が担ってくれているだけではないということである。人為を越えた自然環境もひとの希望を可能にしてくれていたのである。自然のささいな動きがひとの希望を奪い絶望させるということは、自然が日頃から希望を無言のままに支えてくれていたということである。自分の希望を周囲のひと(P)に託し、このPに自分勝手な望みを許容してもらい見守ってもらうのであるが、その直接のささえの背後には、さらに多くのささえられている人々があり、恵まれた自然があるわけである。それが、希望を剥奪された絶望からは見えてくる。

4. 希望(a(W))を望み見る

(最高のものが希望するもの) 希望の目的となるものは、希な望み、最高のもの、理想である。「希望の大学」は、自分の行きたい最高の大学である。「希望通り」になるとは、何も思い残すことなく満足できる最高の状態が実現されたときのことであろう。a(W)という希望の目的において、その価値は、厳密にはa(W)にあつて、Wと同一ではないが、多くは、このWの価値に等しいものとなる。「広大(W)に入ること(a)が希望です」という場合は、a(W)とWは、いずれにも価値があり、その希望の高い価値は、Wによることになる。だが、人為aが「廃止すること」であつたとすると、広大(W)に高い価値を認めているものはこの希望には与しないであろう。「狭大(W)を廃止すること(a)を希望する」というようなことになろう。人為aがWを否定する場合は、むしろ、この希望のもとでのWは、「間違い(W)を改めること(a)を希望する」というように、反価値物

になるのが普通である。Wではなく、aが、価値あることがらとして希望するものになる。

しかし、人為aがWの価値を肯定的にあつかう場合には、希望の目的とする価値あるものは、aが高度で稀有なものではなく月並みな行為（たとえば、所有するとか、選び出す等）のときは、Wの価値になる。「広大（W）に入ること（a）が希望」では、希望する者は、「入ること」ではなく、「広大」に最高の価値を見出しているのである。もちろん、aが希望の価値そのもので、Wは並みのものという場合もある。「体（W）をスリム化すること（a）が希望です」では、希望の価値は、身体（W）にではなく、スリム化するという涙ぐましい努力（a）にあり、このaが希望の目的とする希な高い価値になる。希望では、「広大を希望しています」というように、希望の価値物（W）だけを挙げることが多いが、希望の担い手（P）に望むものが「彼自身が走る」ことであるような場合は、人為aのみとなり、Wは直接的には出てこない。「aをPに希望する」ということになり、希望の目的とする希有の価値は、当然aにあることとなる。

（希望の二つの価値秩序）価値は、一般に、欲求主体がその対象に対して自分たちの欲求を満たすものがある（有用・有益）と評価するところに成立するが、希望の場合も、希望するから、その対象が高い価値あるものとなる。ただし、希望の価値は、単にそういう希望主体の個人の主観的価値にとどまるものではない。一般的にその社会が欲求の対象とし価値あるものとしていることが前提になる。希望は、社会的であるから、それがまずふまえられる（メノウやアメジストでなく、ダイヤの方に高い価値があることになる）。単に「蓼食う虫も好き好き」の個人主観の価値にはとどまらない。とくに、その希望が周囲に希うことの大きいものの場合、その周囲に十分な配慮をする必要があり、その一般的な価値観を共有し前提にすることが求められる。それによって、希望をかなえてくれる相手の努力や贈与をそれとして十分に評価し尊重することが可能となるのである。かつ、同じ社会的な価値秩序をふまえることによって、周囲が許容する限界、つまり自身の望んでよい限界も明確となる。

同時に、個人の希望・目標としては、自身の気に入るもの・好みのものを選択するものもある。その点では、希望は、客観的、間主観的な価値づけではなく、個人の主観的な価値づけをして、その最高の価値あるものを選択することになる。商品の場合は、多くは、まず、客観的な価値秩序をふまえ、自身に可能な限界を明確にして、その範囲内で、一番主観的に高い価値のあるものを選択することになる。就職の希望の場合は、おそらく、個人的に一番なりたいものを選定して、そのあと社会的により高い価値があると評価されるものを選んで希望とする。希望は、社会的価値秩序と個人的価値秩序をふまえて、最高の価値あるものを選択することになるが、さらに、希望は実現可能性を重視するから、べつの価値秩序、例えば現実化の難易度等にも目を配る。就職では、縁故が希望の選択に決

定的となることがこれまでは結構あった。

(ひとの自由の営み a (W) であって、自然必然のものは、希望としない) 期待や願望では、必然のあるいは偶然の自然現象についても、これをその対象にできる。「明日が晴れる」ことを「期待」し「願望」とする。だが、これを「希望する」ことは日本語ではできない(英語の希望 hope は、「希望」のみでなく「願望」や「期待」にも手を広げているようで、晴れを「hope」できる)。希望の対象は、みずからが叶えていき、ひと (P) に希うものとして、本来的に人為 a (あるいは a (W)) となる。自然必然のものや偶然のものは、希望しようと絶望しようとひとの意志・意欲とは無関係にことを展開していくから、希望の対象にはならない。自分ひとりで夢見るのはかまわないが、希望は自他に相談して決めていくのであり、自然必然のものに抵抗したり、これに人為を重ねて無駄をすることには慎重にならねばならない。希望が対象とする人為 a は、さらに自由意志のもとでの自発的な営為にと限定される。ひとの行為であっても、意志の自由のきかないものは、希望の対象にはならない。希望を受け入れる側 (P) に立った場合、「ご希望を承ります」と言えるのは、自分がその希望を叶えることが可能な(つまりその自由のある)場合のみであって、もし、その意志によって叶えられる可能性がゼロと分かっていた場合は、希望を引き受けないはずである。宝くじ売り場で、最後の番号が3のくじは希望できるが、当たりくじを希望することはできない。前者は自由になるが、後者は、自由のきかないまったくの偶然に属することだからである。

希望の目的 a (W) では、a が自明である場合は、これを省略して、「Wを希望する」というが、このW自体は、自然物であろうと偶然のものであろうと希望の対象となる。Wについては、希望は、a 次第でなんでもいいうる。希望は自由の営為のもとにあり、「あした太陽がのぼる」必然も、「あした曇りになる」偶然も、それ自体は自由にならないから希望の対象 a にはならない。必然も偶然も希望者の願いには無関係にことを展開するから、日本語では、これらを希望することはない。しかし、それらをWとして、「太陽ののぼる」ところ (W) をサングラスなしでは「見ないように (a) に希望する」とか、「曇りになる」かも知れない空 (W) を、出来れば「写真にとること (a) を希望する」ということはできる。「見る」も「写真にとる」も、自由な人為のことがらで、希望として可能なことである。

(希望は目的論的展開をし、期待は因果論的展開にとどまる) 希望の対象・目的となるものは、人為 a であれ、それが実現していく理想の価値物Wであれ、現在は、実現されていないものである。その希望をいまだく現在からは、はるかな先にあるのが希望の対象である。希望は、まずその未来の目的を明確にし、つぎにその目的からその現在の手もとまでの諸手段の系列を描き、これを逆に、実在的に、手もとの手段 (因) からはじめて目的 (果) まで一步一步因果系列をたどっていく。身近な希望は、はるかなさきではないが、それで

も、身近な未来に、なお今は見ることのできない目的を描くことから始めていく。現在の手段—未来の目的という目的論的展開をどの希望ももつ。

動物には、希望はない。希望のような目的論的な展開をその生の基本形式とするのは、人間だけであろう。期待は、犬にもよく見られる。散歩の気配を感じると、それを期待してしっぽを振って待ち構える。期待は、因の生起をもって、それに密着して継起する果を想像しこれを見込むだけの因果論的展開にとどまる。チョウは、花が咲けば、蜜を期待してあつまる（ふつう、こう言うのだが、昆虫がはたして「果」を想像し見込んでいるのかどうかは、分からない。が、犬はおそらくは、果を見込む期待の能力をもつ）。犬などになると相当に多彩なことを期待するが、その犬にすら、希望はない。はるかな希有の目的（希望）を描き、これを周囲に希い、現在をその手段と自覚してその生の歩みを進めるのは、希望をもつことができるのは（したがってまた、絶望するのも）、人間のみであろう。

希望において、現在を未来の手段（因）として、その手段の系列を現在からその希望の目的（果）まで動かしていくのは、もちろん、a（W）目的自体である。その希望の目的が、ひとを引き付け、そこへといざないつづけていく。目的論的展開では、かりに、ひとつの因果の道がとぎれた場合は、終局の希望の目的（果）から再度、別の道を見出してその現在に別の手段（因）を手もとに見出していくことになる。希い望む相手（P）が変節して希望を受け入れてくれないようなときも、その希望内容・目的がそのひと自身に限定されない場合、そのひとを去って別の者に希望を託すことになり、その新規のひとに希っていくことができる。その目的が理想として存在するかぎり、希望は、ひとを引き付け、その実現へとさそいつづける。

はるかな頂上にいたるに、ふもとで、大きな登山口があるのを見て、すぐ頂上への道と思いなすのが期待になる。これに対して希望は、まず、頂上をのぞみ、そこから、ふもとへの道を目で追って遡源し、「迷路」を出口からたどって入口をさがす要領で、ふもとと結ばない脇道を避けて、確かに頂上まで続いている登山口を見つけ、これを選んで一步を踏み出していくのである。

5. はるかな希望

（希望の二つの理念型—ささいな希望とはるかな希望）絶望のなかに見出すかすかな希望や、夢と希望にかがやく青春の希望は、「和食を希望します」というような希望とは異なる。はるかな希望である。希望が人生論で通常話題になるのは、このはるかな希望の方である。愛に、卑近な愛欲があり崇高な仁愛があるように、希望にも、卑近なささいな希望と、はるかな根本的な希望の二つが理念型として挙げられてよいであろう。

冒頭にあげた「水を希望する」ときの希望は、卑近なささいな希望である。それが卑近

でささいなのは、希望が、他方で、遠大なもので、そのひとの人生にとって決定的なものになっていることがあるのに比してである。この卑近な希望が単なる要求などでなく希望であるのは、その希う姿勢、相手への謙虚な依頼の姿勢においてであろう。その「望」むものは自分には「希」有の価値あるものになると捉えて、身を低くしてこれを「希」う、その姿勢自体は、ささいなどうでもよいことではない。それは、人間関係にとっては大切な慮りある態度である。「水を要求する」というような不遜な態度とはちがって、謙虚に遠慮がちに希っているのであって、ささいな希望も、倫理的には高く評価される態度でありうる。

ささいな希望とはるかな希望のちがいは、その否定がなにになるかで判断できる。朝の食事についての「和食の希望」は、ささいである。これが否定され洋食にされても、たいしたことはない。せいぜい軽く「失望」するぐらいである。だが、「青春の夢と希望」「生存の希望が残っている」等の希望では、その反対・否定は、深刻なものとなり、その典型は「絶望」となる。その否定が深刻なものとなる希望は、そのひとの生にとり大きな根本的な希望である。

はるかな遠方にのぞむ希望は、重大な根本的希望であろう。ささいなものなら、そんな先のことなど気かけないからである。しかし、身近な希望は、かならずしも、ささいな希望ではない。結婚の希望や受験の希望は、身近にあって人生を左右する重大な希望であり、その挫折は、しばしば「絶望」となり、深刻なものになりがちである。はるかな先の希望は、はるか遠方にあるのだが、現在の自身を方向付け、現在の存在そのものをつくっている点、現在の根拠をなしているのだともいえる。教育者や医者というはるかな希望の未来が、現在の教育学部生、医学部生を存在させる。その未来が閉鎖された場合は、そういう学部生であることは空しいものとなる。ささいな卑近な希望は、「和食の希望」のように自身の存在そのものにとってはどうでもいいもので、自己自身にとっては遠くに位置している希望である。だが、はるかな希望の方は、自己の根源を形成して、現在の間近にあって反復想起される親しいものである。

(未来の希望が現在を生きたものにする) 希望においては、その価値ある目的、その希有の望みを充たすものは、今は無い。その欲求は、不充足で不満の状態にとどまっている。その無の点では、絶望と変わるところはない。絶望とのちがいは、未来についてである。希有の価値あるものの実現の可能性が未来にあり、そこへと道の開かれているのが、希望であり、絶望では、その未来が存在せず未来の扉はかたく閉じられている。同じ無の現在でも、未来への扉が開かれているか否かの違いは大きい。ひとは、あすのために、未来に目的をかかげて、その生をあゆむ。その存在の本質は、そのめざす未来にある。この未来の希望を奪われた絶望状態は、その生を無意味化してしまう。絶望において、人間的生は

陰鬱のうちに停滞し、精神的な死という辛い状態に閉じ込められる。希望は、その反対で、未来をもち、したがって、ひとの精神的な生は、その発場の場を得る。

希望のもとで、未来の価値ある目的・観念が現在の無・不充足にひとを耐えさせる。未来の希望の目的が現在を意味ある手段とし、その未来へとこれを駆り立て、現在を生きたものとする。今日の苦労は、あすの享受の根拠・因をなすのであり、実りをもつものとして、充実したものとなる。あるいは、未来の価値あるものが現在の自分を魅了してそこへと誘ってやまないのが希望であり、それに一步一步近づく手立てが、今日の苦労において与えられるのである。希望の未来がおいしいものを享受する「口」だとすると、現在はそこへと食べ物を運ぶだけの「手」である。口が楽しむのを手(手段)は、ひたすらに助けるのみである。だが、希望の主体は、その手と口の全体をひとつにした自己自身であり、その口を楽しみとし、その手の働きに心地よさを感じる、生の諸層を統括する高次の精神である。

(身近にのぞみ、はるかのをのぞむ) 未来を望みみることで現在の意味は変わる。希望の輝きに照らされて、未来に生きる現在となる。希望は、まずは、その未来の目的を観望する希望である。その知によって、現在がその有意義な手段としての価値を獲得する。本章冒頭で「水を希望する」のは、観望することなどではないといったが、希望は、高遠なものになるほど、まずは観望にはじまる。希望の「望」は、ないもの(「亡」)をはるかにのぞみ見るものである。そのはるかなものの観望をもって、その先導をもって、ときに絶望し無意味になっている現在をよみがえらせる。生きていこうという気力を再生させる。この現在に耐え(それは、希望のための現在以前の、絶望の現在であるかも知れない。絶望の試練は新しい希望を生み出す発条になりうる)、その苦難を糧にし、これを積み立てて、その苦の数だけ、希望の実現は近づく。ひとは、希望において、現在(手段)から未来(目的)に向かい、現在に直接するだけの生を超えて、人生という全体的な精神に生きるのである。

希望の「望み」は、その目的を希い「のぞみ」求め、はるかを「のぞみ」見るのであるが、同時に、現在の人生をつくっている点では、現にここに「のぞむ」臨在するものとなっているのでもある。希望は、現在の自身を方向付け現在の自己をつくっている。その希望のうちに、自身と周囲の者は、その未来と現在の根源をなすものを、「のぞき」見ることになる。希望できるがゆえに人は絶望もするが、その絶望の閉じた扉を開くのは、堅実な未来を描く希望である。希望は、絶望をとり「のぞ(除)き」(あるいは、絶望に耐える中でおのれを「のぞ(覗)かせ」、はるかを「のぞ(覗)き」「のぞ(望)み」見て、今に「のぞ(臨)み」、その生をよみがえらせる。そういう「のぞみ」をもって、希望は、未来へと飛び立つのである。

What is hope?- beg and wish-

Yoshiki KONDO

KIBOU(hope in Japanese) is not a physiological desire, but a social demand. And this demand is not one-sided claim but a polite wish and a careful ethical request. KIBOU has two Chinese Character, KI and BOU. BOU means “wish” or “request”. KI means on the one hand KOINEGAU(beg, ask), and on the other hand MARE(rare, uncommon). Then KIBOU(hope) means “politely wishing(begging)” and its object has “rare” high value.

KIBOU-SURU (hope in Japanese verb) has the high valuable direct object of hope, and also the indirect object(P) as the person whom man begs. “P” in the hope is the person of surrounding, whom man wishes to understand and support his hope. Also in the case that man realizes his hope independently by himself, man has his neighbor. And in this case the man of hope(KIBOU) may suggest his courteous request modestly, “Please permit me to do only by myself”. That is the Japanese KIBOU(hope).

Usually man takes up only “W” as the rare high valuable object of hope, but strictly must adopt “a(W)”(a=the conduct of human, W=its object), for example, “to possess(a) the camera(W)” or “I become(a) a teacher(W)”. If “W” is negative-value, for example “dirty matter”, which can not be the object of hope, man must say in his hope “to exclude W” i.e. “a(W)”. The object of hope i.e. “a(W)” is realized by the man of hope and other persons voluntarily. The “a” of KIBOU(hope) exists in human spontaneous conduct, so must not be natural matter. In English man can say, “I hope it will rain tomorrow”, but any Japanese can not say so in his hope(KIBOU), because rainfall is a natural matter.

(『広島大学大学院文学研究科論集』 第67巻 2007年12月)

第二章 希望とその可能性—主観的願望から確かな希望へ—

1. 喜望峰

アメリカは、近年にいたるまで、多くのひとびとのはるかな「希望の大地」でありつづけたが、この大地に向けて一番早く「希望」を託したのはイザベラ女王（スペイン）であった。コロンブスは、西航してインド（＝インディアスは当時東アジア全般を指したとのこと）へという自分の計画をまずポルトガルに申し出たが、断られて、これをイザベラ女王に向け、やがて彼女に受け入れられ、大西洋を西に横断するインドへの冒険の航海を行った。イザベラ女王は、コロンブスに、インド（アメリカ）行き大きな希望を託すことになった。中東を介するのではなく、大西洋から直接にインド（東洋）へという「願望」は、当時大きくなっていた。だが、インド行きの願望は、願望としては、「行きたい」という漠とした願いにとどまって具体性を欠き、方向すらさだまらない望みでは、船を港から出すわけにはいかなかった。

単なる「願望」とちがって、「希望」は、現実へと降り立ち具体化した願い・望みであって、これは、実現されうることをふまえたものである。コロンブスは、インド（東アジアでも、黄金の島ジパング＝日本がかれの夢だったとか・・・）に行きたいと単なる願望をのべたのではなく、具体的に、西に進むとインドに行けることを説き、イザベラは、これに納得し、その実現可能性にかけ、財政的な支えを行った。インド行きは、コロンブスが出航してからは、彼自身においてはもちろん、イザベラにおいても、もはや単なる願望にはとどまっていなかった。具体的な希望となった。

願望は、主観的なものにとどまり、現実のなかで具体化されなくてもよい。場合によっては現実には不可能なことを、過去の変更不可能なことすらも願望としてかまわない。だが、希望は、現実的な可能性をふまえていられるものであり、現実には不可能なことは、失望や絶望とはなっても希望となることはありえない。願望は、希望となるには、現実的になるように具体化される必要がある。

同じころ、大西洋を通過してのインド行きを競争し優位にたっていたポルトガルは、南下して着実にインドへと海路を進んでいた。だが、ポルトガルの試みをさまたげるように、アフリカは、はるかな南にまでつづいていた。かれらは、途中で失望し絶望したことであろう。だが、そのときも、インド行きの願望自体は持続させていたはずである。もし、願望がなくなっていたとすると、つまり絶たれる望み自体がないのであれば、落胆して絶望的になることはないのである。

その願望の持続と失望・絶望がつづいていたなかで、東にまわってインドに行ける確かな可能性がふたたび意識されたとき、希望は、よみがえった。それが「喜望峰」であった。しだいに絶望的にまでなっていたポルトガルにとって、インドに到達する現実的な可能性

の見出せた岬だった（真のアフリカの南端は、もうすこし東南東にある「アグラス岬」のようであるが・・・）。その発見(1488年)後まもなく、インド（はカリカット）に到達しており（1498年）、この間に、ポルトガル国王（ジョアン二世王、あるいは次のマヌエル一世王か）が *cabo da boa esperança* (*cape of good hope* 善き希望の岬)と命名したといわれている。時間の前後関係で微妙なところであろうが、或いはイザベラ女王のコロンブスがインドに到達した(1492年)と聞いて、思いもしない方向からさきを越され絶望的になっていたそのあとの王の命名かもしれない。はじめは別の名(嵐岬 *cabo tormentoso*)をつけていたのを王は「喜望峰」（日本では、希望は、常に喜で、悲でも悪でもないから、「喜望」は、ふつうではないし、岬だから、「峰」というのも、おかしいのだが、なぜかこう表記することになっている）と改めたという。いずれにせよ、インドに行ける可能性の復活に大喜びし、王は、希望をよみがえらせ、そのよろこびの大きさを「喜望峰」の「喜」に付したのであろう。

（希望は、実在的な可能性をふまえる）希望は、単なる願望や夢とちがひ、実現されることを踏まえて抱かれる。希望の対象・目的となるものは、現実において個別具体化され、実現のための客観的な可能性をもつものになっていなくてはならない。「喜望峰」は、まちがひなく東に周航できる場所を見つけて、そう名づけたのである。コロンブスの場合もイザベラ女王（スペイン）の希望は、ポルトガルのアフリカ西海岸南下の航路独占という事態をふまえて、西方向へという新航路に限定し、現にコロンブスが出航して、真に可能となったものであろう。

実現可能なものをひとは、希望する。それは、いまだ存在しない未来の価値あるものであるが、単なる夢とはちがひ実現できる理想である。実現可能なものとして、希望は、実在化への客観的な整合性を持ち、具体性・合理性を有しているのでなくてはならない。

E. ブロッホ『希望の原理』は、精神文化のうちに見出される希望に関する多彩な事例を取り上げているが、原理的な概念規定にもところどころで触れる。同書は、希望を、「実在的に可能なものをもって媒介された希望」¹⁾と捉え、希望には「論理的具体的修正と先鋭化 *logisch-konkrete Berichtigung und Schaerfung*」²⁾の能力があると見ている。希望は、その現実をよく見えていて、その希望達成へと展開する現実のその論理・法則をふまえ、これを的確に追い、希望にいたる手段はもとより、その目的すらも修正して、事柄の実現へとこれを先鋭化していく。インド（アメリカ）へ向かったコロンブスのスペインにしても、喜望峰からインドに向かったポルトガルにしても、幾度もその希望に修正を加えながら、未来へ、インド（ジパングのある東洋）へ、アメリカへと突き進んでいったのである。

（希望の構造—その手段と目的）日本語では「希望」は、「a (W) を、Pに、希望する」と、直接目的語も間接目的語も取り、誰か (P) に、希望の目的 (a (W)) を希い望むと

いう形式をとる。希望の目的 a (W)、即ちWを a することを希(こいねが)うのであるが、普通そのWは価値ある物なので、「PにWを希望する」と、Wを希望の直接目的語にすることが多い。しかし、厳密には、aつまり「Wを獲得する」「Wに自分になる」という人為が目的である。Wが反価値物(汚物や不幸あるいは死刑等)の場合は、これが希望の目的になることはありえず、ここではaは、「排除する」「停止する」等となり、厳密にいうと、人為aが希望の目的になる。とはいえ、普通は、価値物Wを「得る」、憧れのWに「なる」のであり、その「なる」「得る」は、自明なので、省略して、「Wを希望する」という。このWを目的にあげて、それに向けて、希望は、燃えるのである。

希望は、この未だ無い未来の目標(a(W))を可能とする現在の出発点を見出して、その歩みを一步一步たどる。aへの歩みは、単純ではないのが普通である。未来に向けての諸手段・諸媒介となる。「裁判官」(正確には、裁判官(W)に任官する(a))という、a(W)を希望に描きあげたものは、そのために司法試験に合格することを考え、それには、法学部で勉強することが必要と思ひ、いまの高校生として文科系の受験勉強に力を尽くすのである。未来の目的からさかのぼって、諸過程・手段を手もとの現在まで描いて、この現在をしっかりとつかまえ、はるか先の目的にむけて一步を踏み出すのである。願望や夢なら、即その日に「裁判官」になる。だが、希望は、客観的で現実的であり、裁判官になるという人生のはるかな目標を立てて、その遠大な希望達成までの実在的に可能なプロセスを描きだす。

夢・願望と違って希望する者は、実在的にその希望実現のプロセスの中に降り立つ。その希望達成の可能性は小さくてもよい。それでも、(現実的には何もしない)単なる夢とちがひ、裁判官になる希望をもつ者は、実際にそのための勉強を始めるのであり、その実践的取り組みにおいて、希望の実在的可能性を獲得する。あとは、この可能性を高めることである。希望は、ブロッホのいうように、「客観的実在的可能性 *objektiv-reale Moeglichkeit*」³⁾であり、ひとは、機に応じてこの可能性を高めながら希望を現実化していくのである。

2. 許容の可能性—自己の分を心得て希望する—

(何を望んでよいのか。自分の分限を知る)その希望(a(W))がなにかの取得・享受になるとしても、それが自分勝手な要求とちがって「希望」であるのは、これを担ってくれている者(P)に配慮して、その自主性を尊重しながら、これにお願いする姿勢をもつからであろう。相手を慮ることなく一方的に賃上げとかサービスを「要求する」のとちがひ、「希望する」者は、相手への慮りをもつ。自分の分限を越えることがないように配慮しながら、可能なものを理解してもらい希(こいねが)うのである。

希望は、一番の欲求対象を目標とし目指すが、単に最高のものなのではない。宝石店に

行って、希望の宝石を購入する場合、1億円のダイヤを垂涎的とながめても、これを希望とはしない。希望の品は、1万円前後の真珠である。その真珠で気に入ったものがあるとき、「希望のもの」があったという。最高の客観的価値のある欲しいものが希望ではなく、自分の購入能力を、つまり実現可能性をふまえ、あるいはそれを願える相手（P）へ「希（こいねが）い」「望み」うる物をはかって、これを希望するのである。希望は、おのれの分を心得て、つつまじやかである。

（**稀望（けもう）から希望へー希有の望み**）ヨーロッパの希望(hope, espoir)は、キリスト教の高い神学的な徳目としての希望(spes)のもとにあって、ふつうには悪い意味合いでは使われない。それでもスピノザは希望(spes)を悪とみなしたし、ギリシャ神話でも、いまにポピュラーなパンドラの（災いの詰め込まれた）箱に残った希望(elpis)の話では、希望は、災いとの評価である（ただし、「希望」だけは箱に残りこの世には出てこなかったとか・・・この話に囚われた者はその解釈に悩まされることになる）。これに対して、わが国の場合は、希望は、この漢字自身は、かつては悪い意味で使われるのが一般的だったようである。漢訳仏経典『仏説無量寿経』に、「常懐盗心 稀望他利」（常に盗心を懐きて、他の利を稀望す）⁴⁾「悪逆天地 而於其中 稀望僥倖 欲求長生」（天地に悪逆して、そのなかにおいて、僥倖を稀望し、長生を欲求）⁵⁾という。希（稀）望は、否定されるべき欲望・願望の意味で言われている。一遍上人は、「世間の希望たえずして」⁶⁾とか「三界六道の中に希望する所」⁷⁾と言い、希望は、煩惱扱である。

中世の「希望（稀望）」は、「けもう」とよまれ、単に「希い望み」求めることではなく、「希」有の大それた願望・欲「望」を意味していたようである。現在の「希望」とちがいは否定的な扱いだが、日本の現在の希望の特性の一端は、この「けもう」に示されているように思われる。それは、ひとつには、希望は、自身にとって希有の高い価値あるものだという主観的評価の点である。さきの『無量寿経』の「稀望」は「僥倖」という希有の幸運を求めるものであった。一遍は、空也上人の言葉を引きながら、功を積んで善を修すると「希望多し」⁸⁾ともいう。自分の積んだ功德に応じた高い希有の望みをもってしまうということである。現代の希望も、希有の高い価値あるものを望む。

中世のこれらの希望は、唾棄すべきものの扱いであるが、その卑下の点でも、現在の希望につながるものを見ることができる。『無量寿経』では、「盗心を懐く」ことが「稀望」に等しいものとして並べられた。鴨長明『発心集』は、ひとの「希望深き事」をいい、それを「心うき食欲のふかさ」と言い換えてもいる⁹⁾。希望は、大それた情けない食欲だと恥じる。それはおのれ自身の希望であれば、当然、野卑で食欲な身のほど知らずの自分という厳しい自己否定になる。この自己卑下の精神自体は、現代の、ひとに希う謙虚な希望につらなるものであろう。希望は、だれかに託すことが多く、その相手を慮りつつ願

いするが、その配慮する精神は、自分を卑下し、相手を尊重し遠慮するところに顕著にでてくる。「大それた夢です」という中世の「けもう」の（自己）卑下の精神は、今につづいていると言えそうである。

その中身をあらためると、『無量寿経』のいう「天地に悪逆してそのなかにおいて僥倖を希望し、長生を欲求し」「常に盗心を懐きて他の利を希望す」は、現代人の希望そのものである。現代人は、そのいう「けもう（希望）」の生き方を恥じることなく、むしろ、大それた自己主張をし、富みを誇り大量消費を賛美さえする。合法的ならひとのものの略奪も恥じるのがなくなってきた。現代の希望は、少なくないものが、「けもう」である。

（希望は美德である）現代という時代そのものは、大量生産・大量消費を肯定していて尊大で「希望（けもう）」に浸っているのだとしても、個人的な心情においては、そのことを大それた食欲などと感じてはいない。中世の日本では否定され唾棄された「希望（けもう）」は、ごく自然の世俗の事柄とされ、肯定される「希望」となっている。しかも、他者に配慮し穏やかに「希う」ものとして、希望は、かなりの美德扱いである。希望という姿勢は、現代では常に善的であって、悪と自らの思うようなものは、決して希望とはしない。各自の希望は、真摯である。

希望は、希うものとして控え目である。希望する者は、「遠慮」（はるかな慮り）をもち、周囲・他者をふまえていただくものとして、自身の希望について、恥ずかしくないものなどの自己了解をもつ。一方的な要求なのではなく、「希う」のであり、相手や周囲に頼んで、自他に了承しうる穏やかなものが希望の内容になる。希望の関与者に十分な配慮をしての、合理的で節度をもった求めが希望である。関与者の自主性を尊重し、かれらの拒否、その希望の不達成にも配慮している。どんな卑近なものであっても、希望は、謙譲・遠慮の道徳をもったものになる。

希望には、理念型として、ささいで卑近な希望と、はるかな根源的希望をあげてよいのではないかと筆者は思うが、いずれも善である（両方の希望の違いは、その否定において顕著となる。ささいな希望が否定されてもせいぜい失望する程度であるが、はるかな希望の否定は、絶望など深刻なものになる）。ささいな希望、たとえば、「明日の朝食の希望」は、それ自体は単なる選択であって、倫理的に善というべき内容はないが、それでも、やはり、倫理的な心性に発する。つまり、単に選択するというだけではなく、食事を用意する者へ配慮し「こいねがう」という姿勢をもつのである。他方、はるかな希望は、自分でこの希望＝目的をかかげて、これに生きることになり、そのひとが何者であるかは、しばしば、そのはるかな根源的希望がなにであるかによって決まる。裁判官になる希望をもっているから、その現在が法学部生となっているのである。かけがえのないおのれの人生とその希望には、いいかげんな態度はとれない。自身にとって誇らしいものが根源的では

るかな希望となろう。倫理的に高邁な姿勢をその希望はもっていると言える。かつ、自主独立の精神のもとに自身でそう生きるのだとしても、希望は、単にひとりで「志す」「志願する」のところが、「希う」姿勢をもって、周囲に配慮し謙虚である。ひとりですのだとしても、周囲に、「自分だけである好き勝手を許してほしい、見守ってほしい」と言っているのであり、慮りに富む。

3. 希うことのできる客観的可能性

(ひとが変えうる、自由の可能性) 実現の可能性があれば希望できるが、その可能性には、人が関与でき、自由にできる面がなくてはならない。狭義の(日本語の)希望は、傍観的な期待などところが、実践的で主体的なものである。ひとの関与をこぼむ自然の過程には希望はもたないように思われる。「明朝も太陽が昇ること」を希望する現代人はいない。まちががなく実現されるもの、つまりは必然的と判断されるものは、人為であっても希望の対象からは外される。夕食にラーメンを作っているのを見ながら、これを希望することはない。仮に希望をその場面で言ったとすると、それは、「本物のラーメンを作れ」と言って、現につくっているラーメンを拒否していることになる。必然的にことが展開するものについては、もはや、「希い望む」ことは、不要・無用であり、それは、希望の対象からは外される。希望は、人為をもってする自由の可能性のもとにある。

さらにはそれが人間の制御できない偶然性のもとにあるものも、厳密には希望の対象とはしないのではないか。希望は、能動的に実現していくもので、自身や周囲の者が関与でき自由にできるものを、乞い願い、望み求めるのである。ひとが一切関与できないもの、まったくの偶然にとどまるものは、必然のものや不可能なものと同様に、願望や期待の対象とはなっても、希望の対象にはならないであろう。「あすの晴れ」を「期待」はできるが、「希望」することはできない(英米では、天候を自在にできるわけでもなからうが、「晴れ」を hope (望む) できる)。

純粋に偶然性からなる「宝くじ」は、当りの3億円を「期待」したり、「夢見る」ことはあっても、これを「希望する」ひとは、いない。希望は、自他の主体的な努力を求め、目標の希望を能動的に実現していこうとする実践的なものである。まったく偶然にとどまり、一切の実践的関与が無効だと分かっているものには、希望は、もたないというべきではないか。偶然性の賭け事、宝くじへの参加は希望できるが、それは、宝くじを買うことが、買わないことも可能な自由のもとにあるからである。だが、3億円の当りを希望することはできない。

(高い(希有の)価値あるものの創造可能性) 希望の対象は、ひとの自由な営為のもとにあるが、希な望みとしては、月並みの営為ではない。希望は、「希」有の価値あるものへの

「望」みである。しかも、それは、単なる希有の最高の価値ではなく、手の届く、実現可能性のあるものに限定された最高のものである。一方では、ひとに希う希望であるから、客観的価値秩序のもとで自身に許される最高の限度がどこにあるのかを踏まえ、他方では、個人的な好みとしての主観的な価値秩序における最高のものをはかって、これを希い望み求めることになる。入試での希望の高校や大学は、学費など他のことを考慮する必要がなければ、自身の個人的な志向、専攻したいものと、模擬試験等での客観的評価をふまえて選び出される。自身にとって現実的に可能な最高の、いわば希有の価値あるもの（その人間的営為）が希望の対象・目的となる。

未来に目を向けた希望は、高い（希有の）価値あるものを無から創造していく。求めるその目的は、未来にあり、いまは、それが無い。ただし、その未来の希望への可能性は現在にある。その未来の目的が現在からみて達成可能であれば、その可能性はいくら小さくても希望はできる。その展開が不可能でなければ、これを試み、その実現の方向へと可能性を高めていくことができる。希望は、無を有と化す創造的な可能性のもとにある。もし今が無でなく有か有に近ければ、希望は不要である。婚約したら「結婚の希望」はいわない。それが無でしかないところで「結婚の希望」は成り立つ。ブロッホは、「未だ無い *Noch-Nicht*」「新規のもの *Novum*」¹⁰⁾の規定をもって希望をとらえるが、この無は、明るい新規の未来に向かって開かれた「まだ無い」無であって、「もう無い」有り得ない無とはちがう。それは、（希有の）高い価値あるものを生み出す無であり、ひとをひきつけ駆り立てていく未来の新規のもの可能性である。現在のその無は、実在的な無であり、観念的には、つまり、希望のめざす目標・目的としては、それはしっかりと希望主体のうちに存在してその現在を方向づけている。希望の達成、その創造は、この未来の新規の観念とその（現在における）無を、実在化し有化することである。ブロッホは、「いまだ生成していない可能性への志向」¹¹⁾が希望であると規定する。希望は、現実的にはいまだ無い新規の可能性、希有の価値をもつその可能性を現実化し有らしめていく、「無」から「有」への「生成 *Werden*」である。

（目的論的可能性）「希望」の可能性は、目的論的可能性である。「期待」は、その基本は、因を踏まえ、そこに期待するもの＝果の可能性を見るだけの因果論的可能性のもとにあるが、希望は、はるかな未来の目的に可能性を見出す。期待は、いますでに存在しているもの（因）をもって、すぐ先に同じ存在が顕在化することを見る、いわば有から有への単純な展開である。犬は、えさのにおい（因）がすると、食事（果）を期待して尻尾をふる。だが、われわれは、犬には希望をいわない。希望は、人間のみがその生の基本形式とする、高度な目的論的営みである。希望は、希有の価値ある未来の目的を観念に描き、それが現在は無であるからこの無を有化しようと、現在に手段（因）を見出し、未来の目的の実現

(果)へと実在的な歩みを進める、目的論的で創造的な可能性のもとにある。もちろん、単なる願望とちがって、その未来の目的=希望の糸は、細々とでもこの現在にまで連綿とつながっていて、現在において可能となっているのであって、希望する者は、その未来(目的)と現在(手段)をしっかりと把握している。

身近なささいな希望でも、この目的論的姿勢は、明確であり、期待の因果論的姿勢とは区別される。あすの朝食に洋食を希望するのと、これを期待する姿勢は異なる。期待するものは、すぐさきに結果を見ていて、それをさきどりした心身の態勢をつくるから、朝の洋食の「ジャム」を思って口内には唾液を出すことになる。だが、希望は、明朝の洋食を選択するのみで冷静である。目的としての洋食とそれに到る過程(手段)を見通しながら、心身は目的とは距離をとって、その手段の現在に反応するのみであり、「じゃ、今夜は、和食にしておくかな」と現在を固める。

「みにくいアヒルの子」は、未来の白鳥(=目的)という希望のもとにあった。白鳥でない現在はそれの無であり醜い存在だが、白鳥という希望は、その無に耐えさせる。希望は、その現在を手段とし犠牲としながら、これをかなたの理想・白鳥へと飛翔させていくのである。期待は、現に有るもの(根拠・因)から、その顕在化することを読むのみで、大きな「アヒルの子」のさきには、「おいしそうな北京ダック」を期待するだけである。

(リスク・賭けとしての可能性) 希望は、未来にあり、その目指すものが実現できる保証はない。つねに不確定の部分を残す。自身実現に努力するし、周囲もその援助をしてくれるとしても、実現されるかどうかは、分からない。賭ける以外ない部分が残る。

賭けるというと、「信じる」ところにも、不可知のものを信じるのだから(知りえたものは信じる必要がない)、賭けるということが出てくる。信では、その対象(情報)について、常に疑いの余地を残しているが、懷疑を停止して、これを真実とみなして受け入れ、これに賭ける。希望も、未来の希望の内容が実現できるかどうかは、未来のことだし不定であるが、これが実現できると賭けるのである。

ただし、信の場合、真実である確率は、高い。その裏づけ、真実であることの根拠は、十分なものをもっている。そうでない場合は信じることはできない。これに対して、希望の場合は、それが実現される可能性は、かならずしも高くなくてもいい。高くないどころか、不可能でなければ、可能として希望することができる。希望の実現は未来のかなたにある。信じることが、知るという認識上の問題であるのに対して、希望は、意志するもので実践的であり、みずからがその希望を実現していこうとする。実現が不可能と阻止されているのでなければ、その実現の可能性はひくくても、可能性は残っている。これに賭けることは無意味ではない。災害でのひとの救出など、生存の可能性は低くても、救出の希望を捨てず尽力する。生存している状態で救出される可能性はひくくても、その可能性が

あるかぎり、これをあきらめず、希望を失わず、希望を現実のものにしようと必死になる。希望は、わずかでも、その可能性があるかぎり、あきらめることはない。

「賭ける」のは、そのことが確実でないものについて、これを確実と見なして、そうならない場合のリスクを承知してひきうけ、あとはその成り行きに任せ受け入れることであろう。信じる賭けは、それが虚偽である場合のリスクを背負う覚悟をすることにある。希望の場合、その希望の実現は困難なことが少なくない。はるかな未来のことであれば、分かっているリスク以外の未知の危険のまにかまえている可能性もある。希望は、大きな賭けとなる。だが、信とちがって、それらのリスクを自身でへらすことができる。希望実現への意欲を高め、リスクを避け、これ乗り越えて、その方向を希望実現の可能性を高める方に向けかえることもできる。

4. 自らが叶えていく主体的可能性

(意欲すれば、可能となる) 不可能でなければ、希望することが可能である。極端をいえば、矛盾なく現実の中でことを始めていくことができるものならば、なんでも可能で、希望できるということである。キルケゴールは、絶望を分析するに際してそういう希望を「憧憬可能性」と言って批判的にとりあげた。その著『死に至る病』は、絶望を死病と捉え、絶望の諸相を論じるが、そこでは絶望の反対である「希望 Haab」については、これを「可能性 Mulighed」という規定のもとにとらえる。キリスト教の根本思想になる天国への希望について、「救済の可能性」を「希望する haabe」ものといい、「可能性」としてこれを論じる¹²⁾。そして、世俗における軽薄な希望を批判して、深く考えず始めれば、どんなことでもさしあたりは可能で、そういう単なる可能性に留まり続けるものとして「憧憬」の希望をいう。幸福の青い鳥をさがしてどこまでもかなたへその可能性を求め憧憬して (ønske(=ask,wish))、求めることを得ない「憧憬可能性 Ønskets Mulighed」¹³⁾としての希望である。

キルケゴールは、否定的に論じているのであるが、希望は、本来、「憧憬可能性」のもとにあると言っていいのではないか。絶望から希望への歩みは、不可能という0%を若干超えた(実在的な)可能性にはじまる。その0%をわずかに超えただけの可能性をつくるのは、現実の中に降り立って希望するという意志である。絶望(可能性0%)の闇夜にいながら、空を見上げて一点の星を見つけるのが、希望のはじまりである。闇夜にいることは、同じである。ちがいは、はるかなかなたに、小さくかすかな、しかし輝くもののあることを見出して、これを見上げるのかどうかという、主体性の有無にある(ただし、同じ絶望の闇夜でも、暗雲が覆っていたのでは星は見つけられない。星空になるのを待たねばならない)。

それを、現実的に実際に自身に引き受けるかどうかの違いである。これを引き受ければ、希望となり、可能となる。逆に、100%可能でも、希望しないものは、実現しない。「黒い頭髪を金髪にする希望」は、100%かなえられる。だが、希望しない限り、だれもそれを実現することはできない。希望は、これを意欲するかどうかという主体性の問題となる。ゼロに近い可能性であれ、100%に近い可能性であれ、それが希望になるのは、これを引き受けるかどうかという主体の意欲しだいのことである。

(自他の参与で高められる可能性)「信じる」のは、真実として信じるのだが、その真実度を高めるためにと実践的に関与することはない。信は、知・認識の領域に属す。だが、希望は、希望するものを実現する実践であり、その意志である。無から有をつくり出すのである。真実(有)らしいものを真実(有)と見なすのみの傍観的な信ではなく、実在的に関与して無を有とし有を無としていく実践的なものである。未来に描かれた希望を実現する活動であり、その意欲である。その実現が阻止されて不可能になっているのでなければ、その実現の可能性はある。単なる夢・願望の場合は、現実的には何もしないから永遠に夢に(現実的には不可能に)留まる。しかし、希望は、ちがう。実在的にその希望実現の過程に踏み込み、その実在的歩みを始めるのである。はじめはその可能性は0%に近くてもよい。可能性は、実践のなかで、これを高めていける。その機会があるたびに、希望の意志は、希望実現の方向を選択しその努力を重ねて、実現の可能性を高め、ついには、この希望を現実のものとし、そのゴールを得ることができる。

希望は、ひとの働きかけでその実現の仕方や方向を修正しながら、その可能性を高めていくことができる。これを希望する者自身で変えられるものなら自身でそうし、その関与者・担い手があってこれが変えてくれるのであれば、これに頼むことになる。希望は、多くは、この自他の両方にかかわり、自身が尽力し他者にこいねがって、これを実現していくのである。

自身で可能なものは自らで希望をかなえていくとしても、自分のみで目指す場合、それは、「志す」志望であり、希望とはいいにくい。aを「志す」、「志望する」こととちがひ、aの希望では、「aをPさんに希望する」のである。志す場合は、「Pさんに志す」とはいわない。他者に関係なく、これを実行する。だが、希望は、本来的に他者にかかわり、「Pさんに」ということとなる。希望は、それを実現するに際して、尽力してくれたり、許容してくれる誰かにかかわる。希望は、ひとりしてはならないのである。等身大の希望をいさぐのであるが、その場合、自身の能力を測り自覚しているとともに、自身の周囲の関係者について、その希望に自分の場合どの程度参与してもらえるものかと測っている。家庭の資力の問題で、なくなく自身の進学希望を断念する。いくら自身が能力とやる気があっても、周囲の事情から、進学希望は、取り下げざるをえないことがある。

英語の hope(望む)は広く、「希望」には限定されず、ひとりして自然に向かっても hope できるようなのであるが、単にひとりして望むことにはあまり倫理・道徳は関与しなくてもよさそうだから、倫理的な徳目としての「希望」は、日本の「希う」希望ほどのことはないとしても、周囲の者を気にする方向になりたつではないか。希望は、自分のもとにはない価値物を求めて他者に依頼・依存することもあり、周囲の者への配慮をふくんで成立するのがどこでも一般的ではないか。トマス・アキナスの『神学大全』の「希望 spes」論は、希望を高い徳目と位置づけ、これを「可能なもの possibile」のもとに捉え、その希望の可能性の実現について、自己とともに他者に負うことを指摘する。希望は、「われわれ自身により per nos ipsos」「他者達によって per alios」「二重に dupliciter」「可能」なのだと論じる¹⁴⁾。この自と他によるという点は希望に肝要とみたのであろう、希望を論じるその「第十七問題」の「第四項」は、他者にどのように希望を希うことができるのかをテーマにしている。希望の目的(本論文集にいう a (W))を「目的因 causa finalis」と規定し、それと対で希望の援助者(本論文集のいう P)を「作動因 causa efficiens」と規定して、第一の援助者の神と、第二の援助者「人間 homo」をあげている¹⁵⁾。希望は、未来に向けて高い目的をかかげ、周囲のひとにこれを希い、自らに意欲していく、高度に知的で社会的な営みである。

(選択可能性) 未来は、未定であり可能なものの方向は、ひとつに限定されてはいない。多くの可能性がある場合、すべてを求めることはできず、どれかに限定することが必要となる。その価値の高さの他に、自力による実現可能の程度、希望をかなえてくれる他者の能力とそれを自分の希望にまわしてもらえる程度、その欲しさの程度等、諸種のことを考慮しての、いわば総合点の一番高いものが第一に希望する対象として選ばれることになる。しかも、選択して終わるのではなく、そこから始まるのが希望であるから、将来的な視点がおのおのについて加えられるのでもある。どうしてもダイヤが欲しいのであれば、それを希望として、自身の購買能力を飛躍的に伸ばす方向に生を駆り立てることもできる。不可能でなければ、希望はできる。何を選択するかは、その主体しだいということが希望では大きい。絶望していても、どこかに、暗闇のなかに、かすかに瞬く星をやがて見出せる。

「選ぶ」とは、「捨てる」ことである。夢を断念するのもある。現実的希望として法学部を選んだものは、夢多いが就職のことを思って、文学部は断念したのかもしれない。ただし、いったんは捨てたとしても、希望の場合、そこから出発しただけなので、希望の道は変えられる。未来へと時間的に展開するなかで、その欲求の程度とこれをめぐる状況の変化によって、一番望ましい対象は、変わる。

同じように未来に向かっているものでも、信念・信条は、自らの生きる原理として不動

のもので、いったん選んだら、そう簡単には変えられない。簡単に変わるようなものは、もはや信念ではなくなる。だが、希望は、いくらでも変えられる。希望は、かなたの多くの可能性のなかのひとつを選択しているのみであり、その横の希望の星の方が魅力的になったなら、その方向へと目を移しても差支えないことが多い。第一、希うのであって、相手に合わせて謙虚である。希望では菜食（主義）を望んでいても、ときに肉食にしても、菜食（主義）の希望は、希望である。家族が肉入りのカレーを食べるとき、信念のひとは、この肉を拒否するが、希望のひとは、「あすは、菜食にしたい」と希望しながら、穏やかに肉食につきあう。

5. 日本的希望としての「第一希望」

希望（選択）できる多くの可能性があるのだから、自分の欲求、他者の援助の程度、社会的環境等から総合評価して、一番のものを選択するとしても、その下に、第二に希望するものをもつこととなる。第一希望のあとに第二希望、第三希望がありうる。日本語では、文字通り、第二第三「希望」という。端的な希望、「希」有の最高の「望」みは、第一のもので、第二以下は、第一のものが叶うかぎり、希望とはならない。その点からいうと、第二（の最高の）希望は存在しないのではある。が、第一がだめなときには、そのつぎのものを希望としうるのであり、はじめから、第一のみでなく、第二第三の希望をいっておくことは、希望についての現実的対応である。第二第三のものは、希有の希望の代用だというのではなく、これらも自分にはもったいない希な望みに属することで、ありがたいものなのだということである。他者に参与してもらい、あるいは、これに依頼しての希望であれば、慮りに富む捉え方になる。

日本語では、いくつかの選択肢から一つを選ぶようなとき、いやな義務的なことがらですら、しばしば「第一希望」「第二希望」をいう。だが、英語では、そういう場合は、**first choice**（第一希望）と「選択 **choice**」であって、希望とはいわないようである。肝要なことはここでは確かに「選択」であるが、「希望」をもってすることで、当事者や周囲への気づかいを表明しているのである。大学受験では、A大学が「第一希望」で、B大学は「第二希望」というが、真に希望しているのは、「第一」のもののはずである。「第二希望」以下は、おそらく、「希う」ような「希望」ではない。「第三希望」などは、もう「失望」を越えて、「絶望」に近い「希望」となる。それでも、日本語では「希望」とする。第二希望以下は、本当は乞い求め高く望むようなものではないのだが、ものごとは自分の思い通りになるものではなく、これを自身の次善の「希望」としなくてはならないと、考えるのであろう。あるいは、受験の機会自体が恵まれたことで、与えられた恵みを、自身としては気は進まないけれども、謙虚に、ありがたい「希望」と見なして、第二以下も希望と表記して周囲

に気を使っているのであろう。

日本語は、端的に自分の主張をするよりは、周囲に配慮して、相手の立場になつてものごとを表現する傾向がつよい。第一人称が（Iとかi c h）ひとつしかない印欧語族とちがいで、周囲に合わせて「俺」「ぼく」「わたくし」といい、「おとうさん」「先生」等と自らを表現する。その相手に配慮しての表現が、「希望」でも出てきているのであろう。いやなもの・義務的なものの選択においても、相手が好意的に提案してくれている場合、その気持ちに配慮して、そのよりましな選択を「第一希望」という。食事当番を朝するか、昼か、夜かと分担する場合、本当は、どれもいやだけれど義務的なことなのでと選択するとき、夕食当番が「第一希望です」という。選択させてくれていること自体ありがたいことであり、「いやがっていませんよ」と自己を抑えて周囲に配慮した表現をするのであろう。

「希望退職」「希望者」も、ごく日本的な希望であらう。「希望退職」は、自分の主張の明快な表明を大切にする自尊の欧米では採りにくい表現であらう。こんなものは、当然、日本でも、みずからの望み求める「hope（希望）」ではありえない。これは、依願退職のように退職する者が個人的理由でやめるとき言うのではない。会社側が人員整理せざるをえない場面で、従業員に退職を求めるとき言われる。「希望退職」には、退職を表向き「希望」する者の、周囲への複雑で大きな思いやり・配慮がある。本心においては、退職を希望してなどいない。だが、ひとつには、雇用者側が苦境に陥って退職者を求めていることがあり、そこで強制的な指名解雇でなく、これを募っているということがあって、これには被雇用者としても応えるべきで、応募するに際して、「いやがってはいませんが、自身の希望です」と気づかっていることがある。さらに、残る同僚に配慮して、「自分で希望するんだ、心配無用！」と言っているのでもある。そして、雇用者側は、その「希望」をよく理解しつつ、真に希望する者がいたらまずはそのひとからお願いしたいのはもちろんだが（これが希望退職の用語の出所であらう）、あまりいやでなければ、申し訳ないがと、その退職者の自尊心・尊厳にも配慮し、「自らが望んでのもの・希望だ」というその志をくみとり敬意を表して、なくなく「希望退職者」を募るのである。

「希望者」も、かならずしも、望んで喜んでというものにかぎらない。気乗りしない事柄（先の夕食当番など）であっても、それへの「応募者」を「希望者」とする。応募者がこの表現に違和感をいだかないのは、募集側や周囲に配慮して慎ましやかにのぞんでいることがあるからであらう。ただし、応募内容が苦労・犠牲の大きいもの場合は（例えば義勇兵）、これにあえて応じるのは、「希望」よりは「志願」というから、希望は、その点では、一応は望んでいるものうちにあるのではあろう。もちろん、志願も、相手や周囲に配慮する必要があるれば、「心から望んでいることです」と「希望」をもってすることになる。日本の希望は、「希う」という契機を含み、おのれを低くして謙虚に構え、控え目に依

頼する傾向が強く、周囲への慮り・気づかいに富むものになっていると言ってよいであろう。

註

- 1) Ernst Bloch; *Das Prinzip Hoffnung*. Bd.1, Suhrkamp Verlag, 1970, S.389.
- 2) Bloch; *ibid.* Bd.1, S.126.
- 3) Bloch; *ibid.* Bd.1, S.391.
- 4) 『仏説無量寿経』 卷下 (『真宗聖典』 法蔵館 昭和36年 97頁)
- 5) 『仏説無量寿経』 卷下 (『同上書』 104頁)
- 6) 『一遍上人語録』 卷上 百利口語 (『日本古典文学大系83 仮名法語集』 岩波書店 昭和51年 87頁)
- 7) 『一遍上人語録』 卷下 一 (『同上書』 121頁)
- 8) 『一遍上人語録』 卷下 九九 (『同上書』 151頁)
- 9) 鴨長明『発心集』 第三 (35) 「證空律師希望深事」
- 10) Bloch; *ibid.* Bd.1, S.4f.
- 11) Bloch; *ibid.* Bd.1, S.5.
- 12) *Søren Kierkegaard Samlede Værker*. Bd.15, Gyldendal, 1982, s.125.
- 13) Kierkegaard; *ibid.* Bd.15, s.94.
- 14) Thomas Aquinas; *Summa Theologiae*. II-II, Q. 17, Art. 1.
- 15) Thomas Aquinas; *ibid.* II-II, Q. 17, Art. 4.

Die Hoffnung und die Moeglichkeit

— vom subjektiven Wunsch zur sicheren Hoffnung —

Yoshiki KONDO

KI-BOU(Hoffnung) unterscheidet sich von GAN-BOU(subjektivem Wunsch). Auch eine in Wirklichkeit nicht realisierbare Sache und ein unveraenderbares Ereignis kann man sich wuenschen. Aber man kann nur auf die Sache hoffen, die mehr oder weniger in Wirklichkeit realisierbar ist. Wenn man dann feststellt, dass die gehoffte Sache doch nicht realisiert wird, wandelt sich die

Hoffnung in SHITSU-BOU (Enttaeuschung) oder ZETSU-BOU (Verzweifelung) um.

KI-BOU und KI-TAI (Erwartung) sind auch nicht identisch. KI-BOU hat eine teleologische Eigenschaft. Eine Hoffnung entsteht, nur wenn man ein realisierbares Ziel feststellt und sich darum bemueht. Dagegen hat KI-TAI eine kausale Eigenschaft: d.h. man wartet einfach auf ein Ergebnis, ohne eine Aktion von sich aus zu ueben. Somit kann man in der Regel nicht auf die Sache hoffen, die von der Notwendigkeit bestimmt ist oder dem Zufall ueberlassen bleibt, weil sie voellig unabhaengig von der menschlichen Aktivitaet bzw. Bemuehung ist, die mit der Hoffnung der Realisierbarkeit ausgefuehrt ist.

KI-BOU ist eine Art der Tugend. Das Zeichen KI stellt KOINEGAU (bitten) dar. Das heisst, man bittet jemanden um irgendetwas mit einer bestimmten Hoffnung. Somit zeigt man Abstand, Respekt und Ruecksichtnahme ihm gegenueber. KI-BOU ist ein hoch tugendhafter psychischer Zustand der Menschheit.

(広島大学倫理学研究会 『倫理学研究』 第 18 卷 平成 20 年 3 月)

第三章 希望・期待、ときに失望—希望は燃える—

1. 実践的で人間的な「希望」、傍観的で動物にも可能な「期待」

希望と期待は、好ましい未来の可能性をふまえて、その実現を願い求める。その点で、両者は、よく似ている。だが、期待する場合は、自然そのものをその客体とできるし、「期待する」ことは、動物にもできるのに対して、少なくとも日本語の世界では、「希望する」主体は、人間以上の存在にかぎられ、希望の客体も、自由な人為に限定されているように思われる。

対象の方からいうと、期待では、「雨を期待している」というように、人間を介在させることなしに、直接に自然にも期待できる。だが、希望では、自然に向かって、「雨を希望する」とは言えない。「雨がふる」という自然現象を希望の対象にはできない。かりに「雨を希望する」ということが可能なのだとすると、それは、人工降雨の類いを誰かに希望しているのである（英語の希望 hope は、期待や願望も意味するようで、（自然の）雨を「hope 希望」できる）。

その主体(主語)の方についても、期待は、希望よりは相当に広い。植物が雨を「期待する」ことは無理であるが、若干の未来を予期・予想できる能力があるものなら大丈夫で、蜘蛛が「虫の飛来を期待している」といえるし、犬や猫は、もっと高度に期待する能力をもつ。犬は、えさがそろそろもらえとか、散歩らしいと「期待」する。期待の対象は、感覚的にも予期可能なすぐ先の未来になり、飼い主をみて、その動きから散歩を見込み、予「期」でき、受動的に「待」ち望み、期待できる。だが、「希望する」能力は、犬や猫では、まだ無理である。飼い犬が、「もっと遠くまで散歩に連れて行って下さい」と「希望する」ことは、日本では許されていない。

（希望は、はるかなかなたを見る） 期待は、この現在とそれに結ぶすぐ先の結果を見るのみだが、希望は、まず、かなたの（未来の）目的を描くことから始める。「期待する」犬は、飼い主がハーネスを手に持ったのをみて、それに連続する散歩を待ち構える。だが、散歩を「希望する」人間は、逆に、かなたの散歩（＝目的）を想起することからはじめて、そのために犬をお供にしようかを思い、ハーネスを探し出して犬をつないで、散歩に出かける準備をする。希望では、まずは、その現実のもとには現前していない目的を観念的に定立することからはじめる。希望は、かなたの「希」有のものを「望」み見る。はるかな希望などになると、何十年も先のことを想定して希望＝目的を観念において描き出す。はるかな先の希望の目的は、それに到るに多くの手段・ステップをもっているから、現在の出発点においては、しばしばそのかすかな気配も見出せないものになる。犬猫はもとより、子供にも、はるかな先の希望を描くことはむずかしい。

（希望は、低い可能性から出発してよい） しかも、希望の場合、その実現可能性が相当に低いものでも、実在的にその可能性があって不可能でないと判断できたら、これを希望できる。若者は将来の仕事について、どんなものでも希望できる。可能性はほとんどなくても、不可能でないかぎりそれを目ざして第一歩を踏み出してみることができる。努力しだいでそのはるかな

希望は、しだいに現実味を帯びてくる。現在からは、可能性のかすかにしか見出せないものをもしばしば希望とする。期待の場合は、そんなかすかな可能性では駄目で、現在の因のもとに明確にその結果を推測することができなくてはならない。犬は、飼い主が餌箱に近づいて、餌のもらえることが明確になって、やっと期待して尻尾をふる。ひとでも、期待は、現にある事実のもとでその帰結が見込めるようなところにいただく。受験の「広大合格への期待」は、現に広大受験で良い点をとって、その可能性が確かと自信のもてるときいう。だが、「広大希望」は、そうではない。高校入学時には、もう「広大希望です」ということができる。かつ、その希望の実現可能性は低くてよい。さしあたりは、不可能に近くてもよい。はるかな先であり、少しずつ可能性を高めて行ければ、やがて、希望は大いに達成可能となってくる。

(希望は、目的論的展開) 期待は、因のすぐ先に果を予期するだけの因果論にとどまるが、希望は、目的論的である。はるかな未来にまずは観念として目的をかかげ、それから現在の方向にとさかのぼって、目的のかなう諸手段をたどりながら現在にまで帰るという観念のプロセスを先行させる。その後、このプロセスを実在的に逆にたどって希望の目的を実現するために、手もとの実在的手段に実際に働きかけることをはじめめる。単純な目的的行動なら猫もとれる。猫が、ガラス戸の向こうにねずみを見つけて、直接的には手の届かないことを知って、回り道をして出入り口にと遠のいて、外に出て、ねずみを追いかけるような場合である。そとの目的としてのねずみの捕獲を描いて、そのためには、一旦は、そこを離れて遠回りしなくてはならないと手段を選択して、この手段を媒介にして目的としての捕獲に到る。ただし、この猫の目的的行動は、なお希望には遠くとどかない。希望は、目前にはない未来を描いて、そのはるかな先に高い理想となるような目的を定立する必要がある。

目的論的な営みは、犬猫ではまだ例外的であろうが、人間では、その生に基本的である。一々が目的論的になっているのが人間の生である。台所に行くにも、なんのためにいくのか(目的)を明確にしていく。年にとって、台所にビールをとりに行ったものの「なんのために来たんだっただか?!」ということになると、人の根本能力の喪失を思っジョックを受けるぐらいに、目的的に日々生きている。感覚や欲求の刺激を受けても、それへの直接的反応をもってする生活は少なくなっており、それがあっても(例えば空腹)、一旦は、これから離れて媒介的になり、抽象的観念的な世界を描き知的な反省をへて反応していくのであり(すぐ食べるのではなく食事時間を想起する等)、その多くが目的論的対応になる。なかでも、人生をになうような希望は、はるかな理想・目的を描いたもので、高度に知的で社会的な目的論的営みになる。

(希望は、自由な人為を対象とする) この希望がその対象・客体とするものは、日本の場合は、自由な人為に限定される。期待は、ひとつさきの結果を予期・予想して見込むだけなので、因果的展開をする森羅万象をその対象にできる。だが、希望は、実践的で目的論的な営みになり、ひとが意欲しこれを実現していこうとするところに言う。意志・意欲がその成果を出せるよう

な事柄を対象とする。自然のこと、必然・偶然のことは、人為の自由にならないから、日本語にいう「希望」は、これを対象とはしない。明日の快晴を「期待する」ことはできるが、これを自由に出来ないかぎり、「希望する」ことはない。人為であっても、ひとの意志を受け付けないう必然・偶然のものは、希望の対象とはならない。「ご希望をうけたまわります」と希望をかなえてあげられるのは、自分が自由に出来る事柄に限定される。実現不可能なことを知りながら「よろこんで、ご希望をうけたまわります」とはいえない。日本語の「希望」の対象は、かなえることの可能な実践的なものであり、自由な人為に限定される。

(希望は、最高の価値物を観念的に目的として立てる) 希望の目的は、卑近な希望は別として、人生論などで問題となるそれは、日々の目的のあり方からいって、それからさらに一層遠くに距離をとったはるかな目的である。希望の対象は、「希」有の「望み」として、最高の目的であり、価値的にも、遥かかなたのものである。大学受験の「第一希望」は、自分に可能な最高の大学である。「希望の宝石」は、入手可能な最高の宝石である。ただし、夢や願望とちがひ、現実的に叶えることの可能なものが希望の対象であり、現つの自分に可能な最高のものである。

希望は、最高のものを求める点、夢に等しいところがあるが、夢や単なる願望との決定的な違いは、希望が実現可能性を踏まえていることである。はるかな目的を観念において立てるのだが、それがこの現在のもとで可能であることを測っている。希望する者は、現実的にその目的にいたるための最初の実在的手段を現在のもとにもっていて、その実在的手段をにぎっている。そのことにおいて、希望は、夢とちがって実在的な世界に入り込みえて、実在的実践的に最終目的までを展開していくことが可能となるのである。

希望の目的は、実在世界での可能性をふまえつつ、その実現のための諸手段とともに、まずは観念的に立てられる。そして現在の実在的な手段（因）から、実在的現実を一步一步時間を踏みしめて未来の目的（果）へとたどっていくことになる。期待には、この希望の目的定立などの観念のみの先行過程は不要である。期待は、はじめからその関心を実在的な事実世界に留めたままで、現にある事実（因）をふまえて、事実として可能な一歩先の結果を予期するだけである。

(希望は、実践的で、意志・意欲に属する) 期待は、傍観的だが、希望は、本質的に実践的である。「教師になること」を「期待している」という場合、教師になるのは、周囲のだれかであり自分ではない。だが、「希望している」というときは、教師になるのは自分自身のことになろう。希望は希望する者の意志・意欲の問題であり、実践的なものになる。期待の根本は、認識にあり、希望のそれは、実践にある。

ひとが未来に描く遥かな希望は、それに自らが主体的にとりくみ、自身の人生をそれにかけて生きるものになる。「教師になる」希望を未来に向けて持つものは、教育学部の学生となって、その希望＝目的達成への道程をひたすらに歩む。はるかな未来を描く希望は、輝かしい未

来を創造するのみにとどまらず、現在の充実した存在そのものをつくることにもなる。

(希望は、ひとに希う)希望にと自らが生きるのであるが、ただし、志す「志望」とちがい、自分だけで実践するには留まらない。希望は、ひとが社会的な共同存在であることを強く意識させるものになっている。希望は、どんな場合も、なんらかの形で誰かにと希望することが本質的である。ひとりする希望であっても、おそらくは、ひとりで勝手にすることを許してほしい、見守ってほしいと周囲に対して願うのが希望ではないか。

希望では、未来に希有の価値ある目的を描き、これを望み求めるが、同時に、そこには、だれかに希(こいねが)い乞い求める契機がある。単に自分の要求を一方向的に押し付けたり、周囲と無関係に自分ひとりで志すというものではない。「ケーキがほしい」とストレートにいうのとちがい、「ケーキを希望する」場合、日本語の希望では、間接目的語をもつ。ほしいという場合「ケーキを店員にほしい」とはいえないが、希望では「ケーキを店員に希望する」という。希望は、常にひとを前提し、これに希う。「請う」のであり、「願う」のであるから、丁寧に謙虚な姿勢をもって向かいあう。ただし、謙虚ではあっても、希望は、卑屈にはならない。

「貴社への就職を希望しています」というのは、「雇ってください。お願いします。なんでもしますから！」と土下座するのと違い、背筋を伸ばしての意志表明である。可能なことは自分でという自力・自律の精神があり、おのれを省みつつ最高のものを目的にかかげるのであり、「哀願」などと異なって矜持・自尊の態度を崩すことはない。希望の担い手・関与者となる者に対して控え目にかまえ、かつその相互の自律・自主性を尊重し、その間で求めうる価値の程度を了解しあいながら、請い願うといった高度で微妙な感覚が、日本の「希」望には求められる(なお、希望には、「ケーキを希望する」ような些細な「卑近な希望」から、人生に肝要な「はるかな希望」までがあるが、本章がいうそれは、基本的には「はるかな希望」の方を想定している)。

2. 「希望」の実現がせまって、人は、これを「期待」する

ひとは、同じことについて、希望と期待をいう。就職活動について、希望し期待する。子供の将来について、希望し期待する。期待は犬でもできるが、希望は人間にのみ可能なことだとすると、ひとにおいて、まず期待があって、そのあとに希望が成立するのかというと、そうではなく、一つの事柄に関しては、その逆が両者の展開の順になる。

(期待は、すぐ先のことを見込むだけ)企業に就職しようと思うとき、願書をだして受験するまでは、「貴社に、就職を、希望します」というが、「期待します」とは言わない。期待は、面接を終えてからはじめて言えることである。筆記試験がうまくいったこと、面接も好感を持って受け止められたことをふまえ、そこから、推定できる帰結「合格」を思うことにある。因となるものがすでにそこにあって、それをもとに、生じつつある好ましい結果を予期し、そうなる

ってほしいと思うことである。希望は、未来にまずは目的を立てることからはじめる目的論的な営みで、はるかな目的を描き得ない犬にはかなわないことである。だが、期待は、目的（結果）を目前にして今の状態（因・手段）からそれを見込むだけのもので、（自然のもとにも期待は言えるから、これを含めて）単純化していえば、実在的に原因・根拠が存在しているところから結果を予期しようというもので、すぐ鼻の先に結果の見えるような因をもつ場合には、犬にも十分できることになる。

こどもに酒造の老舗をついで欲しいと「希望する」親は、こどもがまだそれを受け入れていない時点では、期待はできない。はるかな未来に酒店を子供が引きつぎ営むすがたを描き、機会あるたびに子供にもそれを言い、希望とするのであるが、こどもが「いやだ」と言っているかぎり、後継は、「期待できない」と言わざるを得ない。期待は、その希望をこどもが肯定してやっと可能となることであり、大学で発酵学科ぐらいに席をおくことになれば、それは、おおいに高まる。期待するときの現実が、酒店を引き継ぐという結果をもたらすような因・根拠となるものを有して、つまり、後継を了承したり、発酵学科に席をおくということをもって、そこから、よい帰結のなることを思い、そうなれと願うとき、期待が可能となる。

（先を知ろうとする「期待」と「信」のちがひ）期待は、いまの事実から、これを因として生じる結果を思うところにある。まだ結果は、生じておらず、なお、未知のことにとどまり、その予期・見込みは、「信じる」ことに近い。「信じる believe」とは「期待する expect」ことだということもある。信じる場合は、その未知にとどまる事柄を、必然でまちがいないものと断定し、その所与の情報への懐疑を停止し、これを真実と見なして受け入れる。そう思い込めるだけの可能性の高いものが信じられることになる。だが、期待は、そう信じられるだけの高い可能性は必ずしももっていない。そうならない可能性も前提している。太陽が明日も東から昇ることは、みんな「確信」できることであるが、あす朝の太陽が雲ひとつなく輝いてのぼることは、よほどのことがないとわが国の場合、不確定であって、「確信」はできず、「期待」できるのみである。

期待する者は、確かと「信じる」のと違い、ことの生起を不確定・不確実とふまえつつ（但し、観念＝目的にはじまる希望と違って、確かな事実の世界に終始とどまっている）、現在の事実から未来の事柄の生起を予期し、そうあってほしいと願う。期待は、自然についてもいうが、その展開の必然性の周知されているもの、つまりは、ことの確定しているものには言わない。期待は、不確定さをもっていることが前提になる。自分の期待するようにならないかも知れないという不安を交えて、「わくわく」するものがあっての期待である。「あすも太陽が昇る」ことは、確定的で、不確定でわくわくさせるようなものは何もないから、これを期待する者はいない。

なお、英語の expect は、「信」と同様に、好悪を問わず予期・見込みの状態にいだかれるも

のようで、否定的な不快な結果についても、expect(期待)する。“He expects the bus to be late”は、「かれは、バスが遅れることを期待している」ということだが、ふつうには、バスが遅れるにちがいないと見込み、覚悟しているという意味である。だが、日本語では、「信じる」場合は、好ましくない帰結を確信する場合もいうが、「期待」は、その帰結が自分にとって肯定的な、好ましいものごとについてのみ、いう。「まちがいでなく不採用だろう」とか、「こどもは酒店をつぐことはありえないだろう」と、英語では、expect(期待)するのだろうが、日本人は、こういう好ましくないことについては、「期待」しない。

(傍観としての期待) 好ましいことを日本の期待は待ち望むのであるけれども、希望のように、自身がこれに直接に手を下して関与するようなことはしない。因から果へと展開する過程を傍観し(人間的なものの場合、目的的な活動になるから、その中での因果ということになる。つまり、手段を原因とし、目的を結果とする因果関係となる)、せいぜいそれへの影響を与えるぐらいにとどめるのが期待である。酒店を継がせたい親の期待も、その子供の自主性を尊重し、それを支えるぐらいとし、これを見守るのみである。自分から独立した干渉無用の客観的世界を、そういうものと前提して理解していく態度は、科学や学問一般の態度となるが、「信じる」ことと同様、「期待」は、この客観的態度に近いところの有り様となるように思われる。ひとの期待は、受動的で傍観者にと自己を制限したものになる。

しかし、「正社員にしてもらうことを期待して、主任に贈り物をする」とか、「果物の実がたくさんなるのを期待して、肥料をたくさんやる」という期待では、希望と同様に目的を描いてそのための手段として「贈り物」をし「肥料をやる」ということであって、能動的主体的に見える。だが、正社員に取り立ててくれることを「期待」して主任に贈り物をする場合、「贈り物」=手段=因をもって、きっといい方に動いてくれるに違いないと想像し、それが大きければ「わくわく」もするであろうが、ことの展開自体は、主任に任せ傍観的になるのではないか。これに対して、「正社員」を「希望する」者の場合は、その目的を内外に明確にし、贈り物はその手段のひとつと位置づけ、別の手段をさがしたり、「贈り物」でも、希望をかなえるにはもっと必要かもとさぐったり、重ねて主任に依頼し、あるいは催促していくことになる。第一、正社員になるための努力とか意欲をしっかりとっての希望であろう。だが、「期待する」だけの場合、それらのことはせず、動いてくれそうな今の主任に贈り物をしてその気持ち(因)をひきたてることはするものの、それ以上はせず、後は任せて、よい結果のなることを、そばから願っているのみであろう。あるいは、自分のために動いてくれないかもしれないと思っても、期待では、そうでないことを願うのみであり、直接的な働きかけはせず、傍観的にとどまるのではないか。

逆に手段(因)と目的(結果)が確実な結びつきをなすものの場合を考えてみよう。遠方からの商品の購入では、「商品送付」(=目的=結果)を求めて、「送金」(=手段=因)をするが、

「希望」は、商品送付がまちがいでなく実行されることを前提にして、もし、それが実行されない場合、督促する。だが、「商品送付」を「期待する」のみの場合は、「送金」しても商品を送ってこないかもしれないと傍観的であろう。送付が実行されなくても、仕方がないと思っているのが「期待」であろう。もちろん、そうであるから、送金する者は、一般的には、「期待する」のではなく、「希望する」のである。「期待」をその場面にいうとしたら、「いい商品を」とか、「すぐに送付を」と期待することになる。これらのことは、向こう任せのことで、傍観的にしかねないことである。

「果物の実がたくさんなる期待」をもって、「肥料をたくさんやる」という場合も、結局は傍観的なのではないか。肥料をやった後は、関与せず待ち望むのみである。施肥が樹木の結実に対して影響を与えることはまちがいないが、「影響」にとどまる。影響は、ことの展開の本筋には関与せず、そのまわりからこれに肯定的か否定的な間接的作用をするだけである。いい肥料を与えたので勢いのある樹木になり(これは影響ではなく、直接的関与・作用である)、おそらく、この勢いのある木(原因)は、いい結「果」をもたらしてくれるだろうと(木が花をつけ実を結んでいく、ことの展開の本筋は傍観するのみである。そして最後、果実はあまりならず「期待はずれ」となり、結実にとって施肥は否定的影響でしかなかったと失望して空しく傍観することになったりもする)、受動的に待ち構え、つまりは傍観的に、「期待する」ものであろう。希望は、この場合、不可能である。自然は、ひとの希望を聞き入れない。

(期待は、好ましい結果を予期し、これに構えをつくる) われわれの期待は、「待」を漢字においてもつ。この「待つ」ことが、期待の傍観者的態度をつくり、かつその対象を好ましいものにと限定するのであろう。「待つ」のは、働きかけることをしないで、相手がやって来るのを、それ用に身構えてじっとしていることであり、傍観者の態度に自己を限定する。また、待つののは、どちらかという、よいことを求めてのことである。いやな人とあうときは、あまり「待ちあわせる」とはいわない。待ち遠しいのは、好ましいものごとである。

期待は、帰結を予期するという知性の働きだけにはとどまらない。好ましい帰結をふまえた享受等への予めの構えをつくる。「ごちそうを期待しています」と言うのは、その帰結を相手もたらすことを待ち望んでいる場合であるが、そこでは、その求め願っている帰結の享受を思い、心身はその準備態勢に入って、もう口には唾液すら出しはじめる。期待は、知性が身近な先を見通すものだが、同時に、それが身近なそれなりに確かなことなので、欲求・欲望がかきたてられ、期待においては、心身はその帰結を当てにした享受等の構えをつくることになる。

3. わくわくする期待と胸ふくらむ希望

「期待」では、傍観者として因からその果を推し量っているのみだと筆者が言うことに対しては、受動的に帰結の享受にこころを躍らせるだけではなく、帰結以前の過程にも積極的に参

与して、「期待では、この展開過程自体においてわくわくと興奮し、主体的であって、傍観者のというのをおかしい」と言われるかも知れない。だが、期待は、やはり、受動的で傍観者のというべきである。就職が決まりそうになり「期待する」者は、よい影響があたえられそうなら、そう働きかけることもなくはないが、それ以上に積極的なことはせず、普通には会社側に働きかけることもしない。わくわくしながら「待つ」のみである。「期待」では、「(自分の)期待を自らがかなえる」とはいわない。希望は、自分が主体的に関与してその実現を求めていく能動的なもので、自身において「かなえていく」ことにもなるが、期待は、「自らがかなえる」ものではなく、受動的で傍観的にとどまる。

(期待は、観客の興奮) 帰結の享受を思って構えるだけではなく、期待する事柄の展開自体に「わくわく」して興奮する場合があるのは確かである。期待が主体的実践の姿勢をもたないのだとすると、この興奮はどう理解すべきなのであろうか。おそらくは、単なる傍観者でしかないテレビの視聴者が、ボクシングを見ながら殴り殴られているつもりになって興奮するのと同様のことが生じていて、わくわくするのであろう。競馬で一着を期待する者は、そのお目当ての馬か騎手になりきってしまう。感情移入するというか、それらと自他無差別状態になり、自身がその馬か騎手のつもりになって、興奮するということである。期待でわくわくし、期待に胸を躍らせるのは、現実の事態に自らが入り込んで対応しているのではなく、もっぱら想像のうちで、観客として、傍観者として(場合によっては呪術的に後退して真に働きかけているつもりにもなると)、この思う方向への展開が待ち遠しいので、早く早くとこれに興奮しているのみではないだろうか。ひとの心身は、感情的には、想像で十分にその想像内容にと反応する。「彼らは共謀して自分を裏切ろうとしているにちがいない」と想像するなら、たとえ、それが妄想で曲解だと頭の隅で思っても、むらむらと怒りの感情が生起してくる。傍観的な、つまり見ているだけの観客も、自らを騎手に一体化させての想像で、十分興奮することになる。

(帰結=享受の不確定なことへの不安) 期待では、因が現にあり、身近なさきに結果が予期できる状態である。日本の「期待」は、好ましい帰結のみを求めてのものだから、特に、その結果をもたらす好ましい担い手に想像的に一体化して、その一挙手一投足を共にするようにと誘われている。かつ、結果はなお与えられてはおらず未定であれば、ときに不安感にもさそわれることになる。興奮しながらも、現実的な確定した動きがとれず、そわそわすることとなる。

期待は、その帰結が確定的とみなされるものには、もたない(例えば明朝の日の出)。不確定さの残るものについて(明日の快晴)、これを見込み、期待して待ち望むのである。不確定・不確定ということが期待には本質的で、好ましいものの帰結を見込みはするものの、そうならないかという意識を残すから、不確定への不安がなんらかの形で伴う。一応は、期待するものがあるとあってその帰結への構えをとるのだが、そうならない可能性を残すので、この方への構えも残して置く必要がある。その期待の帰結がおぼつかないものであればあるほど、大切

なものであればあるほど、慎重に万全の想定をして、あれかこれかと動揺し、不安にもなる。わくわくとし、かつそわそわと落ち着かないということになるのであろう。

(胸をふくらませる希望) 希望では、「わくわく」と興奮することは、例外的で、ごく身近な希望に限定されよう。一般的な希望は、はるかな先のことを望むのであれば、今の心身はそれには反応しにくいであろう。手段となる現在は犠牲になることも多く、そういう現在には「わくわく」するわけにはいかない。希望は、感情的には、はるかを遠望して「胸をふくらませる」ことがふさわしい。期待も喜びも胸をふくらませる。喜びは、獲得した価値あるものを前にしている。獲得を誇って胸を張り、ゆったりと深く息をして享受の準備をする。期待の場合は、まだ獲得はしていないが、獲得を見込んでおりその価値物の享受にと大きな息をして身構えるのであろう。享受にかかわる喜びや期待とちがって、希望では、目的の実現ははるか先であり、「胸をふくらませる」のは、かがやかしい目的に向けてみずからを高めていけることへの、手段となり犠牲となることへの深呼吸である。希望は、(未来の)創造に胸をふくらませるのである。未来への明るい展望のもとにあつて、生動性ゆたかにエネルギーをみなぎらせ、深く大きな息をし、胸のうちの心臓ものびやかにゆったりと大きく鼓動し、目的に向けて最大を尽くそうと「胸をふくらませる」のであろう。喜びには、獲得した価値を享受することがつづくのみで、さらなる先を見る目は存在しないが、希望は、はるかな目標を望み見る。希望は、多彩な未来の想像図でこころを一杯にして「ふくらんでいる」のでもある。

(希望は冷静) 希望の未来は輝かしいが、その身体のある現在は単なる手段で犠牲となることも求められ、目的(希望の実現)ということでは、なお無であつて、心身の現在からいうと、つらい面が多い。うきうきしてはしゃぐわけにはいかない。ただし、楽しみな未来に向かっていて充実しているし開放感をもち、のびやかで生き生きとしている。

はるかな希望は、日常的には概ね穏やかで静かである。実現の可能性のひくいこともある。希望をいだくはじめは、なお不可能に近いところにあるというような場合、到底、これに喜々としてはおれないであろう。さらに、希望の場合、しばしば、そのはじめには、恵みが少なく、ときには絶望や失意のうちにあることがある。その暗闇のなかにあつて希望の小さな星を見出しているのだとすると、期待のように実現を目前にわくわくするようなわけにはいかない。その地獄から抜け出して、苦難の道を一步一步、希望の道を広げ、希望のゴールへと近づいていくのである。希望の達成においては、すばらしいものが獲得されるのであるが、その途上においては、幾多の困難が控えている。英知を傾け持続性をもってその可能性を高めていくのであれば、一時的に自律神経を興奮させて「わくわく」してみても仕方がない。静かに、しかし生動性にあふれて輝くのが希望である。

4. 自らの努力で叶えていく希望—自力型の希望—

(等身大の現実的理想としての希望) 希望は、希い望みお願いするものとしては、これを引き受けてくれる相手をふまえており、ひとに希望を託すことになる。かつ、希望は、なんらかの形で自分が希望＝目的に能動的にかかわって、これを自身でも実現していく。自分が実現するものということでは、とくに、自身の分限・能力をふまえることが必要となる。あまりにも要求が高くと、自分の能力では無理となり、最大限の苦勞をもってしても水の泡となる。希望は、「希う」ものとして控え目で、これをお願いする相手に無理を望まないということもあるが、他方には、自身の能力等を思っても、自己規制が必要である。

願望なら実現不可能なものでもよいが、「これが希望です」というときは、自分が実現できることをふまえている。希望は、自分にとり「希」な最高の願い・「望」みだという。最高のものであるが、自己にとって最高ということである。単なる夢とちがひ、希望は、受験や就職がそうであるように、自分が現にその実現に向けて全エネルギーを注いでいく。はじめから無駄と分かっているものに自身の心血の注がれるわけがなく、そういうものは希望の対象とはなりえない。等身大の希望がいだかれる所以である。

(自由が、希望を可能とする) 希望は、ひとがこれに関する自由をもっていてはじめて抱くことができる。死にたくはないと思っても、ひとは不死ではありえず、したがって、死なないことを希望することはない。願望や夢とちがうところである。早死にしないことは、或る程度自由にできるので、これは、希望の対象となる。必然的であったり、まったくの偶然にとどまってひとの意志・意欲をうけつけない不自由のものは、希望しないし一般的には絶望もしない。その実現への自由、可能性があるから、希望するのである。

制度的にその社会で奴隷や農奴となっているものは、一生その社会的地位にとどめられる。一生奴隷というと、一見「絶望的」と感じられるが、おそらくは絶望してはいない(絶望できないほどに絶望的な下位層ということになる)。自分の未来は、自由がなく、どうしようとも、一生が奴隷であることが決定済みである場合、騎士になるとか、王になることは、不可能であり、そういう階級への希望は、もっても、無駄である。夢としては描きうるが、現実的な希望としては、もちえない。希望しようと絶望しようとそういうこととは無関係に一生は未来のはてまで決定済みである。だとしたら、だれが、無意味な希望をもって、その不可能な希望のために現在を手段化して無駄に犠牲とし、しかも必至の絶望を味わおうとするであろうか。希望があるから、絶望も甘受するのである。ミス日本一になれず絶望するのは、その希望のもてる美人だけである。一般の者は、希望がないから、絶望もしない。

近代になると、個人は、自由な存在となった。社会的に自分の未来の地位・存在は、自分が選んで自分で意欲してそれになるということになった。こうして近代は、希望を、したがって、それへの絶望を大きな問題とすることになってきた。もちろん、奴隷や農奴も、社会的地位・

階級は一生不変でも、各人の健康等の面では、自由をもっているから、その自由のある限りのところでは、その未来への希望を描いていたことには変わらない。しかし社会的に必然的に未来までが決定されて自由がないところには、そのことでの希望の余地はない。自由のあるところに、希望が可能となる。近代社会は、かつてからいうときわめて大きな自由をもった社会であり、その意味では、未曾有の希望の社会となったのである。もとより、その裏側は未曾有の絶望をもつ社会になったということでもある。

かつての社会は、過去によって自己を自覚することが多く、現代社会は、未来の自分の職業・地位等に対するはるかな希望で現在の自分を作るから、未来によって決定されるというようなことにもなる。希望が自己のアイデンティティを作る。不変の停滞社会は、過去の反復であり、過去がものをいうが、動的な現代社会は、未来が、希望が大きな意味をもつ。個としての人間について「実存の本質は、未来にあり、生成するものだ」とか「未来に自分の本質がある」と言えるのは、希望にいきる現代人のもとでのことで、古代・中世の場合は多くは「過去に自分の本質がある」ことになっていた。

(自身で叶える自力の希望) 希望は、ひとに乞い願う契機をもち、希望の内容しだいでは、この他者に圧倒的なものを負うことがあるが、なんととっても、希望は、「自身が希望を叶える」のである。それには自由がなくてはならないが、それがあからといって希望は成立しない。その自由を生かす、希望実現への「意志」「意欲」がなくてはならない。自身の希望へむけての強い「意志」が求められる。いわば「自力」の努力が根本になくてはならない。かなたの希望が希望する者の力を引き出すのでもあるが、意識して自らにおいて力を注ぎ希望していく姿勢が求められる。絶望の暗闇に輝く希望はひとの生をよみがえらせてくれるが、他方では、当人が積極的にこれを見上げていくのでなくてはならない。いくら輝いていても、うつむいていたのでは、星＝希望は、見出せない。希望に向かって意欲を出していく主体性が、自力の努力が希望には肝要である。

希望は、努力によってその実現の可能性を高められる。希望の大学のその希望がかなえられるかどうかは、受験勉強をどれだけしたかにかかっている。第一、その努力で、希望のレベルそのものを高めていける。他力型の希望であっても、当人のそれへの意欲に負う面がある。乞い願うそのお願いを、相手が根負けして、その希望をかなえてあげようという気持ちになれるようにもっていくこともできる。極楽を希望して、「一心不乱」に「百万遍」も念仏すれば、極楽は無理だとしても、地獄の閻魔帳から名前の削除ぐらいはしてもらえる。

(意欲の持続) はるか未来に位置する希望の場合は、持続性が問題となる。その希望へ魅了され、その欲求が大きければ、そのときには、その希望の目的への前進は大きくなることであろうが、それが、長期にわたったものの場合、自然的に魅了された状態はそうは続かないから、「希望に燃える」ことは一時的なものにとどまって、やがては、忘れられて、

その達成は覚束ないものとなる。そういう点で、希望の意志を「客体化」することは意味がある。つまり、自分の希望を意志表明してそういう者として周囲から処遇されるようにしたり、希望実現のための組織に所属することである。音楽家になる希望をもったものは、音楽学校に入れば、その意欲を一時的に失いかけても、希望の持続が可能となる。希望の組織・団体は、希望実現に対しての妨害が大きいものでは、相互にささえ妨害に立ち向かうためにも効果的である。しかし何といても、希望は、ひとが自らに実現するもので、希望の初志を貫徹しようという意志力・根性が肝心である。

(希望における現在の解放・開放、充実、自己目的化) ひととは、現在の無意味な苦勞・閉塞状態に耐え難いものを感じることもある。過去と現在のしがらみに束縛されると、先へと進んでいく意欲も奪われがちとなる。そのとき、希望がいだかれるなら、その未来の楽しみをもって自らを慰めることができる。何より、未来の実り・希望をもつことで、現在は、そのための意味ある手段となり、現在の犠牲は、尊い価値をもつことができるようになる。希望は、閉塞した無意味な現在を解放し、未来の方向へとその生のとびらを開放し、明るい未来にと生きることを可能にする。希望は、現在に自由を与える。

はるかな希望をいづく精神は、現在の犠牲の一步一步において希望への接近を感知し、手段となることに生きがいを見出し、その現在に、生の充実を感じることとなる。さらには、希望の種類によっては、手段の現在に充実を感じるのみにとどまらず、その充実した生きがいのある現在が楽しいものになり、むしろ、これが自己目的化することもある。結婚とか旅行の場合、その希望の目的地よりは、途中の過程の方が楽しく充実していることがしばしばである。希望の目的は、ここでは単なる目標か終点になり、それへの道程・手段がむしろ主要な目的となる。そのうえ、手段の過程は楽しく生動性に満ち満ちていたのに、それに比して、その希望の終点は、期待はずれでがっかりとなって、失望をもたらす場合も生じてくる。

5. 失望とその傍観的特性

(期待はずれ) 希望と期待の否定・反対として、それらの喪失として、失望がある。失望は、例えば、「かれには失望したわ。もっとしっかりしていると期待していたのに！」というように、期待を否定する場面であるというのが一つの典型であろう。期待していて、それが裏切られたときに、がっかりし、「失望」をいう。期待して、好ましい結果を見込み、予期して待っていたのに、それが、その思い通りにならず、期待外れで、その期待の「望み」が実現されず「失われる」のが、失望である。

(希望を失う) 失望は、「望み」を「失う」のだから、期待についてのみでなく、希望を失う場合もいう。希望の否定がもうひとつの失望の典型となろうか。「かれには、希望を託してい

たのに、失望した」と希望の否定を失望とすることがある。失望は、その対象を突き放し見下し、その対象に距離をとり傍観的になる。期待と同じように傍観的なことを基本とする。希望も、「かれに希望を託す」ような依頼型の場合、主体性よりは傍観性がきわだち、その否定は、これを突き放すのだから、一層、傍観的になり、期待はずれの傍観的な失望と齟齬をきたすことはない。

だが、希望は、自力で主体的能動的に取り組むものでもある。この希望の否定も「失望」となりうる。何年も司法試験に挑戦していて自身の実力のほどを知って弱気になり、「希望がもてなくなり、失望していった」等といえるであろう。この失望は、自力の希望の否定であるから、傍観的な失望とは一見合わない感じであるが、これもやはり傍観的になっているというべきであろう。自身の主体的な自力の営為について、これを否定するとは、これを突き放し距離をとって（つまり傍観的な位置に自身が離れ）、見下し、受け入れがたい気持ちになっているのである。自力型の希望もその否定ということでは、ほかの傍観的に突き放す「失望」のあり方と似たものになる。

（失望とは） 失望は、期待あるいは希望といった「望み」を実現できず、この望みを失って、望みの場所に帰結したものを無価値・反価値と評価し見下し突き放しつつ、力を落とし、がっかりすることであろう。予期し期待した好ましいこと（望み）が実現されず「期待外れ」になったり、希望の意志（望み）が挫折し「希望がもてない」状態になって、ひとは、「失望」する。

希望は、知的精神の実践的な営みであるが、希望のもとには、当然、価値認識がある。希望の対象は自身にとり最高の価値物との認識であり、未来の希望をはるかにと観望し認識している。この希望の認識面は、好ましいものを見込むものとして、広義には期待することだといってもいいであろう。希望のうちでのこの期待はずれが、希望における失望ということである。とすると、期待も希望も、失望は、「期待はずれ」にまとめておいてもいいであろうか。希望が対象とするその外延は、自由の人為に限定されるが、期待は、自然一般にもいう。その期待はずれの失望も、期待同様、自然に関するものを含む。宝石の原石について「大きい石を期待していた」のに、「小さな石ばかりで失望した」ということになる。

（「失望」と「がっかり」の違いは？） 「失望」は、しばしば「がっかり」という言葉にいいかえられるが、後者は、失望の心身の体験内容を示すのみである。これに対して「失望」は、「望み」を「失う」という、ひとの精神に起こった事の意味内容を示す。期待や希望の求めるもの「望み」が「失われた」と語る。「がっかり」感は、失望ではない場合もある。ゲームで失敗して、よく「がっかり！」というが、「失望する」ことは希れである。バスや電車に間に合わず「がっかりする」場合なども、ふつうには「失望した」とはいえない。これらは、良い帰結を見込み、求め、心身の緊張をさそわれていたのが無用となり力を落とす点、失望と同じだが、

その緊張の元になるものは、「望み」といえるような高尚なものではない、ということであろうか。

では、同じく失望している事柄について「失望」と「がっかり」との違いはあるのであろうか。期待はずれの事柄には、すべて「失望」も「がっかり」もいえるであろうが、強いて言う、「失望」は、人為に関する期待はずれに一層ふさわしいように感じられる。「かれに失望した」は普通だが、「雨に失望した」は、特殊なことになろう。「失望」が人間・人為にふさわしいのは、おそらくはその「望」のことばにかかわる。雨に失望するとしても雨自体は「望み」を意識できるわけではない。だが、人為の場合は、期待や希望という「望み」を自他に自覚して行動する。期待はずれなことをしてしまった者は、その相手の期待、「望み」を意識し、これを裏切ってしまったと思うことであろう。「失望」がどちらかということ人為に言われる所以である。

(**－a (W) に、P に、失望する**) 期待や希望は、「a (W) を、P に」(または「WをPに」) 期待し、あるいは希望する。両方とも、直接目的語 (W) と間接目的語 (P) を日本語の場合をとる。だが、それらへの失望では「～に失望する」とのみいい、「～を失望する」はいわない。希望や期待では、「ダイヤ (W) を [贈ってくれること (a)] を、彼 (P) に希望する」とか、あるいは、期待は自然にもできるから、「あす快晴になることを、(秋空に、) 期待する」等という。これに対して、期待・希望が裏切られて失望するのであるから、まずは、この否定的なことの原因特定に向かい、「かれに失望する」と、ことの担い手「Pに」失望することになる。だが、a (W) については、単純にこれをもって失望の対象とはしない。a (W) つまり「ダイヤ (W) を贈ってくれること (a)」に失望しているのではない。「ダイヤを贈ってくれなかったこと」に失望するのである。目の前にあるのは、否定の－a (W) である。失望は、期待・希望とちがって直接目的語「～を」は取らない。それを目的語としてあげる場合は、「ダイヤを贈ってくれなかったことに、失望した」と、「～に」をもってする。失望するとき、眼前にある対象は、－a (W) であるが、同時に a (W) が頭の中にある。この a (W) と－a (W) の両面を意識しつつ失望するので、単純に直接的に目的をさす「～を」にはしにくいであろう、Pと同様に、a (W) に関しても、媒介・距離をおいて否定的結果－a (W) を間接的な目的表現にして、「～に」で言う。

(**見下げる価値評価**) 失望では、期待し予期した高い価値をふまえているが、そこに結果したものはそれを実現せず低い価値状態にとどまっていた、ひとは、その価値下落の結果を見くたすことになる。期待は裏切られて、「見損なった」と軽蔑的な眼をそそぐ。意外なその反価値・無価値状態を、傍観的に期待の高みから眺め、その求めるものがないと価値評価する。

期待通りなら、見込んだ、求め待ち望んでいた高い価値あるものが実現されて、望みは満たされ安堵することになるが、その期待のはずれたのが失望である。期待以上の高い価値が実現

された場合も、期待からは、はずれるのだが、これは、「期待以上」となり、「望外」のもの
の達成となり、当然、「失望」などとはいわない。失望は、高い望みを予定していたのに、それ
がかなわず、期待の価値以下のものしか見出すことができず、がっかりするのである。

評価の高いものから期待・失望系列のことばを並べると、大きなプラスの「望外」、見込み
にかなっているプラスの「期待通り」、さらに、可もなく不可もないゼロ、そこからマイナス
の「不満」「期待はずれ」へと下がり、がまんの限度を越えたあたりが「失望」になるのであ
ろう。「期待はずれ」は、「失望」と同一とみてもいいであろうが、広くは、というか、軽いも
のは、期待の高みに至っていない並みのものが帰結している場合を含むであろうか。「絶望」
は、望みの未来の道が完全に絶たれ閉鎖された暗黒の状態、失望などとは異質のさらに大き
なマイナスになる。

(見離す) 失望は、単にマイナスにと見下した価値評価をするのみではなく、期待はずれの結
果を受け入れがたく思い、排除しようとし、見限り見離す態度をとる。無価値・反価値化した
ものに対しては、愛などでは、これに近づき、一体化したり、価値回復を求めてこれに価値あ
るものを贈与するが、失望は、その期待はずれの否定的価値状態のものを見下すのみでなく、
自分から遠ざけようとする。たとえ愛しいわが子であっても、失望しているところでは、これ
を突き放す。

失望の対象は、もとは期待していたものであるから、失望する前には、自ら好んで受け入れ
ようとして、待ち望み、受容の構えをとっていたのである。だが、そこに結果したものは、期
待に反して、軽蔑されるべきものでしかなく、受け入れを拒否する態度にと転換されること
になる。失望は、その対象をつき離し、見限り、場合によると、それを見ることもほどほどに、
目をそむけ、その空気すらともにしたくないと鼻をしかめる。

(落胆・喪失感) 失望は、感情的には、喪失感に属した構えをつくる。期待は、すぐ先に予定
したその享受等の楽しみ、それへの予めの構え、興奮・緊張をもつが、失望は、これらを解除・
停止する。その緊張・興奮の解除は、単なる弛緩状態になるのではなく、その期待にかかわっ
ての無力・虚脱状態をもたらす。落胆である。期待して待ち構えていたその欲求に関する興奮
(希望の場合は、充実した現在の意欲的な活動)は、血流を盛んにするが、これを失望は解除
し、生動性は無用となって血の気は引く。血流は全身において小さくなり、おそらく血圧も低
下して、顔面は蒼白気味となる。息(=生)は、とどこおり、たまった息を「ふー」(口も舌
も脱力して出すhの音)と吐き出し、失望は、「ため息をつく」。享受等を見込んで興奮・緊張
していた身体は脱力し、四肢は「がくがく」となり、「がっかりする」。

喪失感の代表は、「悲しみ」となるだろうが、悲しみの場合は、典型的には、現に所持していた
大切なものを剥奪されて、それを取り返すことが無理と諦念・断念しての、完全な喪失につい
ての心身の感情反応になる。だが、失望の場合は、希望し期待した達成予定のものを喪失する

のみであり、一般的な悲しみとは、異なる。悲しみでは、それ以上の喪失を阻止するためであろう、自己閉鎖することがともなうが、失望では、これはない。まだ期待（結果）の達成はしておらず自己のうちにはなお喪失するものは何も所持していないのである。獲得の可能性を喪失したのみである。

（期待外れの失望は、終結感情） 期待外れの失望は、結果が明確になった時点でいただく。この失望は、さきを見ない。現在を見るのみであり、その現在において、期待は裏切られたと宣言しているのである。喜びと悲しみが、獲得と逆の喪失を確定していただく、いわば事の終結・終了の感情であると同様に、この失望も、事の終結の感情である。まだ期待の可能性が残っているのであれば、失望することはない。期待はずれは確定している。それにしたがって期待へのかまちは、無意味化して、その力は無用となり、力を落とし、しょんぼりとする。

絶望や悲しみは、事が確定し終結した時にいただくのみではなく、その後にも持続する。そのことに関する望み・欲求が根底にあるかぎり、その絶望は、消えない。悲しみも、そのことへの欲求が存続し、愛しいとの思いがつづくかぎり、喪失感は消えず、悲しみは、これを思うたびにいつまでも反復する。だが、失望は、それらに比しては、持続性は小さい。というより、一回きりで終わるのがふつうである。現実には獲得はなく、期待した享受等の予定がかなわなかったのみで、その喪失にも、さして執着することはない。宝くじで一億円が当たったのに、その券をうかつにも燃やしてしまったとすると、思い出すたびに悔やまれてならず、その喪失感・くやしさは、相当長く持続することであろう。だが、三億円をと期待して奮発して200枚買っていたとしても、当るわけがなく、奮発していたのであれば外れと知ってがっかりし失望することであろうが、おそらく、その日のうちに、さっぱりと諦められるのではないか。「残念」ということになるが、残る念はわずかである。以後、思い出しても失望感を生じることはない。基本的には一回の失望感で終わる。期待での緊張した構えが無用になりがっかりしたのであり、次にそれを思い出してみても、価値ある状態の見込みは立てないしその期待の結果への享受の構えはつくらないから、それを解除してのがっかり感・失望も出てこないのがふつうであろう。希望の場合は、享受の構えではなく、手段としての現在の充実した緊張があるのだろうが、これも失望すれば、その方向での希望の展開は見限り、その緊張＝活動を繰り返すことはないから、その失望も反復することはない。

失望は、不快だが感情として持続せず、苦悶させる絶望などちがって、失望の感情そのものから解放されたいと思うことはあまりない。失望における価値評価や落胆は、心地よいものではないが、失望した主体は、基本的に傍観的であり、失望の対象を見限り、受け入れがたいものとして放置するだけのことである。以後は、それがかかわってくる場合は、かつて見込んでいた価値づけをせず見下されたものという評価をもって対応すればよいだけであり、「残念」との気がかりは、その程度残るにすぎない。

(失望は、希望を一層よい方向に高めていける) 希望に関する失望では、根本にある希望自体は残している。失望の元を取り除いて、再び、その同類の希望を復活させることが可能である。失望は、望みを失っているというが、それは、絶望でなければ、至近の手段が期待はずれで展望をもてなくなっているのみである。それを取り除き、希望自体は、復活可能となることが多い。

失望は、同じものについては一回きりの体験をして終わりであり、希望は、それを見限り、新規の担い手・手段を見出して、よりましな方向へと同一か同類の希望を展開していくことが可能となる。恋人Aに失望したものは、これを見限り、新規にそのAの欠点をもっていないよりすばらしい恋人Bをさがすことになる。教団Xに失望したものは、その浅薄な教義を凌駕する教団Yにと宗教的希望を託し変えていく。宗教自体に失望すれば、非合理的な知としての信ではなく合理の知へ哲学へと高まっていける。失望してよかったということになる。

6. 希望に燃える

(燃える希望と、燃え得ない希望) 期待では、いくら興奮しわくわくしても、「期待に燃える」ということはできないが、希望では、「希望に燃える」ということがある。しかし、ひとは、どんな希望にでも「燃える」わけではない。生き埋めになって救出の可能性が少なくなっているとき、その「残されている希望」には、いくら懸命になっても、「燃える」ことはできない。その希望の内容、その深刻さが、燃えて輝くような状態になることは押しとどめるのであろう。

日常的なささいな希望についても、「燃える」ことはない。「夕食の希望は、さんまです！」という場合、たとえ夕焼けと秋刀魚が燃えたとしても、その希望は燃えない。燃えたのでは、ささいでなくなってしまう。その類いの希望は「楽しみ」にする程度であろう。それがよほど楽しみであれば、「うきうきする」希望にはなるであろうが、「燃える」ことは、ない。

(その人をつくる自力の希望に、燃える) その希望の内容が重要な価値をもつ場合になると、「燃える」ようなことになるのであろうが、それでも、その希望がもっぱらにひとに請い願うもので、自身は、「待ち望む」だけにとどまる場合は、「燃える」というには、届かない。お土産に「ダイヤモンドの希望」をかなえてもらえるといった、それが大きな期待を呼ぶものには、「わくわく」したり、あるいは、「胸をふくらます」ことになる。しかし、いくら胸を躍らせるような大きなダイヤモンドであったとしても、そのことでの希望は燃えるものではないであろう。依頼・受動型の希望では、燃えるには欠けるものがあるのであろう。そこに欠けるのは、能動的に自身でかなえ実現していくという契機である。

「燃える」ことになるような希望は、大きなもので自身がその実現に参与する、自力が主となった希望になるのであろう。希望主体が、それに生きるような、生きがいそのものとなるような希望である。これに己を燃やし尽くすことができれば、本望であるような希望である。自

力であれば、登山とかの楽しみ・消費活動であっても、燃えることがありそうであるが、心置きなく燃えるには、やはり、創造的な活動となる希望が一番であろう。

（「燃える」とは？）「燃える」というのは、「火が燃える」のがもともとだろうが、勢いがあり動いてやまず、熱くなって輝き、激しく盛んな状態になっている心身のあり方をいう。激しく勢いがあるということでは「怒りに燃える」「復讐に燃える」等の攻撃的なひとの態勢は「燃える」というにふさわしい。「燃える」のは、興奮し活動的になり外向きに何かに向けてそのエネルギーを集中し注いでいくことであろう。筋肉や一部の内臓が興奮して動的になって血流が多くなり、体温も上昇する。攻撃でなく、激しく情熱的ということでは、「恋の炎を燃やす」「恋焦がれる」等の愛もある。希望も、人生そのものを構成するようなものは、こういう、激しく盛んなものの様相をもつということである。

勢いがあり、盛んである「燃える」状態は、人生をうごかす希望では大いにありたい様相である。大きな希望をもってこれに生きるものは、絶望・失望の意気消沈している状態と反対で、その生動性において盛んであり、その目標に向かって勢いをもって生きていくものであろう。はるかな希望＝目的に到るために現在の自己を尽くし、自己犠牲を厭うことなく、気力を盛んにして、それへとまっしぐらとなり、燃えて生きる。

希望の場合、その「燃焼」では、光り輝き、明るく照らすことがひとつの特徴になる。復讐の情念に燃える場合は、くすぶったり冷たい青い炎を燃やすのであろうが、はるかな希望は、輝き明るい炎を燃やす。希望の目的が未来のあなたに輝いていて、これがひとを魅了し導きの星となっていることがあり、それを目指して躍動的に生き生きと燃えて、希望は、この現在自身を輝かせる。ドイツ語でも、「希望に燃える *gluehen vor Hoffnung*」ということがある。*gluehen* は、灼熱・白熱の状態になる燃え方のようなものである。希望は、くすぶることなく、明々と燃えて輝くのである。

（「燃える」ものとしての現在）「希望に燃える」のは、「希望が」燃えるのではない。燃えるものは、では何になるのであろうか。はるかな未来にと希望をいやく当人の「現在」の生が燃えるのであろう。それが、その未来の目的にむけて、その実現に資するようと、その生を燃焼させていくのである。未来の希望の輝きも、この現在の自己が燃えて可能にする。はじめは誰かが希望の星を与えてくれることがあるが、一旦、自分で希望の火を灯したら、以降は自分でそれを守り続けるのである。もし、現在が燃えず、その未来に希望を描き出さないならば、希望は、実現可能性を失い瞬くことをやめる。あなたにかがやく希望であるが、それを輝かすのは、燃える現在である。

その現在は、未来の希望（目的）の手段・犠牲となる。未来のために、希望の目的に向けて、現在を燃やし役立てる。現在を灰にしてそのエネルギーを未来の希望にそそぎ、死んで生きる。「愛に燃える」場合は、その現在に目的を実現して、つまり愛（一体化）を実現して終わる。

だが、希望の場合は、現在は、手段となり無化するのみであり、希望という目的の実現は、はるかな未来になる。その未来へと自身を投げ出し、燃やし尽くすことでその希望は現実化してくる。

(希望の燃え方) ひとが燃えるのだが、希望には、それ固有の燃え方がある。怒りや愛が燃える場合は、その主体は、理性や精神であるよりは、その感情が中心になろう。感情的なものであるから、身体が燃えるのでもある。怒りに燃えるひとは、実際に身体が熱くなり、血気盛んになって顔面は紅潮する。怒りの形相をもつ不動明王の光背は炎をもって示される。愛も性愛では、そういうことになる(日本の「愛」は、どうしてか崇高さに欠ける。「仏を愛する」「神を愛したい」などという一愛が下品なためであろう一なにか猥らな感じになる)。これらは、その攻撃とか一体化の有り様が身体的なものになるから、身体が燃えるのである。だが、希望の燃え方は、ちがう。意志・意欲といった高貴な精神的な能力が燃えるのである。希望に燃える場合は、身体的に熱くなることはない。意欲・気力が勢いをもち、盛んとなるのであり、英知を動員してはるかな未来に向かって力を尽くしていこうとするものである。

希望の燃える熱とか輝きは、精神的であり、その炎・エネルギーの向かうところは、はるかな未来の理想である。怒りや愛は、現に存在している対象に激しくそのパッションをぶつけていくのがふつうで、現在に終始するが、希望は、燃えることで、はるかな未来の時間を展開する。その熱と光は、精神が英知を発揮して活発に働き覚醒する状態をもたらすことになり、その営為を現在から未来の方向へと向けて時間の流れのなかにおき、その時間を滞らせることなく滑らかに倦まず弛まず前にと進めていく。愛や怒りは、現在のもので燃え尽きるが、希望は、ロケットの燃焼のように推進力となり、その炎は、はるかに燃えて、未来の時間のなかに持続していく。未来へと燃え広がって、希望の達成まで燃え続けていく。

(希望は、萌える) 希望に燃える状態は明るく充実しており、それはその希望の主体の動物的生の下位層(食欲など)から幸福感をいだけ精神の層までを輝かせその生動性を汎化させて燃え広がっていく。その現在は、未来の希望の手段であり、希望達成ははるかかなたで、いまだ未熟の状態にあって、なお芽生えをもっているにすぎない。燃える現在は、燃えて灰となり消滅して未来に生きるなのであるが、希望の場合、現在は犠牲的でありつつも明るく生き生きとしていて、そのかなたに希望の目的の果実が予定されているという点からは、「萌える」(緑に燃える)という方がふさわしいかもしれない。

愛に燃え、怒りに燃える場合は、その現在にすべてのある燃え方になることが多いが、希望が燃える場合は、そうではない。希望は、冷静に英知を駆使してその意志と情熱をかたむけるが、楽しく燃えて現在に充足するのみでは、未来の希望は、影を薄くする。今(の愛)に燃えるのみでは、未来の(新家族形成の)希望は、おぼつかない。希望に燃えるばあい、現在は手段になり苦勞をし犠牲になるものとして、その燃える現在は、未来の希望=目的にひたすらな

姿勢をもっていなくてはならない。「萌える」場合、それ自身に充実しつつ、なんといっても、はるかな成長・結実を目指している。希望には、こういうあり方がふさわしい。明々と「燃える」希望は、かがやいて、芽吹き、「萌える」のである。

(西日本応用倫理学研究会 『ぷらくしす』 通巻 第9号 2008年3月)

第四章 夢と希望

1. はるかを見つめるもの

希望は、はるかな先に理想・夢を描き出す。夢と希望は、現在からはるかかなたへと自由に飛翔して、同じであるように思える。だが、希望は、夢とはちがう。夢と違って現実的である。

青春をあらわすとき、「夢と希望に輝く」といい、逆に、若いのに「夢も希望もない」となげくこともある。夢と希望は、現実を超越してかなたに描かれるが、才能に恵まれた若者については、「希望がある」というよりは、「夢がある」という。めぐまれた現在からこれを土台にして多彩な能力を開花させようと、未知のかなたへと飛翔していくのは「夢」であろう。夢が描けるひとの今は、明るい。だが、希望が言われるのは、否定的な現実、失意や絶望の暗い現在があつてのことが結構ある。暗い現実だが、なお先がある、希望が残されているのではないかとなくさめるのである。

「夢」は、「現（うつつ）」と対立的で、現実世界に対立した主観的な「夢・幻」の世界である。夢は、一方で、このせせこましい現実を超越した輝かしい理想の世界である。現実的な制約から解放された自由の世界である。若者の未来の夢は、これである。恵まれた現在のうえに、この現つから飛翔して、かなたへと描かれる可能世界である。他方、現つではない夢の世界は、「単なる夢」でもある。「現実」を離れているのだが、それは、現実化しえない現実以下の夢想である。この二つの夢は、別々の夢でもあるが、各種の「ユートピア」がそうであるように、しばしば一つの夢の二側面をなす。米国の黒人指導者キング牧師は「私には夢がある」といった。黒人の真の解放の日を夢見た。それは、大きな未来の夢であったが、同時になお夢に留まっていた。それから40年あまり、黒人のオバマ上院議員が「希望」をスローガンに挙げて大統領となった。夢は希望にと具体化され現実化されることになったのである。

希望は、ふたつの夢の間にある。希望は現実に即して、うつつ（現実）のうちにある。現実化不可能の「単なる夢」とちがい、現実的に可能な夢が希望になる。現実から乖離した夢想ではなく、希望は、現実に足をしっかりと下ろした明日の現実であり、誇らしい未来である。だが、希望は、もうひとつの夢、未来にむけて大きく飛翔する夢にはかなわない。希望は、現実を離れず、控えめに未来を描く。現実に即した夢に限定されているのが希望であろう。夢は、そのかなたに飛んでいく。この現在・現実を超越して、はるかな夢の輝く世界がある。めぐまれた若者の、まだ方向を限定せずに描く多彩なバラ色にかがやく夢の世界である。

a) 夢は無制約—希望は、現実的限定的

夢も希望も、今の現実には存在しない憧れ・願いであるが、夢は、現実にしばられず無制約的であるのに対して、希望は、現実を踏まえて限定的になる。輝く多くの夢のうちか

ら希望が限定される。現在のもとにその夢の実現の手段が見出せて具体的な可能性の備わったものを希望とする。夢に描くのは1億円の宝石であるが、いま希望するのは50万円のそれになる。夢は希望を先導するが、夢見るのは、その夢が達成されての、願望成就におけるその享受を中心にしてのことであろう。その多彩な夢のなかから、ひとは、この現実に戻って、そのなかのどれがこの現実において可能なのかを、自身の願望の強さと現実化の可能性の度合いから計り、自分が現に実現していけるものを希望にと限定していく。現実の中へと降り立った夢が希望である。歳とともに、夢の現実化・希望化は、未来と現実が狭まることで、限定されていく。若者は、それに比しては、なににでもなれるという夢が描け、希望もそれに劣らないぐらいのものをもつことができる。

夢や願望は、現実的制約がなくてよい。現実にしぼられることのない夢は、この現実を離れ、目をつむる。願望は、現実の条件など無視して、一方的にそれを望むのみで、現実化の姿勢はかならずしもたない。これに対して希望は、現実のうちで可能な未来を目的（=希望）として描いて、これをみずからが現実化しようと求め、意志し、希う。希望は、実現可能なものへと、その望み欲するものを自らに規制し制限している。

夢が描かれる場合、希望ほど具体的にはならないのが普通であろうが、それでも、「月旅行が夢です」というように、夢もリアルなものであるには、個別具体化、現実化の方向に向かうことになる。だが、おなじような調子で気楽に「月旅行を希望します」とは言えない。希望は、さらに個別具体化され実在的な現実のうちにその支え、手段をもって、その実現可能性を見出す必要がある。希望は、月行きのキップをNASAに購入予約したり、そのための資金を貯蓄しはじめていなくてはならない。

希望の場合、その希望=目的を描き出すのみではなく、その目的実現のための手段を明確にし、その手段の第一歩を現実のうちで踏み出す。自身が主体的にそのことに参与する姿勢をもつことがないと、月旅行どころか身近な「富士登山」であっても、なお「希望」にはならず、単なる「夢」や「願望」にとどまるというべきであろう。希望は、夢や願望を特定のものにと限定して、その実現の環境をしっかりと実在世界のもとに整備し方向付け、その実現のための主体的参与の姿勢をもつ。

b) 妄想と享受の夢—理性的で実践的な希望

夢は、現実の対極にある。夢の典型・頂点は、身も心も現実を離れた「眠り」において見出される。眠りの夢は、現実離れはなはだしく現実的秩序からいうと支離滅裂である。夢に顕著に欠けているのは、実在的な現実性であり、その合理性である。理性は、この現実をふまえ、その合理的本性を把握する。それは、現実的な未来を合理的合目的に目標とするものとして、希望の能力ともなる。その現実的理性が夢では眠って麻痺してしまう。もちろん、夢が現実を離れていて実在世界への実践をもてないことはいままでもない。だ

が、希望は、自らがその実現へと主体的に踏み出していく実践的なものである。

(白昼夢)「夢と希望」という形でならべられる夢は、精神が現実を超越して自由に描く高尚な想像の世界であろう。その夢も、真夜中の眠りの夢ほどではないとしても、希望とちがって、現実性・合理性についてはあまり気にしない。この希望とならぶ夢では、なお、現実のなかで周囲の人とともに語りあうことができるが、「白昼夢」になると、これもなくなる。現実のうちに行動しながらも、意識は、自己に閉じこもり、外的感覚を遮断して、白昼、夢見るのである。欲求は一時的に外的世界から離れて、その求めるものを想像で描きこれを享受し夢にひたる。その想像は、現実には困難であったり許されていない内容であり現実離れしたものとなる。夢とはいえ、身体は現実のうちに覚醒しており、現実にあうように反応するし、心も若干は目の前の現実に関する意識を残してのことである。電車のなかで下車に関する意識だけは維持しつつ、外的感覚を遮断し自己に閉じこもって、ひとときの夢に遊ぶのである。

「夢と希望」といわれるときの夢は、この白昼夢に描かれるものと同類のこともあるが、多くはもっと公明で共同世界に開かれたものであろう。白昼夢と区別されるその夢は、現実の中に描かれ、希望ほどではないとしても自分の意志を越えた他者をふまえ、この他者とともに描くことができるもので、実在世界の現実性と合理性をなお残しつつ現実を超えてはるかな未来にと想像を馳せていく。白昼夢は一時的に自己を閉鎖し現実を逃避して、他者と現実を自身の好きなようにできるものにと想像内で仕立て上げる。希望の夢は、現実逃避であるよりは、その超越・超出であろう。希望の夢は、希望と同じく人の高度な精神が描き出すもので、現実を延長したはるかな未来に飛翔して、その想像のうちで、欲求の展開と充足、享受を描く。内容的には希望につながるような建設的で高尚なものになることが多く、白昼夢とは区別されよう。

(体外離脱・明晰夢) 白昼夢は、一時的に感覚遮断をするが、外界を遮断して描くその夢は、具象的にはなりにくく、想像力のみで抽象的に描かれるのが一般である。ひとによっては白昼夢でも、鮮明な感覚像となる幻覚をいただけるが、普通は、感覚像までを創造するには至らない。それが可能になるのは、睡眠時の夢である。身体は眠って心は起きているといった睡眠状態では、ときに、白昼夢と同様に自分の自由にできる特殊な夢が見られる。ここでは、意識は、眠っている身体を操作はできない(「金縛り」はその体験の一つ)が、なお自己の意識活動の自由を保持していて、見たい夢が見られる。意識(魂)は、あたかも、その眠った(つまり外的な感覚を遮断した)身体を抜け出て、体外離脱(幽体離脱)しておのれの思いのままに動くことができる感じになっていく。臨死状態にあった者が手術中の自分を天井から見下ろすような体験を語ることもあるが、あの状態である。その離脱した魂はそれ固有の身体(幽体)をもって(身体についての感覚中枢は、眠っていない

から、眠って動かぬ身体を離れて中枢自体のうちで働くことになり幽体的なものを感じる（であろう）、抽象的な想像図ではなく、鮮明な感覚像としての幻覚を描けて、達人になると、ピーターパンのように空中も飛べると思えば自由に飛べて、望み通りのことができるようになる。もちろん、それは幻覚でしかないのだが、もう一つの（現実とはちがう）感覚世界を作り、その欲求するものを具体的に描き出してこれを享受できることになる。

同様に自身の自由にできる夢で、体外離脱とちがって身体から出発しなくてもいい状態で描くものに「明晰夢」がある。感覚遮断を完成して自己内で具象的に幻覚を展開する。自身の意識による制御が可能で、想像と同様に自らの思うものを描き出せる。起きているときの想像とちがって、感覚的鮮明さをもつての幻覚の世界であり（覚醒時の「想像」では、感覚的な個別具体性をもてないのが一般である。バラの花を想像してみてもその花びらの枚数は数えられない。抽象的にとどまる）、欲望は、感覚的具体性をもった、いうなら現実に得られるのと同様かそれ以上の満足・充足を得ることになる。

幽体離脱・明晰夢の場合、現実から完全に離脱し、感覚遮断をした幻覚の世界にあそぶ。もうひとつの現前する感覚世界を描き、具象的個別的である。これに対して、希望とならぶ（精神の描く）夢の場合は、想像力によって現実のなかで現実のかなた・未来に抽象的に描かれ、かつその想像図は仮のもの、現実ではない虚構との自覚のもとにある。現実世界において描くものとしては、現実的制約をふまえたものになる。合理的なものを気にした想像となる。その夢は、希望と同様に精神が主体となって描くもので、現実世界・現実社会を意識もして、その内容は希望と同じく高尚なものになるのが普通であろう。希望とちがい、この現在から出発しようとはせず、その未来の夢にあそび、これを享受するのみではあるが、睡眠中の夢に比して言うと、きわめて現実的で合理性に富む夢であろう。したがって、時にこの夢は現実化する。「これこそが、夢だったんだ！」と希有の願望成就に驚喜することがあるが、この夢は、希望を先導する現実的な夢だったのである。

明晰夢の先の、もう一段深い眠りにおいて見る普通の夢になると、もはや自己の自由にはならない。別の世界ということになる。現実世界の心身から完全に離れた世界であり、現実から一番遠い状態・存在ということになる。この真性の夢では、もはや、どんな夢を見るかという選択の自由はなく、「希望する」ものが夢見られることはなくなる。現実と乖離して、現実的合理性を欠落させた奇怪な世界ということになる。ここでは、絶望している者を叩きのめすような、見たくない残酷な悪夢も登場する。

希望の夢は、そのひとをひととする高度な精神の描くもので、高尚で建設的な世界になるが、それ以外の夢は、夜のそれも白昼夢も、多くは身近な欲望にそそのかされてのものになり、動物的感性的レベルの底辺から、高度だがどちらかというと邪悪に染まった精神までが描く、自己閉鎖した幻覚・妄想の世界ということになる。

睡眠での夢、白昼夢、はるかを夢見るときの夢はそれぞれ異なるが、それらが同じ夢であるのは、いずれも、この肉体の存在する客観世界を無視した、この世界から離脱・乖離した非現実、超現実で、多くの場合、自身の願望とその享受を描き、現実的な労苦の実践的な媒介を気にすることのない主観世界に属するものだからであろう。希望と並ぶ夢も、夜の夢と同様に、非現実的非実践的で主観的なものにとどまる。希望は、これに対して、あくまでも現実的で、実践的理性的である。

未来・かなたを夢見るとき、ひとは、眠るときのように目を瞑る。だが、希望をいまく場合には、目を開く。夢は、現実にはない享受を描き、目をつむって想像の世界にひたる。だが、希望は、現実のうちにあり、その希望の手段は現在のもとにあって、それを見つめようと目を開き、かつ、希望の目的をと、自分のそとのはるかな先にあるものを見つめる。

c) ひたすらに享受の夢と、辛苦を介しての希望

夢に酔うものは、現実を忘れ、そのなかに心地よく浸って、これを想像のうちで楽しむ。一足飛びにパラダイスに直行する。それに到る苦難の現実的な道程など省みることなく、目を瞑って、都合のよい面のみを肥大化させて夢想しこれに酔い痴れる。夢は、もっぱら成果を享受し、楽しむのみである。だが、希望は、その享受をかなたに描きつつも、現在をそのための手段・犠牲にしようと決意する。夢は、いま楽しみ、希望は、あすを楽しむにする。

希望は、現実的理性的であり、かなたの希望＝目標を望み見つつ、これに到る苦難の道程・手段を描き、その苦勞を身に引き受ける。現在の不充足は、希望の充足の手段として、充実した不充足（苦勞）と見なされる。いまの忍耐と未来の希望の実現・享受を我が事とし一体化して生きる精神は、この現在を手段として燃やしつくし、ひたすらとなって希望を生きる。現在の感覚・身体的な感情は、いま苦痛があれば、即これを避けようと動く。だが、精神は、それが未来のために必要と思えばこの苦痛を甘受して耐え、その忍耐に充実を感じる。希望は、はるかな未来の享受・楽しみを自身のこととし、この現在の自己とひとつになって人間的な精神に生きているのであり、感覚的現在の苦勞に充実感をいだきつつ、未来の理想に生きる。

（モナドの夢と、モナドを超出する希望）夢は自己内での展開にとどまる。ひとの魂にはあらゆるものが内在していて、すべてはこのうちでの展開と見なすことができなくもない。ひとをモナド（单子）とみなす考え方は、ひとの魂はそれ自体が宇宙そのものであらゆるものを内在していると捉える。そとへのつながりは無用で、モナドは、「無窓」ともいわれる。睡眠中の夢の世界では、確かにすべては自分のうちで執り行われ、森羅万象を展開しえて自己内に充足している。白昼夢も明晰夢も自己内ですべてを済ませていて外には出ていない。

だが、希望は、ちがう。自己のそとへと超えて出る。理想として描かれる希望＝目的は、自分のそとにあるかなたのものとして定立される。かなたに実在させようという希望（夢）を希望として確定するのは現在の手元に置かれる実在する手段であり、この実在する自分の手元の手段は、自分のそとの実在する世界とつながっている。その実在的手段をもって、希望は、ひとりよがりの無窓のモナドを超え出て現実の実在世界へととびたつことになる。

2. 希望による現在的手段化

a) 現実に降り立った夢としての希望

希望は、目的論的な展開をする。期待は、因果論的で、事実として現にある因を踏まえてその果を期待するのみであり、夢・願望は、手段・目的はもとより因・果すらも無視して、果実の享受のみを描き、その主観的な欲求（とその充足）を単に表現するのみである。だが、希望は、かなたの目的をまず明確にし、次に、それに到る過程・手段を遡源して現在の現実にまで帰り、この手元の手段（因）からはるかな結果＝目的までを見通していく。希望は、現実的な夢であり、多くある夢のうち、この現在にまで降りて現実に足を下すことのできた夢である。客観的現実の因果の秩序を踏まえながら、希望はこれを目的＝希望へと歩みを進めていく。希望は、はるかで大きなものであるほどに、多くの場合現在から遠く離れ、現在にいたるまでを多様に手段化する。現在の労苦・犠牲を積み重ねながら、希望へいたる道をたどっていく。現在の労苦は、過去の償いの場合は過去の借りを返しているのであるが、希望による現在的手段化・労苦は、それとは逆で、未来の享受のために積み立てていく貯金である。未来の希望は、苦勞した者がその労苦を实らせて、これを享受できるようにする。現在的手段化・苦勞は、未来の楽しみとなる。

希望は、現実化の可能なものである。その決定的なかぎは、現在にある。希望は、この現在に実在する現実的手段を手にしてしている。それを実在的な端緒にして一步一步と実在的なプロセスを展開して実在化する希望へと歩みをたどる。

（ α . われ有り、故に、われ思う－実在する世界に生きる希望）希望は、夢とちがい、現実を、現に有るものを前提にする。そのうえで未来に向かって好ましい可能なものを描き、これの実現をと思う。現実をふまえた生活をしていて、この現実に有る自分から出発する。そこから、希望は描かれる。進学希望では、最高の第一希望ですら、つつましく自分の存在に見合ったものにする。

「われ、有り」は、この自己自身は、現実世界では、自分の思いのままにはならない。自らの存在は自由にはできず、思いもせぬ所に発生したのである。存在してからは、自身のことは何とか自分の思いにあわせて動かせるようになるが、すぐ横には自分の自由にはできない他人が存在することになる。自分と同じ主体が他者として並存しているのであり、

唯我独尊の夢・妄想とちがい、相互に独立した存在として対等であって、自分の思うようにはなってくれない。だが、同時に、自分にできないことを助けてくれるものでもある。

希望は、そういう現実をふまえる。世界をふまえ、他者をふまえて、それらの存在のうえに、自分の存在をふまえつつ、希望の思い・願いは、形成されていく。夢・願望は、現実を気にすることなく、現実を放棄して自分の夢にひたり、そこに自由気ままに思いを描き、思いを夢において存在させていく。これに対して、希望は、現実を踏まえ、おのれの存在・現在をふまえて、そこから可能になる未来を描き出す。

(β. われ思う、故に、われ有り—目的論的存在) 希望は、現実をふまえて描き出したものであり、高い理想的な目的ではあるが、それは実現可能なものである。その未来・かなたの目的を思い、そこから、それにつらなる諸手段の系列(客観的過程)を観念的に現在まで遡源して、現在を最初的手段として見出す。そして、その現在から現実的に連綿と連なっている諸手段の实在的な過程を展開し、実在することになる目的=希望へとたどっていく。

その希望が人生にとって肝要であれば、ひとはその希望のためにおのれを生きることになり、その現在をはるかなその希望への存在としていくことになる。教育者になる希望をもった者は、教育学部生としての現在をつくる。その現在は、未来の希望がつくるものとなる。「われ思う、故に、われ有り」である。なんのために生きているのかが明確になる。教育学部生として生きているのは、教育者になるためである。ただし、この「何のために？」が問われるのは、多くは、そのはるかな目的、それに生きる希望を見失ったときであろう。根源的なその希望が明確であれば、「何のために」は明確であり、問うことはない。問うのは、いまが分からないというより、それを可能とする未来の希望が不明となっているからであろう(勿論、「なんのために？」と自己を問い直すのは、自己の未来の大目的に限定された事柄ではない。快樂・安楽の「ために」と目的をあげたり、「使命」を問うて、自己ではなく社会や人類を目的とし、それらの「ために」自己をその尊い手段にしたいというようなこともある)。

ひとは、動物とちがい、目的的行動をその生の根本様態としている。猫が台所へ行くのは、魚のいいにおい(因)がするからである。だが、ひとが台所に行くのは、「ビールを飲もう」との目的をもってである。猫は台所に近づくほどに期待できる結果(魚のごちそう)が視覚にもはっきりしてきて何も迷うことはない。だが、ひとは、台所に行って「はて、なんのために、来たんだろう？」と戸惑うことがある。直前に描いた目的すらも失念し、人生のたそがれを知ることになる。目的をえがき、その目的のための手段を担う現在と位置づけて日々の人間的な生活は営まれる。今の自分は、それが「有る」のは、「思う」目的のために、その目的によって有るということである。

希望を目的としてそれに生きることにおいて、ひとは、主体的存在になる。おのれの思いでおのれの現在をつくる。自分の存在を自分で定立する自律・自由の存在となる。希望は現在の存在をつくるが、根源的には、「われ有り」の存在・現実が「われ思う」の希望をつくる。ミス日本一を希望とするものは、美人という身体（存在）であってはじめて可能となることである。裁判官になる希望も、かつての奴隷・農奴という存在には不可能なことであった。かれらはそういう希望自体を、したがって絶望ももつことができなかった。その希望と絶望がいただけるようになったのは、近代市民社会における自由な市民という存在となつてのことであろう。存在が根源的である。

b) 現在を手段・犠牲に

希望（＝目的）は、未来にある。希望を実現していくために、現在は、その手段・犠牲となる。希望のまえで、現在は、その手段としての意味を与えられる。現在の存在理由をその未来が与える。希望の未来の果実をもたらす樹木の根っこであり幹であり、枝葉であるという意義をもって、希望はこの現在を生きたものとする。

手段となるものは、その目的のための犠牲になる。無意味な現在の苦勞は、耐え難いが、未来の希望に生きる現在の苦勞＝手段は、希望を可能にするものという価値付けを得て、未来の希有の価値をささえる高い手段価値となる。価値ある未来を獲得するための誇らしい犠牲であり、充実した苦勞となる。犠牲は、なにかのためにその命をかけたり苦難を甘受することになるが、希望が大きいほど、得られる目的の価値が大きいほど、その犠牲は、うけいれやすくなる。苦勞も犠牲もそれ自体は、心身に不快なことであるが、同時に、それが希望の可能性・手段と価値付けられることで、反省する英知のもとでは、精神的自己にとっては、充実した心地よいものともなる。

手段となることは、それ自体は、苦でなくて楽しいものであっても良い。希望の場合、それが大きくはるかなものであればあるほど、いきの長い展開となり、その手段となる過程は、周囲をまきこんでの喜怒哀楽を含んだ生の長い道程となる。かならずしも苦と位置づけられるものではない。はるかな希望のために生きるその手段の過程は充実感に富み、希望への前進は喜びをもたらす、輝いたものともなる。喜びは、新規の価値獲得の現在に充足したもので、いわば終結感情であって、一般的には未来に目を向けるものではないが、希望の道程での一手段の達成は、喜びとなりつつ未来をも視野にいれ、未来の楽しみを一段と大きくしていく。

（無駄に終わることも覚悟）現在を犠牲にし、希望のために努力しても、希望は、かなわないことも多い。希望は、不可能でなければ、何でも希望となりえる。無駄な苦勞に終わることも当然織り込んで、希望の手段としての現在を生きるのである。

その希望の実現可能性の程度を測りつつ、手段となるべきその程度をはかってもいる。

不確定な未来というリスクに賭けるのであり、リスクは、希望では、それがかなえられないという形でしばしば現実化する。それに備えているからこそ、第一希望のみではなく、第二・第三希望を平行させることもある。第一希望は、かなわず、挫折して終わることも多い。それでもこれに賭けようというのは、それが希有の理想・望みだからであるが、同時に、その希望において、現在がより充実したものとなるからでもある。生は、目的実現に、その達成に生きる。だが、同時に、その過程自身が生自身なのでもある。狩りでは、獲物を得ることよりも、しばしば、狩り自体を、その苦勞を楽しみとする。

(希望は他者も手段にする) 手段にするといえ、希望では、願いを託す相手があり、この相手を自分の希望実現のための手段とすることがある。自分のすることを見守ってほしい、許容してほしいという自力の希望もあるが、希望する相手にその希望の実現を希う場合がある。自分の希望する大学に進学するとき、その許容をということで親にこれを願うのであり、かつ、授業料等をということでは、両親に、手段・犠牲役をと頼み願うのである。この場合、親の方が「店をつぐために醸造学を学びに東広島大学へ行ってくれ」と希望しているときには、子供の方があるいは手段・犠牲になるのかも知れない。いずれにしても希望では、他者に依頼することが中心になるものの場合、その依頼された者が手段となり犠牲的な役割を果す。

希望(=目的=観念)を現実化・実在化する者が自己自身でないときには、これを可能とする他者において、その実在化の手段となるものを見出して(資金とか才能等)、希望の歩みをひきうけてもらうことになる。ひとに依存する形の希望は、ひとを手段とするのであるが、その特徴は「希う」ことにある。それは、強制や命令ではない。命令・強制する者は手段となる者の自発性を尊重しない。だが、希望は、相手の自主性・自由をふまえて、了承してもらう。拒否する自由をふまえた依頼である。相手は要請に自発的に応じるのであり、手段になるからといって奴隷のような犠牲になるのではない。「十万円の寄付金を希望しています」という希望の依頼は、断る自由を踏まえている。なお、懇願し哀願する場合には、卑屈になることがあるが、希望では、無理やりに頼み込んだり同情を乞うようなことはしない。希望の目的は、自身には希有の望みとして最高の価値ある誇らしいものである。そういう高い価値物だから、無理はいえないと思うところがある。かつ、希望は、自分にできることは自分で実現していく主体的な精神のもとにあって、自尊心を折ってまでの依存はしたくないということもある。背筋を伸ばして堂々と希望する。

c) 精神の希望は、現在と人間存在の下位成層を手段にする

この世界は成層的であって、無機物を材料・手段として上位層に有機物を形成し、これをふまえて、さらに高度の動物的世界を可能としている。単純な構造のものの上に複雑で高度な機能をもったものが可能となっており、前者を土台・手段として使用して高次存

在成層はなりたっている。人間においても、それは同じことで、動物的生命の上位層に社会的人間的精神生活を形成し、その精神的存在は一つの人格として現在を営み、自身を統一的に展開する。希望は、この現在を越え未来（＝目的）をみすえて現実（＝手段）にたつ精神のレベルでの活動形式であり、ひとのみに可能な高貴な目的論的営みになる。精神をもってひとは、おのれの過去から未来かなたまでを統一して生き、現在の身体を含むおのれの全存在層を制御しリードしている。下位層にあるものは、その人間生活の総体を担う精神のための手段となる。希望は、精神の営みであり、下位層の心身の営みをその手段とし、現在からその未来の目的に到るまでの過程を手段として、その犠牲をふまえながら、おのれを貫いていく。

ひとは、精神的存在であり、精神の苦悩は、下位層をなす身体等の生動性さえもうばっていく。愛しい子がなくなって根本的な希望・夢をうばわれて絶望しているときは、いくら美味しいものであっても、味気ないものとなり、生に根源的な食欲すらも失わせる。ひとの精神の絶望は、土台・下位層をつくる心身を萎縮させる。ひとは、知的精神において生きているのである。

（希望の精神は、現在・下位成層を充実したものにする）手段・犠牲になることは、多く不快なものとなるのだが、手段とならない、なれないことは、もっとつらいものとなることがある。絶望は、未来の希望を喪失し、現在をその手段とできなくなった状態である。希望の手段としての現在でありえなくなったのである。絶望からいうと、手段・犠牲になれることは、稀有のありがたいことである。希望において、現在は、無・暗闇ではなく、未来の手段・媒介としての高尚な意義を獲得する。輝いた未来の希望の手段として、現在は、輝き充実したものとなる。

絶望している場合、望みの未来がないのみではない。現在が楽しめなくなっている。根本的には欲求・欲望は持続しているにもかかわらず、その欲求の充足にいたる希望が不可能となり、その手がかりが無となっているのである。未来の無とともに現在も、その人間的精神的生が無化し虚無化してくる。現在が無化しているから、未来も無化しているのだともいえる。この無から無への悪循環を断ち切るのは、現在を有化するか、未来を希望をもって有化することであろう。現在を有化することは、無財産状態に財産を与える等、現に実在しているものを動かすことが必要で、そう簡単ではない。だが、未来の希望は、単なる観念のことで、本人の意欲しだいであるから、有化は、容易である。希望をもつことで、現在をこれの手段として有意義化でき、現在は、そのことで生動性をとりもどす。

手段となることは、その目的しだいで、楽しい苦しさとなる。手段となれることは、ありがたいこととなる。その楽しみな目的にと自分が生きられるのである。手段としての現在は、感覚的世界にいる自己には犠牲・労苦だが、その現在・過去・未来を統一的に生き

る総体的な精神としての自己にとっては同じ自己のうちのことで、精神の希望が実現されていく過程にあるということであれば、それは、精神にとり楽しみである。現在の自己の心身は疲労を感じるとしても、それら下位成層の苦勞は、精神的全体から見ると、充実であり、満足ということになる。

希望をもって苦勞していたときの方が、これを実現し終えたときよりも、よかったということがしばしばある。希望が実現したら、希望に燃えて情熱的という生きがいなくなってしまう。さらに、未来の希望では、好ましいことのみが描かれるので、現に希望を実現して現実の具体のなかに立つとき、その否定面・不快な面が目につくことになり、失望しがちともなる。

3. 未来の手段となる現在の目的化

希望の未来のために現在はその手段・犠牲となるのであるが、その手段化された現在は、充実したものである。過去から未来へと生きる精神は、現在を、希望の未来のための尊い犠牲と価値付け、今の苦勞こそが未来の楽しみになることを洞察している。その苦勞の現在は充実して、喜ばしい楽しいものとなりうる。基礎的な身体的なところでの苦が精神からみて有意義な、実りある苦勞であるとき、その苦をひとは喜んで甘受することができる。その身体の苦痛は、精神の充実感の一部を構成することになる。

現在が手段となり犠牲となって希望実現のために役立つことは、あるいは、身体の苦が精神のために役立つことは、他でもなく、それらがその希望や精神というひとの目的とするものにおいてあるということであり、その人間的生の統一的全体において生きているということである。希望の手段となり犠牲となることは、高い精神的生において充実して生きているということであり、手段の現在は、苦勞であるとしても、楽しい苦勞となる。苦勞は、それに順応して慣れてくると消えてしまい、これを貫く上位の生の活動の楽しさのみが残る。寝てリラックスしている状態から起き上がるのは一苦勞であっても、起き上がるとそれに慣れて苦ではなくなり、心身を働かせること自体が楽しい状態になる。

希望の目的となるものは、その達成とともに消滅して、つぎの希望・目的へと自身を駆り立てていく。生の圧倒的な部分は、目的の実現よりも、その実現への過程にある。希望の実現よりもむしろ、それへの過程において、希望も輝いているし、生きがいもあるのかもしれない。魚釣りでは、目的の釣った魚の堪能よりも、釣ること自身が楽しいのである。

その手段の過程、希望の目的への過程は、充実したものであるが、この充実が大きい場合、その苦勞は苦勞と感ぜられなくなって、その手段自体が目的化することもある。目的は、長野の善光寺参りだとしても、途中の紅葉などの道中が快適であれば、旅行は、その山々をぬって進む車窓をながめながらの、目的への手段の過程・道程が、むしろ中心にな

ってくる。そうすると、目的地は、単なる終点か折り返し地点になり、場合によると、逆に、紅葉の旅（という目的）の単なる手段となる。

希望も、希望のための手段の過程が充実した楽しいものであった場合、はるかにあげられた希望は、むしろ単なる手段・方便となる。大切に、かつ充実して楽しいのは、希望へと目標をかかげてひたすら現在の生にあることとなろう。希望は達成してもたいしたことではない場合がある。それへの過程、犠牲的な手段のもとにこそ充実した生があることとなる。

希望そのものも享受になるとは限らない。将来の職業の希望の場合、これが青少年にはおのれの現在の存在そのものを構成する重大なかつ楽しみな希望になろうが、希望の達成は、おそらく新しい苦勞の始まりでしかない。希望を達成してみても、その状態よりは、希望にむかってまっしぐらに生きていた苦難の道程の方が充実していたということになる場合も多い。結婚の希望なども、おそらくは多くのひとは、結婚の希望の達成で失望しないまでも、片思いや求愛の頃の方がよかったと思い出すのではないか。

（過去・現在・未来の何れを中心に生きるか）ひとは、未来に自己の人生の大目的・希望を描いて、現在をこれのための手段・犠牲にして、希望に生きる。だが、その現在の手段の生が楽しく目的化してくると、未来の希望は、目的というよりは、現在の方向付けの方便か、あるいは、楽しい現在の単なる終点と位置づけられることになる。未来や過去にとらわれずに現在に楽しく生きることになる。未来のために現在を犠牲にして生きる「希望型」に対しては、これは、未来を気にせずもっぱらに現在に生きる、いわば「現在充足型」とでも称されるものになっていく。

希望型ではない、さらに別の生き方としては、過去にとらわれて生きる者、つまり「過去型」「宿命型」もあげられよう。その極端は、過去にすべてが決定されていて、希望などは無知な者の妄念と拒否するものである。過去の因縁によって現在は作られ、それに縛られていると見なすもので、その過去に縛られての未来は、「宿命」「運」と捉えられる。すべては過去において決定されているから、その点では、未来方向にまよって不安定な日々を送ることはなくなる。じたばたしてもなにも変わらないからと、安定したものとなりうる。一生を奴隸・農奴の身分に固定されていた時代には、大臣になろうなどという希望をもっても不可能で無意味であったから、そういった職業についての希望をもつことはなかった。生まれたときにすべて決定されていたのであり、希望も絶望も無意味であったから過去型を取りやすかったといえるであろう。

希望型では、自身の将来は開かれているが、不確定であり、希望の実現の可能性はかならずしも高くはなく、かつ、現在を犠牲にするから、場合によると、無駄な生を送って終わることもある。絶望は、未来に向かってするものであり、希望型は、絶望と不可分であ

る。現在（充足）型は、過去も未来も気にせず現在を融通無碍に生きて、その点では、現在に自己完結して充足しえて、気楽・安楽である。ときに現在型は、刹那の快樂主義になったり、現在のナンセンスな世界に諦念して生きる虚無主義に陥ることにもなる。過去型は、自由をもたないので、否定的になる場合には、あきらめが肝心となり、宿命と諦念の悲觀主義となることであろう。多くの現代人は、過去の因縁も反省し未来の希望もかけながら、現在に充実した生を過ごしているのであって、過去・現在・未来をほどほどにあんばいしていることであろうが、ときにいずれかへと傾く。

（アイデンティティーとしての希望）ひとは、自己意識・自覚をもつ。自分が誰・何者であるかを、自覚している。自己のアイデンティティー、「私」は、社会的な場面でのそれは、かつては過去によっていることが多かった。生まれが自分の一生を決めるものだった。武士の家に生まれた者は、武士であり、農家に生まれた者は、自分を農民として同定していた。勿論、その当面する場面に応じて、喉の渴いた「哺乳動物」としての自己を意識したり、火の前では、可燃物として自己を同定することになっていたであろうが、社会的な存在ということでは、階級の固定したところでは、その階級において自分のアイデンティティーをもっていた。

だが、近代は、社会的存在としてのひとを自由にした。自分が何者であるかは、各自が各個別の生き方において描くことになった。当の社会での自身の使命・役立ちを見出して、これをもってその社会的アイデンティティーとしたり、自身のそれに生きる希望が自己を同定することになった。自身の希望の未来から、自分の現在のあり方を方向づけ、その未来に自己自身を創造していく自己となった。教育者になろうと希望を描く者は、その現在において教育学部の学生となった。未来の自己が今の自己を同定する。この自己同一性は、動的な未来への同一性、おのれになること、自己実現としてのアイデンティティーになる。かつ、理想の教育者（＝希望の最終目的）には、一生なりきれないのだとすれば、自身はそれへの永続的な努力の過程（手段的レベル）に留まりつづける存在となる。その永続的などこまでも向上しようという努力に生きる道程・手段が充実しているのであれば、この道程（手段）自体が目的化する。その努力の持続に自己のアイデンティティーを感じることもとなる。

4. 未来へ開放された喜び・楽しみ

希望も、楽しい夢と同様に、未来の希望の達成とその享受を想像して、これに酔うことができる。希望は、自身にとり稀有の高い価値あるものの獲得をめざす。その達成は、大きな喜びとなるはずのものである。ひとは、これを未来への楽しみとすることになる。

（楽しみ）希望にいだく「楽しみ」は、いま楽しいのではない。いま、うきうきとし生の

発揚がなって充足しているのではない。将来を思い描いて、新規の価値あるものの獲得に喜ぶ姿や、その享受に充足している姿を想像しながら、これを観念的に先取りして、それに遊ぶのである。感覚的現在のみに生きるものには、未来の、あてにならない楽しみなど成立しない。知的精神に生きる者になることではじめて、未来といまはひとつになって、未来の楽しさが今の楽しみとなる。楽しいものが未来にあることを描いてこれに心地よくひたるのが、いまの楽しみである。

希望をもっているところでは、なお、その願い求めるものとしての希望の内容は実現されていない。希うことの内容自体はなお不充足にとどまっている。その肝心のことからいうと、不満・不充足にとどまり、不快な状態にある。かつ、その目標とする希望の未来のために尽力する現在であれば、この現在は苦勞し犠牲になっているのであり、現実的な苦に耐えることになっている。それでも、希望は、苦悩の絶望と反対で、不快ではなく快系列のパッションに属する。それは、人間の高度の精神的なレベルでの快適さである。希望は、精神存在として生きる「充実感」と、明るい生動的な「開放感」をもつ。さらには、その希望の未来を先取りしての未来についての「楽しみ」をもつ。ただし、希望の快感は、感情としては希薄である。反対の絶望は強烈な苦悶の感情となる。現に現れている漆黒の死神に抑圧されて強烈に煩悶する。これに対して、希望は、肝心なことの多くがはるかな未来に属していて、その現在に主として働くものは冷静な意志になり、かつ、ことが未確定のため、感情的反応はしにくいのであろう、快感を実感することは少ない。

ところで、「楽しみ」は、「楽しいこと」という意味でもあるが、希望をもっているところでのそれは、単に楽しい事柄をさすのではない。希望の楽しみは、いま楽しさをもっているのではなく、未来にその楽しさや安楽をもつのである。楽しさを楽しく待つという快適さである。未来の楽しさ、つまり生の存分の発揚と躍動状態を想像して、現在において、若干その楽しさを先取りして躍動感をもったり、その心地よさを想像してこれに現在も若干心地よくなるものであろう。ひとの快不快の感情は、現実 realistically にそうなくても、想像するだけで十分にその想像内容に見合った感情を生じうる。怒りの感情では、相手が目の前にいるよりは居ない所でその気障りを想起してみる方が、遠慮なく「むらむら」と立腹できるぐらいである。未来の希望実現の楽しさでも同様で、心が想像において楽しさのなかにのめりこめば、身も心も楽しくなる。さらに、その希望実現における快適さを想いつつ、その快適さの享受を未来のそのときのために取っておこうと、期待して待つ気持ちを「楽しみ」はもつ。長い未来の希望の場合、多くの手段の過程があり、各過程の手段の達成は、その都度、獲得感情としての喜びを生じることにもなる。この喜びは、いうまでもなく未来への希望の楽しみを一層大きなものとしていく。

(不安や空しさも底にながれている) 希望は、ときに、「不安」と並べられる。新入生を

形容するとき、「希望と不安の新生活」等という。希望のそとに不安があるのはもちろんだが、希望そのものに不安の張り付いていることがしばしばある。希望は、夢とちがいで、その実現の可能なものにと限定されているが、その可能性は、不可能でなければ可能という程度のものであってもよい。もちろん、希望では、その可能性は主体的に高められていくもので低いままではないが、それでも、実現の可能性が低いものの場合、現実化しえないという懸念をつねにもつことになる。

希望にともなうパッションは、開放感や楽しみ・充実感などの快系列の感情のみではなく、多くそのうらに不安や空しさのパッションをもつことになる。はるかな希望は、そう簡単には実現できない。本当の「希望の大学」には、そうやすやすとは入れない。「裁判官の希望」は、少なくない者が断念する。希望をもちつつも、「無理かもしれない」と思い、「不安」になり、何年も司法試験に賭けて来たことに「空しさ」を感じることもあるであろう。この種の希望では、はじめは「希望に燃える」けれども、長年になると、燃えることはできず、しめっぽさがともないがちでもある。

さらに、絶望と同一のレベルにあって絶望から十分に解放されていないままにこれと並んであるような希望では、一層、否定的な感情がともないがちである。交通事故で半身不随になった者は、絶望的になる。だが、どこかに希望を見出してリハビリに懸命になってもいく。絶望と希望は、ここでは、同じ現実をもつ。違いは、希望がうな垂れた頭を持ち上げて、暗闇のかなたにまたたく小さな星を見出している点だけである。やがては、小さな点の希望の星に向かった者はそれが巨大な太陽であることを見出すことになって、両者のちがいは、雲泥の相違となっていくのではあるが、希望をいだき始めた時点では、絶望と同一の厳しい状況におかれている。ここでの希望は、まだ、「楽しみ」をいただくことも、「充実感」をいただくこともないであろう。希望をもちつつも、「社会復帰は絶望」との想像が希望の前を過ぎり、「不安」「虚無」の気持ちにもなることであろう。希望のパッションは、ここでは、しばらくは、不安・空しさ等を強くもった、うすあかりの開放感にとどまることになる。

(第四章は、本論文集が初出になる)

第五章 絶望

1. 希望を絶たれる

絶望は、文字通り、望みが絶たれることである。絶望は、希望の途絶・根絶である。希望は、未来に希望（＝希有の目的）を実現しようとする意志・意欲で、その実践的な希望が絶望では否定される。失望が、一歩先の予期（予知）としての「期待」を否定した「期待外れ」で、認識の働きを基本とするのに対して、絶望は、希望の意志の拒絶として、生きる主体の実践的なことがらになる。希望には身近なささいな希望と大きくはるかな希望があるが、前者の否定は失望する程度であって、絶望するのは、後者についてである。はるかな希望は、その生を導く根本的な意志であり、それが途絶することは、人間(精神)として生きること自体を否定される大事件となる。希望の意志がくじかれて、その意欲の生動性が出口を失い、もがき苦悶する主体的な実践的精神の出来事になる。絶望では、未来の希望を喪失して、未来へのとびらが閉鎖された状態になる。未来がないことで、同時に、未来に目的をもって現在（＝手段）に生きる人間にとっては、その現在自体も無意味なものになり虚無化したものになってしまう。生動的な存在が陰鬱な牢獄に閉じ込められるのである。

a) 「何を」何に絶望するのか

希望が絶たれて絶望するのであるが、希望は、日本語では「a (W) (Wをaすること) を、P (誰か) に、希望する」あるいは「WをPに希望する」といい、直接目的語〔Wまたはa (W)〕と間接目的語 (P) をとる。しかし、絶望は、失望もそうだが、ふつうには、「～を絶望する」とはいわず、「～に絶望する」とのみ言う。絶望は、希望の否定としては、希望の直接目的語も間接目的語も否定することになる。表現としては直接目的語はとらななくても、内容的には、「a (W) を、Pに絶望する」のである。かりにこの「～を」の表現が絶望に許されたとして、そのa (W) またはWが例えば「マツダの繁栄 (W) を実現する (a) こと」「マツダの繁栄」だとすると、絶望になる希望の否定は、これの将来はないと、これ「を」「絶望する」ものとなる。

まず、そのP (マツダの幹部) に絶望するのは、このPがどうしようもなく頑迷で、これに怒りや嘆きをもって、絶望の怨念をぶつけるといったことになり、「Pに絶望する」というのは、よく分かる。だが、そこで「a (W) を絶望する」とは「マツダの繁栄を、絶望する」ということになるが、若干複雑である。マツダ繁栄の将来を願いながらも、いまの状態では将来はない、絶望的だと悲観する意味にとられよう。つまり、a (W) を望んでいるのに、－a (W) かゼロ (無・暗黒) しかないということである。その直接的な目的語は、一義的にはならず、a (W)、－a (W)、ゼロ (無) がそこには想起される。明確な直接目的語はならず、いずれをも想起しつつ、絶望するのである。これらと距離をおいて、いわば間接的に「に」で示すことになる。「マツダの繁栄に絶望する」のである。そ

の繁栄の将来について、これに絶望的になるということを示す。「マツダの繁栄 [a (W)] について念願しているのだけれども、それは不可能 [-a (W)] で、おさき真っ暗 [ゼロ] で、これに絶望する」と。

内容的には「～を」に相当することにも絶望する。その希望＝目的、理想となるもの [a (W)] の実現「を」悲観し、これのかなわないこと [-a (W)] 「を」嘆くのであり、つまりは、このこと「に」絶望する。かつそれをもたらす希望の担い手・支持者 (P) 「に」絶望する。希望の (直接) 目的について絶望するとともに、間接目的語となる希望への関与者にも絶望する。いずれも「～に」で受ける。

ただし、「未来を絶望する」「自分の人生を絶望する」と、特殊的には「を」でも言えるようにも筆者は感じる。この場合、反対の「未来」「人生」「を希望する」は言わない。希望では、現実的に限定されて明確な目的＝望みの成立していることが必要なのであろう。絶望の場合は、どんな希望ももてない全面的な絶望になることがあり、それは「未来」や「人生」全体の暗黒化と捉えられるから、それへの絶望は大いに可能である。しかし、一般的用法にははずれる。おそらくは、その未来・人生を直視して直接目的語とするのであろう。「暗黒の未来を (直視し、これに) 絶望する」、「自分の暗澹たる人生を (見つめながら、これに) 絶望する」ということであろう。未来や人生「に絶望する」は、若干自分と距離を置いているのに対して、これ「を絶望する」という例外的な言い方の場合は、距離をとらずに正視している感じであろうか。

b) 絶望の外延—森羅万象への絶望

ところで、希望の場合、その対象 [a (W)] は、自由な人為に限定され、自然は希望の対象にならないが (日本では、「明日の晴れを希望する」ことはできない)、絶望の場合は、その限定はないように思われる。秋の実りを期待していたのに長雨で絶望する場合、秋の豊かな実りへの期待があって、この期待を裏切られ失望するとともに、豊かな実りという望みが絶たれて、実り [a (W)] について絶望する。さらに、その担い手 (P) は、希望では人に限定されているが、絶望では、限定がなく、自然にも絶望する。秋の実りへの絶望では、「台風に」「長雨に」絶望する。もちろん、「ひとに」も絶望する。その希望を担っていた誰かに絶望し、その希望が自力で実現されるものの場合、「自分に」絶望することにもなる。希望の未来の目的 [a (W)] について絶望し、それをもたらすことになる手段 (P) つまり他者や自分あるいは自然等の条件に絶望する。なにが望みを絶ち不可能にしたのかによって、あるいは望み目指すものへの期待度の大きさのちがいで、その絶望の対象は、それを支える P であったり、望みの目的の a (W) であったりすることになる。絶望は、希望が否定されることには限定されず、おそらくは、未来方向にえがく夢・願望といった「望み」の類いでも、それがその生にとり大切なものであれば、これ

を描けなくなることは深刻で、望みが絶たれたと、それらにも絶望することになる。

希望は、社会的に是とされる価値ある望みであろうが、絶望の「望」はそれには限定されない。非とされるような「望み」も、したがって、それが過剰な復讐の企図であったとしても絶望になりうる。その復讐が当人にとって命を賭けるような大切なものであったとすると、その望みが絶たれることは、絶望となる。おそらくは、絶望は、そのひとの生の根本をなす、善悪を問わない未来の目的、望みについて、不可欠の条件の欠如でその望みの実現が不可能となった時いただくものであろう。「絶望」は、希望や期待をはじめとするひとの根本的な「望み」が絶たれるあらゆるところに広がっていることになる。

c) 一縷の「望み」を「絶たれる」こと

希望は、それへの手段を絶たれて望みを失う。自身の最善を尽くして後は、ひたすらに幸運を願い、他力にもすがり一縷の「望み」を託すのみとなる。そこまで行って最後の「望み」を絶たれて絶望する。単なる他力のもとでの願望や欲求・欲望も、それが切実な願いであれば、その望みが絶たれることは耐え難いことで絶望となる。希望も、他力の願望・期待も、最後は、一縷の「望み」を託して、それもかなわず絶望する。希望も、絶望にいたる場面では、その現実的な希望実現の手段を喪失しており、その点からいうと、現実的手段にとらわれない夢・願望にと後退しているのである。絶望にいたる希望は、もはや、単なる夢・願望になり下がっていて、希望と願望・夢のちがいはなくなっている。希望の絶望は、夢・願望・欲求の絶望になっているのである。

希望や夢が絶たれて絶望するのだが、それが一般の者にとって切実な種類のものでない場合は、希望する者のみが絶望し、願望・夢をいただく程度の一般者は、絶望はしない。ミス日本一になれないで絶望するのは、その希望を抱いていた美人に限定されよう。普通人は、ミス日本一になれないことには絶望しない。美人は、希望をいただき、大きな現実的な願望をもってこれに参加しているので、その願望の断絶はショックとなるが、普通人は、心の片隅で小さな非現実的願望をいただくのみであるから（美しいことは大きな欲求であろうが、日本一には一人しかできないのであり、圧倒的な者には、応募の願書すら願わない程度の願望にとどまる）、それがかなわないことは、当たり前のこととして、少しもこれに落胆することはない。

だが、美人コンテストとちがい、入学や就職での希望など、人生に根本的な欲求・欲望に由来する望みの場合は深刻である。「一流校（受験）に絶望する者は、これを受験するトップレベルの希望者のみだ」と言って済ますことはできない。一流校希望者が絶望するだけではなく、その希望に絶望できなかった下位クラスの者たちも、絶望できない絶望的な下位クラスの自覚をもたされ絶望的となることがある。若者に別の希望や望み（学校制度・学歴のそとでの、社会的に高く評価される特殊技術の訓練所や就職等）が許されておらず、

その欲求が出口をもたないで暗黒状態に閉じ込められるのだとしたら、その根本の社会的な欲望や願望は、切実な望みを絶たれるのであり、絶望的となる。希望とその絶望の圏域から疎外された、希望の意欲さえ拒まれた基礎的な望みのレベルでの深い絶望となる。

d) 「何かに」であるより、「無・暗黒」への絶望

希望が、大きな障害の出現などで否定され、希望の目的と手段がなりたたなくなつて、ひとは絶望する。絶望では、未来が閉じられ、何も未来に描くことができなくなる。希望の目的の無化であり、したがってまた、手段となる現在そのものの無化、無意味化である。そのひとの生そのものであるような希望を絶たれる者は、その希望・絶望の対象を描いてこれに絶望するというよりは、未来全体と対象世界自体を無化することになる。絶望の対象は、しばしば、無として捉えられる。その無は、単なる無ではなく、希望・望みを不可能とする深刻な無・暗黒である。

「難関の西条高校への入学」を希望としていた者が不合格で入学「不可能」となった場合、この不可能は、その希望を無化する絶望となる。その絶望の無は、あこがれの西条高校入学という希望の目的〔a (W)〕の無である。特定のことへの希望であり、特定のことへの不可能性として、その絶望の無は、そのかぎりでは限定的である。西条高校入学への絶望は、他の西海高校等への入学の可能性を残しており、絶望は、西条高校入学に関してのみのものである。限定的無、限定的な暗闇である。だが、これが当人にとって、人生をかけた大きな希望であった場合は、その無は、限定されたものではなくなっていく。その無は、深刻となる。西条高校以外はいかないと決めていたり、それに人生そのものを見ていた場合は、客観的には他の希望が可能であっても、それは、当人には、希望とはならず、人生そのものの全面的な暗黒化となり、未来のすべてを奪われた底なしの無となる。自己の何者であるかをその希望において描く者は、それが特定のことであっても、自己のアイデンティティーをそれにもつから、それへの絶望は、自己そのものの喪失ともなる。

ひとり息子の死は、母親にとっては、夫とはちがいで他にかえがたい根本的な喪失であり、人生そのものの喪失となる。客観的には一定の無・不可能であっても、そのひとにとって、それが人生そのものであった場合、それで未来のあらゆるものが奪われたことになってしまい、その無はすべてをうばう無となる。未来に何ひとつ希望は残されていない状態となるのであり、人生そのものの無・暗黒となる。この絶望は、もはや、Pとかa (W) への絶望ということではない。星ひとつない漆黒の暗闇への絶望、あらゆるものを奪い去り呑みこむ底なしのブラックホール・虚無への絶望ということになる。

絶望の無・暗黒は、客観的に見て、ささいなものから深刻なものまでがあり、かつ、それを受取る主体にとって、主観的に、ささいなものから人生そのものを奪うような奈落の底の暗黒になるものまでがある。ゲームでの「絶望」や、試験の一科目についての「絶望」

は、ごく限定的な無・暗闇でしかないが、受験での「絶望」はそうとうに深刻な無・暗闇となる。かつ、それを受取る主体がどれぐらいその希望にかけていたのかで、同じ特定の無でも、その意味をまったく変えることになる。受験に青春のすべてがかかっていると思うものにおいては、その絶望の無・暗黒は、総体としての世界そのものの暗黒化となる。未来を総体として喪失した状態となり、自己そのものの無化となって、生きる望み自体を失うことともなる。将来のある優秀な若者が自殺するのは、一点での絶望において、未来のすべてを奪われ、したがってその現在も無意味化して無となり、人生全体が暗黒・無になったと思うからである。死神から逃れえて生き残って後に振り返れば、些細なことへの絶望だったと思えるようになるとしても、その時はあらゆるものを虚無化する暗黒の絶望だったのである。

2. 未来が閉じられた抑鬱状態

特定の事柄に希望をいだき、したがって、まずはその特定の事柄に絶望するのであるが、その絶望の広がりや度合いによって、そのひとの生への影響はまったく異なるものとなる。その希望にあまり期待をしていなかった者は、ごく限定的な絶望を抱くのみであろうが、それに大きな望みを抱いていた者は、同じ事柄であっても、その生の全体を絶望に染めてしまう可能性がある。以下では、そういう、人の生の全体を支配してしまうような絶望を想定して、その精神の有り様を見ておこう。特定の事柄への限定的な絶望は、その薄められた様態にとどまることとなろう。

a) 閉塞・抑鬱状態

希望は、未来へとひとを引き立てていくが、その未来を絶望は絶つ。本来、未来へと人の生は開かれているものなのに、これが絶望では閉じられる。単に閉じられているのみならず、場合によると外的な侵害から保護されて安らいだ時空間となり得る。だが、絶望の場合、その生は未来を切り開きたいという意志・欲求を根底に持つ場面にあって、かつ、その生動性の一切が発揚を押しとどめられるのである。本来動いてこそ生であるのに、それが可能となる場を奪われるのであって、その不自由の状態は、抑圧となり抑鬱状態をもたらす。桎梏の牢獄に閉塞状態となっているのが、絶望である。

希望において未来に享受があり楽しみがあったのに、それが不可能となり無となったのである。現在に耐えればさき楽しみがあるというのではなく、未来はない、さきは暗黒だというのである。希望において現在は、未来のための手段となり有意な活動をしていたのに、その未来の目的の喪失によって、現在は、その存在の意味を喪失し、無になる。それまでにその希望のために犠牲にしてきたもの、蓄積してきたはずのものが、その価値を剥奪され無と化してしまう。希望のために犠牲にしてきたものが大きければ、それだけそ

の喪失感も大きなものとなろう。

希望を喪失して、生は未来をふさがれ現在を虚無化する。その生動性は抑圧され、前進は拒絶される。ひとの精神は、奈落の底に落とし込まれ、陰鬱な絶望の淵をさまようことになる。どんなにもがいてもその暗黒には出口が見つからず、精神は、絶望の自縛に抑鬱感をつのらせていく。

絶望は、希望と同様、人間精神に固有の働きであり、下位成層の動物的なもののうえにそびえて、これをリードし統制する。絶望しているときには、下位層の快もそのままには感じられなくなる。倒産して借金の山に絶望して苦悶し陰鬱になっているときは、食の強い快楽ですら、感じにくくなる。精神の絶望は、精神全体をそれで包むのみでなく、生の活動の下位の諸層にまで汎化して、その生の全体を絶望で支配していく。精神の絶望は、身体すらも、蝕んでいく。

b) 精神の苦悩・煩悶

自分を拒否し疎外する暗黒の世界に抑鬱状態となった絶望のひとは、苦悩にとらえられ、煩悶する。それは、ひとの社会生活をささえ人生を統御する知的精神の強い不快感情である。ひとをひととするその精神が、その意志や意欲を抑えつけられ縛られていることにつらさであり、活動できないことへの焦燥・煩悶である。自身のまわりの世界は光も暖かさも無い漆黒の牢獄となり、精神は、未来へと進む自身の時間すらも失い、その生動性を自らに押し留め、不動の自縛状態のその息苦しさに留め置かれる。暗黒の底なしの奈落の底へとひきずりこまれ落としこまれる感じともなる。希望の目的を剥奪され暗黒状態となり、自身はなお生命をもっているのに死の暗闇にひとり放置され、心身は漆黒の虚無にさいなまれる。

絶望は、不快感情のなかでも強烈な部類になる。逆の希望は、むしろ、感情としては希薄である。希望も絶望も、身体をはるかに超越した人間精神のあり方であり、しかも未来に関わったことだから、現在の身体反応があつての感情は、希薄になるように思われるが、絶望の感情は、強烈である。

不快感とは、痛みの場合、傷つくなど生に否定的なことの生起を知らせ、これに注意を向けさせるために大切なもので、傷が治るまで、痛んで、注意を引き続ける。その反対の快感は、ことが順調に行っているということだからその限りでは注意をさそうような強いものである必要はない。座布団にすわっても皮膚に快感を自覚することはあまりないが、そこに押しピンでもあれば、しっかりと痛みを感じて、この痛みに注目させられる。さらには、痛みは、不快で避けたいということになるから、生体は傷つくこと自体を避けるようになり、生命保護の予防的効果も大きい。だが、その有効性を越えた過度で無用な痛みも存在する。末期ガンなど、もう益するものは何一つ残っていないのに、強烈に痛みを持続

させることがある。

絶望も似たものであろう。それは、精神の苦痛になり、その強烈な不快を避けたいので、精神的生の絶望的状态を克服していくことに自身を集中させる。また、絶望的な状況にならないように留意していく予防という点でも、強烈な不快感情となっていることには意味がある。だが、痛みと同じく、無用な過度の不快も相当なもので、これに耐えられず、自殺することすらある。

ところで、絶望の場合、未来が暗黒になるにとどまらず、現在において、現に暗黒の空間に閉じ込められるのであり、現在にも心身は反応することになる。未来のことであっても、それが現在の対応を誘えば、現在の心身の反応が求められる。恐怖や不安は、未来に関わってのものだが、未来の危害を想定して今これに構え準備して心身を反応させる必要を思い、いま萎縮し蒼白になる。同様に、絶望では、未来を剥奪され暗黒の壁の前に、いま動けなくなっているのであり、全面的な無・死を予期してこれに構えて強く反応することになる。その無は、安らかな無や価値ある可能性をひめた無ではなく、未来・過去・現在のあらゆる価値あるものを奪う無として、無力・虚脱感をもたらす無である。しかも、なにより、自身は未来に生きようという生動性をもちエネルギーを有しているのに、その発揚を抑圧されているのである。何かしたいのに何もできないというイライラし悶々とした煩悶・苦悶の状態に留め置かれ、心身はもがき苦しむことになる。現在自体において、なんの救いもなく孤立し、出口のない牢獄にひとり閉じ込められた状態への反応をすることになる。

感情は心とともに身体の反応をもつが、絶望感にとらえられた身体は、無力に打ち沈んで虚脱状態となり、ひざを折って、うな垂れる。表情は、反生動的に暗く呆然として、目を打ち伏せ、真っ暗あるいは真っ白な眼界に虚ろな目を落とす。活動の無用化・無為に見合うように生気をなくして血の気を失い、血流は停滞する。息は滞りぎみで、絶望の「ため息」をつく。生動性を拒絶する暗黒の重圧のもとに不動を強いられ、心身は癒されようのない疲労感をいだき、奈落の底に吸い込まれるような感覚をもつこともある。残された生動的意思は、未来からも現在からも拒絶されて孤立してなすすべもなく、間歇的に無意味にもがき焦燥もする。打ちひしがれた身体の内側で、無情なこの世に対する怒号を抑えて悶え、虚無・喪失への悲嘆の声を忍び、胸が締め付けられたり、張り裂けそうにもなる。

精神が絶望すれば、精神の下位にある心身はそれに支配される。精神が陰鬱であるとき、身体は躍動的になるわけには行かない。ひとの身体はその精神のあり様に合わせる。精神が絶望に苦悶しているときは、身体はいくら美味の食べ物であっても食欲を失ってしまう。絶望している者は、おかしいことにも笑いを持ちにくくなり、喜怒哀楽が絶望によってゆがめられる。身体も影響を受けて、皮膚の色も絶望によって色つやを失う。病気への抵抗

力も低下させて、大きく長い絶望は、身体の生命をも縮める。

絶望は、希望が絶たれて希望と疎遠な状態にあるわけだが、しばしば、その希望のための多くの条件をもっている者が、肝心の一部の条件を欠く事で希望不可能となって絶望するのである。絶望する者は、その希望への能力・欲求自体はしっかりと持っている。したがって、身近な周囲は、皮肉なことに、その希望の実現に向けて喜々としているのであり、その周囲の希望の輝きのなかで、自分だけがその不可能な暗黒の状態に絶望していることになる。失恋で絶望するのは、その方面の能力を失いかかった老人ではなく、その能力にあふれた若者であり、しかも片思いの相手は、物理的には身近に、手の届くところにいる。同年齢の者は、希望に燃え、青春を謳歌しているのに、その欲求を自分のみが禁じられ自らに禁じ自縛して生動性を抑圧するのであり、その生は、煩悶し、焦燥・憔悴することになる。その希望〔a (W)〕をめぐるの自身とその周り (P) の無能さの現実を嘆き、天を恨み、くよくよと煩悶をくりかえすことになりもする。

未来の希望があれば、その高い目的のために現在を有意義に犠牲にできる。いのちすら喜々としてかけることもできる。周囲の者は現にそうしており、希望のために意義ある苦勞をし忍耐を重ねて輝いている。だが、絶望させられている者には、その肝心の未来の希望が剥奪されているのであり、その現在は無意味となり虚無化している。現在の苦悩に耐えても意味はないとなれば、その苦悩は、一層大きく耐えがたく感じられる。あと10メートル登れば頂上ということなら、どんなに苦しくても楽しく登れる。だが、永遠に頂上にたどりつけない暗闇の登り道が絶望の道である。そのつらさは客観的に見ると大したことではなくても、耐え難い苦しみとなる。絶望は未来の時間を剥奪されているから、その現在において、永遠に無意味に苦悩することを強いられる。

絶望状態そのものには、何のなぐさめもない。絶望では、不幸とちがって、これを他人事にして逃れることも容易には許されない。幸不幸は、人生を総括し反省するところになるから、自己を対象化し突き放すことがもともとあって、これを他人事にするのは容易である。不幸においては、過去の恵みのなかったことへの諦念をもって、これに悲哀感をもって涙し自身で不幸をなぐさめられもする。だが、希望と絶望は、これから生きていこうとする主体的な姿勢をもってなるものとして、それが現在とこれからの自己自身をなすものとして、自身をそこで突き放して他人事にするのは容易ではない。絶望では、突き放して見直そうという余裕も気力もでてこなくなるとなる。その陰鬱な辛さのなかに押しつぶされているだけとなる。

c) 無為に茫然とたたずむ

辛い煩悶の感情状態は、絶望している間、ずっと続いているのではない。希望のなさを思うたびに苦悶や焦燥などの絶望感は反復するが、絶望状態は、未来を無化し現在を無意

味化した虚無としては、反生動・反活動の無為を通常のあり方とする。どこにも出口が見つからず、茫然として、なすすべもなく立ちつくすのである。未来を意識すれば暗澹となる。精神が、先を思って生動的になろうとすると目の前に巨大な壁が立ちふさがる。この壁にぶつかった精神のエネルギーは、自らの方向へ苦悶となって跳ね返ってくる。精神が活動を停止しておれば、差当たりは、苦悶せずに済む。先を考えず無為に留まっておれば、苦悶を生じないで済む。しかし、煩悶はしないとしても、絶望状態であることにはかわりはない。茫然と虚無・虚脱に沈んだ状態を続ける絶望である。

ひとの生をリードする精神が無為に陥っているのであり、そのリードがない状態では、人間らしい創造的な営みは、自身からは積極的に展開しえない。人生全体を統一して生きる精神は、絶望して無為だが、日々の社会生活の喜怒哀楽は、もつ。絶望の真っ只中であっても、宝くじで百万円が当れば喜び、それがうそだと分かれば、怒る。だが、そういう全体を統御し総体を見渡す人間的な精神は絶望して無為に陥ったままである。

精神的には無為か絶望感にあって不快であれば、精神的に生きることから逃避して、その日ぐらしの直接的反応の喜怒哀楽の社会生活に終始しがちとなろう。あるいは、より低次層の感覚的なレベルの快や、苦悶する脳を麻痺させる酒などに刹那の慰めを求めたくもなる。

d) 無気力・なげやり

絶望は、その未来が閉じられ、暗黒の現在から抜け出す何の手がかりも見出せず、その苦悶を永続化するのであって、そのことに忍耐しつづけることはむずかしい。なげやりになる。欲求や生の能力は有しているのに、その発現の機会はない、希望の可能性はないというのである。何をしても結局は無意味ということになれば、生への創造的な意欲は失われ、欲求・欲望も低調になり変質して全般的に無気力ともなる。

絶望が支配しているところでは、未来に生きる精神的存在に立ち返ろうとするとき、あるいは、精神としての自己を思うとき、絶望の感情としての苦悶や鬱の状態にたたき込まれるが、日頃は、苦悶に打ちひしがれる状態にまではなっていない。たちの悪いガンのようにひとを始終痛めつづけるのではなく、腎臓結石のように、ときどき耐えがたい激痛を精神に与えるのである。しかし、絶望に陥った精神は、希望が見つからないかぎり、絶望状態を持続させる。絶望は、無気力という形で、なげやりのかたちで持続する。

絶望は、「未来はない、希望はない」という。未来の希望へと、現在を手段・犠牲にしながらいかに意欲的に生きるのが人間的な生である。その意欲的になれる希望を奪われては、根本的に非意欲的になる以外なく、その精神的な生は、無気力になる。なにかを始めるとしても、持続性を欠くことになる。希望を奪われたその生は、未来のために忍耐し頑張ることはできないし、無意味化した現在に意欲をもつこともできない。ひとの忍耐の限度は、外的に

は、それに耐えない時の罰や、その逆の褒美に影響されるところが大きいですが、これからのすべきことについて、耐える前にすでに絶望の重罰が与えられているのでは、忍耐への意欲ははじめから殺がれていると言わねばならない。頑張れるのは、内的には、その忍耐の媒介によって、大きな価値・実りのなることが洞察できて、その実りを楽しみにできることが大きい。だが、絶望は、どこにもそんな実りは許されていないと冷酷に突き放す。頑張っても何の意味もないと言っているに等しい。

絶望した者が何についてもなげやりになるのは、それらのことを否定しようと意志するからではない。主体的に取り組む自己を喪失して、積極的な行為への意味を見出せなくなっているのである。自己の生は未来と希望から棄てられ、未来に生きる一切を剥奪され現在までを奪われているのである。その総体的な虚無の前では、創造的建設的になることは無理である。どうなってもかまわないと非建設的にもなり、ニヒルにもなる。いわゆる「底辺校」の少年たちを「なげやりになるな、やる気を出せ！」と叱咤激励することがあるが、なげやりになる原因としての深い絶望を放置したままでは、空しい掛け声に留まる。希望がいただけるようにと仕向け、なによりも、絶望しなくても済むようにと（学歴だけではなく、多様な望みが評価されプライドがもてるようにと）社会の仕組みを変えることが必要であろう。

e) 自暴自棄

自暴自棄は、絶望がその感情としての焦燥や抑鬱の発作を生じているときに特に取りやすい行動になる。絶望の原因となるものへの攻撃・仕返しは、この形をとる。もはや、人に怒りをぶつけても、哀願しても、希望はよみがえらないのが絶望状態である。攻撃してみても事態は少しも好転しないのであり、鬱憤は、そのやり場がなく、当り散らすことになりがちである。周囲にのみならず、その存在が虚無的になっている自己自身にもしばしば向けられる。

自身の絶望の鬱憤は、自らを痛めつけ、虚無化した己に残されたものを棄ててにかかる。その残された生動性は、おのれに暴力をふるい、自暴自棄となる。絶望させているまわりの世界に向けて、なお残された力をもって仕返しを、鬱憤晴らしをこころみる。徹底して絶望している場合は、精神的に虚脱状態になり自己閉鎖してしまい、そとに攻撃的になることはないとしても、自己の心身への攻撃の余力を残して、絶望は、自殺を結果することがある。

絶望の日常態としての無為・無気力・なげやりは、市民生活において行動の求められる場面に顕在化するから、ひとの目につきやすい。自暴自棄のやけっぱちな振舞いも、周囲に与える衝撃は大きいものとなる。「窮鼠、猫を噛む」で、破れかぶれで命知らずの振舞いにすらなる。絶望は、しばしば絶望する者自身を痛めつけ絞め殺すとともに、ときに世界

をラディカルに破壊する戦士となる。中国の兵法で、配下の兵士達を死に物狂いで戦わせる方法として、死ぬ以外ない絶望的情况に追い込む奇策をいうことがあるが、絶望は、精神的生命を剥奪されているのであり、命知らずである。

3. 挫折・失意としての絶望

(挫折) 絶望を表すとき、「挫折」とか「失意」をもってすることがある。挫折は、希望や信念の展開途中で、その進行が大きな障害のために中断し、その歩みが挫かれ折られて、先に進む目処をもてなくなり、意気消沈している状態であろう。信念でいえば、自らをそれにかけた信念＝原理・原則に重大な疑義が生じて、それに生きることを断念させられた状態である。希望でいえば、希望＝目的自体が高い価値をもたなくなったり、展開中の手段・歩みが妨げられて先への進行を断念せざるをえなくなった絶望的な状態であろう。

挫折は、まずは、希望の第一歩だけは踏み出している。そのあとで、希望する者自身のうちに能力不足などの挫折し絶望するにいたる理由が生じたり、あるいは、周囲の悪条件が出てきて、その希望の歩みを中断するのである。希望が挫かれるのだが、挫折感のもとには、すでに希望の実現にむけて汗を流し、なんらかの実績を積んでいるという意識、その過去の方にむけての意識が存在する。その過去からの、自信あり意欲ある展開が折られ挫かれたのである。それに生きることに自信をもち信念をもって第一歩は踏み出していたのに、その鼻をへし折られてしまい、もはや未来への意欲など不可能と無力感にとらえられている。すでに希望のために犠牲にし蓄積してきたものがあるから、過去にさかのぼってこれらの無意味化を嘆くこともある。未来の喪失をなげき、帰らぬ過去を悔やみ、打ちひしがれる。

その挫かれ自らに折る希望は、ささいな希望ではない。人生にとって重大な希望であり、挫折は、人生の方向転換が求められるような大きな出来事である。この挫折においては、夢破れ、絶望して終わることもあるが、しばしば、「挫折経験」は、ひとを鍛え、精神的に豊かな存在にと生まれ変わることを可能とする。希望の「挫折」は、希望の断絶・途絶とは区別される。折っているのであって、断ち切って途絶しているのではない。折れは、これを戻せば、まっすぐに伸びたものとなる。まだ、若干なりとも希望の余地を残しているということになる。折れたところでその原因を解明し、自らを改め、なすべきことを明確にして、やがて再チャレンジしていくことも可能となる。挫折して、いわば惨めな「敗者」、虐げられた「弱者」に自身がなるのであり、そのあとでの復活、希望の再生においては、その挫折体験で得たものをふまえて一層高く強く生きていくことが可能となる。

(失意) 挫折とならべられる絶望に、失意のあがることがある。この失意は、希望をふくむ自身の誇らしい活動や主張が実現不可能となり、その高邁な意思の発揚の場を失って、

打ちひしがれている状態を指すものであろう。失意のもとにあるその活動や意思は、それが実現でき「意」を得るとき、「得意」となるような「意」であり、自身を賭けてそれに生きる主体的な意欲・意志であらう。絶望や失望は、他に依頼する事柄や自然についてもいうが、失意は、もっぱら自己自身による能動的な活動や思いについていう。秋の収穫について、これへの絶望や失望をいうが、失意は、あまりいうことがない。かりに秋の収穫に関して「失意にうちひしがれていた」ということがあったとすると、そこには、長雨に対して懸命になって戦っていた者が自身の無力さに打ちしおれているような特殊な状態を想像することであらう。自身の努力で長雨に打ち勝ち、「得意満面」「得意の絶頂」になりうる可能性をもちつつ、その能力に達せず、長雨に敗北して愁然として「失意に打ち沈む」のである。希望は、ときに、他力でひとに「希う（請い願う）」ことを専らとする場合があり、この希望は、したがって、絶望・失望とはなっても、「失意」とはならないというべきであらう。失意は、挫折もそうだが、ひとの主体的な自力の営みについて、その意思がかなわないで失敗・敗北したときにいただくものであろう。

かつ、希望よりはひろく、失意は、信念とか志願など主体的な活動・こころざし（意）のあるところで、その否定的結果の生じた場面にいわれる。失意の反対の「得意満面」となるのは、社会的に誇らしい自身の活動について、それが成功して、その思い・意を得ることができているときであらう。自己の信念に属することは、誇らしいもので、それが実現できておれば、「得意満面」となろうが、逆にそれが実現できない状態が続くと、「失意にしずむ」ことになる。

「得意」は、子供にも言えるが、「失意」は、子供ではなお難しい。周囲を見渡して自身が勝者で優れていることを誇るのは簡単だが、敗北して自身の内面を反省するようなことは、難しいということであらうか。あるいは、子供は、自己中心的であって、客観的に自身を突き放し対象化して把握することは困難であり、保護されることも多く、厳しい現実と対決せずに済んでいることもある。敗北・失敗をそれとして自覚し自己を客観的に評価でき反省できるのでないと、失意も出てきにくいであらう。それは、希望でも同様に、希望に比して、絶望・失望は、より成長した段階にならないと言ひ難いように感じられる。

得意と逆に、失意は、自身のその自力の能力について、それが自他の障害・妨害のために、その意（の達成）を得ることができず、敗北しているのである。外的な妨害によると同時に、自身の主体的な能力においてかなわず敗退したのである。何と云っても、自身の活動なり意欲・意思に弱さのあることが反省される。意を得て、得意となった場合は、周囲に対して、自身を誇り自信たっぷりの素振りを見せる。失意は、その反対であるから、自身のその失意に関する思いや活動に自信を喪失し、小さく萎縮して、無力感にうちひしがれることになる。得意とは逆に、周囲から身を隠し、周囲を見ることもやめて、ひっそ

りと孤立・孤独の状態になり、身を折り、うつろな目を地面に落とす。得意になるはずのものが見る影も無くなり、場合によるとその意欲自体を喪失することにもなる。

だが、ときに失意の者は、その意思・思いを断念することなく、心に秘め続けることがある。当分は、それは表には出せないが、本来、得意となれる「意」ころざしなのであり、その顕在化・実現のチャンスのある日を待ち続けることがある。絶望の場合、多くはその絶望した「望み」自体の復活よりは、別の希望にと向かうことになろうが、失意の場合、同様に、別の分野にと転進して別の「得意」を実現していくとともに、もとの失意の「意」をころの底に抱き守り続けて、再起をねらうことも少なくない。「入賞できず、失意のうちに大会を終わった」者は、失意を抱き続けるが、その「意」は、次の機会に捲土重来を期すことにつながっていく。

(第五章は、本論文集が初出になる)

第六章 絶望から希望へ

1. 第一希望から第二希望へ

絶望は、つらいし、持続もする。傷が絶えず痛んで注意を喚起するように、絶望の苦悶は、ひとを耐え難いつらさに追い込み、これからの解放をと、せきたてることになる。そのつらさは、激痛同様に、痛みの原因の傷を治療することにひとを向けるよりも、専らその痛み・苦悶自体をなくする方向にと向けることもある。過度の激痛になるともはやこれを治そうという気力さえ奪って打ちのめすように、絶望の苦悶はひとを打ちのめしてしまう。

絶望にとらえられないために、ひとは、様々の試みを行う。なんとといっても一番は、望みの絶たれるような状況を解消して、望みを再度いだけるようにすることである。希望や望みには、その求める高い価値あるものごと＝直接目的があり、他方にそれを可能にしてくれる支持者・担い手という間接目的となるものがある。絶望、つまり希望が絶えるとは、そのいずれかの目的が不可能となったのである。自身にとり最高の希望の直接目的がかなわなくなったとき、次善のものにとレベルを一段下げれば、その希望によって絶望せずに済む可能性がでてくる。受験の第一希望がかなわないときには、第二希望を実現することをもって、なんとか絶望に陥ることは防止できる。他方の、希望を託すその担い手が希望を受け入れてくれず絶望的となっても、しばしば第二の担い手がいるもので、これに希望を託しかえることができるなら、絶望は停止できる。自分の希望通りとなることは少ない。第一希望には、自身にとり不可能に近いぐらいの最高のものを掲げることになるのであり、かなわないで当たり前ということになるのかも知れない。絶望したくなければ、即、その希望を一段さげることであり、現にひとは、そうして、絶望に陥らないようにしているのである。

しかし、自身に最高のものである希望の対象は、自身にはかけがえのないもので、それには魅了され、執着しがちでもある。その最高のものに囚われてそれ以外には目もくれないということになる。周囲から見ると不遜で贅沢な希望と思えるものに一途になり、自身の道を自らが閉じているとしか思えないような状態において絶望するようなことにもなる。少し目をほかにむければ、いくらでも希望はかなえられるのに、それらへの目をもたず、絶望する。

絶望や不幸は、逆の希望・幸福もそうだが、身体の痛みなどちがってひとの知的な解釈で生じるもののため、現実と乖離した偏狭なものになることがある。本来的には感覚とちがい、知的精神は、現実の表層に囚われることなく、事の深い本質を捉え、人生の全体をも幅広く見通すのだが、時にこの現実を深く捉えるというよりこれから離れて、誤解・曲解に陥ることも生じる。恵まれているはずの者が不幸を嘆くこともあり、悲惨のどん底にあるようなひとが至福感を抱くこともある。絶望も、現実離れした主観的な思い込みからなることがある。最難関の大学の不合格に絶望して自殺するまえに、知性を少し「絶望

論」の思索にでもまわしてみれば、その絶望が現実離れしていることには気づきえて、別の方向にと大きな希望を見出せるはずである。こういうことで絶望した場合には、その偏狭な思いに陥っている自分を反省し若干でも広い視野が持てれば即絶望は停止できる。これは、絶望を克服するというより、絶望したのが当人の間違いだったのである。怒りの感情にとらえられていても、自身の誤解と気づけば、即この感情が消失するように、状況の再解釈で絶望が自然消失するものになる。

あるいは、大いに希望のもてる者が不可欠の一条件を欠いて希望不可能となっているような場合、これを補い、条件を満たすことが仮に可能なら、ただちに希望はよみがえる。その絶望は、少し早とちりだったのである。学資がもとで進学できず絶望していたのなら、学資を稼ぎ、支援者をさがすことができれば、希望はよみがえる。ただし、簡単に補いができるのであれば、なにも絶望はしなかったのであって、多くは、それが不可能だから絶望するのである。秋の台風で全滅した、生きていく唯一の糧であった稲は、時間を逆方向に向け得ないかぎり、どこにも実りを回復する手立てはない。こういう場合は、一刻も早くその絶望をそのままに、別の方向に糧を得られるように出稼ぎ等にと希望を見出していく必要がある。だが、そういう新規の希望にと切り替えられないこともある。生きがいであった一人息子を失った母親は、決してこれを取り戻すことはできないし、それ以外にと希望を見出すようなこともおそらくは当分はできない。その絶望からの回復がならないのであれば、その苦悩だけでも消去するためにと、これを模索することになる。

深刻な絶望というまでもなく、誤解・曲解からの絶望や早とちりの絶望であってもそれを抱く者につらいことには変わらない。絶望にとらえられている者は、いずれもその状態を一刻も早く抜け出したいと苦悩除去のための種々の試みをするようになる。ひとには自然的治癒力があって身体の傷はおのずからに治っていくが、心の深い傷である絶望も、これに怒ったり悲しんだりしながら、しだいに事を受容していき、いずれは断念・諦念の落ち着いた状態にまで展開することになるのが普通であろう。だが、傷に傷薬を塗るように、絶望のこの自然的治癒を待ちきれず、あるいは、これを促進しようと、ひとは、その生き方に応じて様々な絶望克服の試みを行っていく。

2. 夢では絶望からの解放は無理か

絶望から抜け出すことはできないとしても、夢でも描ければ、すこしは絶望のつらさを忘れることはできるであろう。夢は現実には縛られないから自由にバラ色の世界を描くことができ、そうできれば、これに一時の安らぎを見出すことができそうである。だが、未来の希望が現在の辛い状態を明るく輝かせるように、逆に、精神の絶望は、未来を描かせないだけでなく、現在を絶望で支配し、夢を描く気力をもたせないし、かりに楽しい夢を

描いても、おそらく、それはなかなか自分の夢にはなりえず、自身にはおそらく空しいものにとどまる。生の未来がないという絶望のもとでは、楽しい夢をえがくことなどできそうもない。

もちろん、夢想にひたり夢を描けば、それにひたる一時は、絶望を忘れることはできよう。だが、それは、その夢を描いている刹那のことにとどまり、夢から覚めると、また元通りの絶望にたちかえる。その夢がその絶望の反対のものであればあるほど、絶望は一層大きくなって現われる。絶望状態では、自身の自由にならない真の夢は、おそらく、よく見る、というか、目覚めてよくおぼえていることになる。いうまでもなく、悪夢である。自身の自由になる白昼夢や明晰夢なら、悪夢ではなく絶望を一時忘れるものを描けるが、それらは現実離れしたものであって、現実の絶望を取り除くことには、無力である。

しかし、白昼夢や明晰夢とちがって、希望とならぶ精神の描く夢の場合は、もともと希望を先導するものとしてあって、希望が絶えて絶望したときにも、その夢が絶望し切ること押し留めることはありそうである。「どんなに絶望的になったときにも、夢を捨てなかった」と希望の復活・達成のあと振り返ることがある。「歌手になる夢を捨てない」者、「俳優になることが夢」の者が、なにをやっても芽が出ず、挫折を繰り返して絶望を深めていても、絶望しきらないで、なお、その方面の仕事を断念せず歯を食いしばって頑張っていたというような話を聞く事がある。ひとつの演劇の仕事が駄目になって絶望しても、別の仕事へと自身をふりむけるだけの気力を夢は鼓舞してくれる。積極的な生き方を持続させてくれるのは夢が残っているからである。夢が絶望を食い止める役割りを果しているといえるであろう。

もっとも、真に絶望しきっていないから、失望程度だから、夢を捨てないですんでいるのかも知れない。徹底した絶望においては、そのような夢はもうなくなっている可能性がある。ひとを打ちのめすような深い絶望に捉えられているときには、おそらく、そういう夢を描く気力は残していないし、無理にそういう夢を描いたとしても自分の夢とはならず、むしろ、「自分には、そういう夢は、もう無理だ」と、逆に一層落ち込ませることになる可能性もある。それでも夢を捨てないでおれば、絶望が落ち着き心が安定を取り戻したとき、また、その夢は、あらたな希望を導いてきて、絶望から希望へと救い上げてくれる可能性はある。もっとも、夢は、永遠に実現できない夢なのかも知れないから、早い目にその夢＝望みにも徹底的に絶望して、人生の進路を別方向に向ける方が好ましいこともある。夢を追って夢のままに終わる悲しい人生になることがある。

3. 絶望の一時しのぎ

何事であれ、絶望から意識をはずすことができれば、その間は、絶望の苦しみを忘れる

ことはできる。それは夢には限られない。ふと、空を見上げて雲に絶望の気に移すとか、道端の花に鬱々とした気に移すということもある。気がまぎれるようなことをすれば、絶望も安らぐことであろう。あるいは、なにかに持続して意識集中の求められることがあれば、その間、絶望も意識を遠のく。一時的に絶望を忘れるには、「旅」がよく使われる。異郷の地に旅すれば、その間は、絶望の振る舞いの求められる生活は中断でき、なにより、目を見張らせるような未知の世界の旅行であれば、意識は、絶望に気をまわすより、新奇の世界に注目していくことになる。絶望に距離をおいて、これを見直す余裕もできるかもしれない。

愛する者を失ったりして絶望している者は、その絶望から逃れるために、ひたすら仕事に打ち込んだり、絶望をいつときでも忘れさせてくれるものへと集中することがある。喪失を思えば絶望の苦悶にとらえられるから、そういう想起ができないように、その暇をあてないで、こころを別のことでいっぱいしておくのである。どんなに耐えがたい絶望の事実があっても、それを心に想起して注目することがなければ、その間、絶望感に陥ることはなくてすむ。

気まぎれとは逆に、不快な感情あたりは、これをしっかり注視し観察することで解消できることがある。怒りにとらえられたときは、怒りの相手に意識が向いてこれに攻撃の構えをとるわけだが、このとき、意識を体験中の怒り自身に向けると怒りは霧散していく。自分の怒りの身体的反応を克明に観察し、顔が紅潮しているとか、犬のように犬歯をむき出しているとか、心臓がどきどきしている等と、観察するのである。すると、気障りな相手を怒ることから意識は離れてしまい、怒り自体がおさまってきて、観察対象（怒り）が消失する。絶望の苦悶の感情にも、これは、当てはまることであろう。絶望の心身のあり様を自己観察するのである。どのように、鬱々としているのか、その目つきはどうなっているのか等を観察すると、意識は、その間、絶望の暗黒の対象から離れてしまい、絶望感自体を一時、消失させることになる。絶望における自暴自棄も、その猛烈な行為をもって絶望を忘れるという面をもつ。だが、いずれの場合も、そのあとすぐに、絶望は、よみがえる。絶望の一時逃れである。

4. 絶望する存在自体を無にしたり麻痺状態にする

絶望を一時忘れるために、この辛い感情そのものを直接麻痺させる方法のとられることがある。つらいことがあったとき、やけ酒を飲むことがある。酔えば脳は麻痺してくるから、その間は未来への思いを持たないですむ。知的精神を麻痺させ一時無とすることができれば、絶望も感じることはなく、苦悩しなくてもよくなる。だが、それがきれば、当然、絶望は復活する。絶望の克服というより、それからの逃避である。

一時麻痺させるのではなく、絶望する主体を根底から無にするものとして、記憶喪失や人格分裂がある。絶望的なことについての記憶がなくなれば、絶望のしようがない。社会的な主体として働いていたその人格が喪失してしまえば、絶望する主体そのものがないのだから絶望も不可能となる。ただし、これは、自覚して意志して行える喪失ではない。

これらは自由にとれるものではないが、自由にできる、これに似た方法がある。それは、魂・主体が既存の自己を喪失するのではなく、そのなりたっている客観・環境の方を根底から取り替えることである。一番確実に簡単なやりかたは、既存の世界をきっぱりと捨てて、異郷へ、異世界へとひっこしすることである。異世界に行けば、既存の反応・生き方は無用となり、あたかも、精神は白紙状態におかれたようになる。すべてが「リセット」されたようになる。絶望した存在が無化したのと同じことになる。日本で大学受験に失敗して絶望した若者が、アマゾンの奥地で生活するとしたら、言葉も通じなければ、受験の絶望も通じないから、過去を捨てて白紙にして、再出発することになろう。アマゾンには自分の過去の記憶は一切ないから、記憶喪失したのと同じ状況になる。ひとには大きな適応能力があるから、人格も結構その社会にあわせてかえられる。おそらく別人になって、別の役を担って生きていくことができる。

存在を無化するといえば、末期がんなどで、残されているのは激痛のみということになったとき、安楽死の選ばれることがあるが、文字通り、心身が無になれば、苦痛・苦悩も無にできる。ただし、それは、絶望の解決としては、最悪のものである。解決というよりは、中断である。

生を根底から否定して生命活動のレベルから無にすることで、上層になりたっていた希望や絶望の精神活動は不可能に、無になる。ワープロやインターネットが動かなくなって終了もできなくなったとき、パソコンの電源を断ち切って終わらせるようなものである。ただし、パソコンは、再度最初から立ち上げて元通りに回復できるが、生は、二度とよみがえることはない。そういう点からいうと、パソコンに喩えるとしたら、ワープロが動かなくなったので、パソコン本体をハンマーで粉砕して始末するような解決法というべきであろう。こういう方法でワープロを終わらせた話は聞いたことがないくらい愚かなやり方であるが、絶望では、倒産し失恋して、残念ながら、結構そういう愚かしい終わり方をする。激痛のみを残す末期がんなど凄惨な死を待つのみになっている場合は別として、普通の絶望の場合、肯定されるものではない。

自殺直前に出会った者が「淡々として明るくなっていて、自殺するような状態ではなかった」と悲報にびっくりすることがあるが、苦悶の絶望から逃れようと自殺を決断したら、絶望状態から心理的に解放されて、安らかになれる。「死んだ気になって」すべてを捨てれば、絶望からは解放されることになる。死線をさまよいながらも、死を思いとどまって、

本気で「死んだ気に」なりきって、やり直したということを時に聞く。

5. 絶望できる位置からしりぞく

絶望は、単なる無ではない。希望ないし望みがあって、これが絶たれているという意識を残しての虚無状態である。そういう望みをいだくことがなければ絶望はしない。とすれば、望みとなる欲求とか欲望、願望をいだきえない立場に身を移すなら、それが充たされない状態としての絶望ももつことはなくなるのである。ミスワールドになれないことで絶望できるのは、そういう希望をもてる美人に限定される。美がそなわっていない者は、美のコンテスト参加への願望をもたないから、絶望しない。美がそなわっている者も、コンテストへの可能性のある位置から自身を退去させれば、希望がなくなるかわりに、絶望もなくなる。ミスワールドへの可能性のなくなる位置、たとえば、結婚し、いわゆる「ミセス」になれば、希望不可の、層や類を別にした存在になるから、絶望もしようがなくなる。

先に記憶喪失相当の激変を可能とする異郷へのひっこしを言ったが、記憶や人格はそのままに生かし持続させながら、異郷に移って、絶望させている状況のみを変えることも可能であろう。ひとは、特定の時空間的環境のもと、これにしばられた生活しており、その中で希望をいだき絶望もしている。その環境を離れば、生活は心機一転ということになり、希望、したがって絶望は、環境によっていた部分が大きいほど、中断・廃棄される可能も大きくなる。かつて、ヨーロッパの生活に絶望したものは、希望の大地アメリカに渡れば、過去の絶望を廃棄でき、新規のやり直しができた。

あるいは、空間的位置・立場ではなく、時間的情況を変えることで、希望と絶望に無縁となることも可能である。希望と絶望は、現在を未来の手段とし、未来（の目的）に生きるところに生じる。この時間展開のうちで絶望するのであれば、未来に向かって生きるという生き方自体をやめればよい場合もあろう。宿命的にすべては過去に決定されていると見なして、未来に向かってなにかを変更しようともがくことなど無意味ととらえるなら、未来に希望しないかわりに絶望することもなくなるであろう。過去型の生き方をとり、希望、したがって絶望も、無知の輩の妄念にすぎないと見るのである。あるいは、刹那の現在にのみ生きる現在型も、未来を考えないから、希望のみか絶望からも解放されたものとなりうるであろう。先のことを思い煩うから精神は苦しくなる。未来を切りすてて、無にすれば、これに煩うこともなくなる。難破船のなかで、絶望するのは人間だけであって、鶏や豚は喜々として最期の餌を満喫する。あるいは、未来を無にするのでなくても、未来の方から人知を超えた新奇のものが到来すると捉える立場に立つのもよいであろうか。目的＝希望を立ててそれに向かって構えて生きるのではなく、いわば無手勝流で、「出たとこ勝負」で行くのである。「あすは、あすの風がふく」である。

時間が絶望を癒してくれることがある。それは、ひとつには、絶望に慣れこれを受容する心構えができてくるということであったり、時間のうちでは多彩な事件が生起して、絶望は意識の片隅に片付けられ忘却のあなたに沈んでいくということである。が、さらに、時間自体が不可逆なので、その絶望したことについて、希望や望み自体がなりたたなくなる（したがって絶望も不可能となる）時の経過を待つとよいということでもあろう。青春の絶望（受験とか恋愛）は、しばしば時間が解決する。ミスワールドへの絶望は、これを希望とする絶世の美女がいただくとして、彼女が60歳の老女になったら、もう希望をいだけないから、当然絶望することもなくなる（不老願望が強ければ、老化には絶望できる）。時間が絶望できない位置に彼女を置いてしまったのである。

6. 欲求・欲望を無化すれば、絶望も無化する

自身の立つ位置・立場は、かならずしも変わらなくても、主観的に、その絶望をなりたたしめている欲求・欲望をなくすれば、それが充たされえないという絶望も消失する。仏教は、絶望回避に、これを取り、希望等の煩悩を滅却するなら、大安楽の境地がえられると説いた。希望・望みをいただくから、その実現が不可能となって絶望する。希望しないレベルに自己の欲求をレベルダウンさせれば絶望もしないことになる。仏教では、「希望」を希有の望み、大それた煩悩と捉えて、これを無化することを正道とした。希望をもつから絶望するのであり、希望・欲求自体を無とすべきだといい、執着する小我の差別知をすて、大我＝無我の無差別知の境地にいたり、煩悩を滅することをもって、その解決とした。

麻薬や酒では、絶望の苦しみの一時的な無化はできても、無気力等の持続的な絶望状態は解消できない。これも覚醒作用をもたらす薬で一時は回復できようが、持続しないし、中毒で精神そのものが破壊され、絶望からの解放どころではなくなる。これに対して仏教では、大それた希望・絶望を作り出すような世界観自体を麻痺＝無化して変更することで絶望の根治を行う。主体が欲望・欲求をもつから希望と絶望はでてくる。小ざかしいエゴ・我にこだわらない大我の境地、何にもとらわれない無の境地に自己を移すなら、小我にもとづく欲望・望みは消滅して行き、したがって、それへの絶望も消失する。かつ、麻薬とちがって脳を麻痺させるものではないから、精神は、健やかで生動的である。

現代人の希望は、大それた願望・欲望に属するものも少なくない。そういうことへの絶望にはあまり同情の余地はない。肥大化した欲望を停止し尊大な望みを断念するなら、ただちに絶望は消失する。資本制以前の人々は、その欲求を低く保ち、節度ある生活をするが多かった。尊大な希望や欲望をいただくことは慎み、希望しないから絶望もしないで済んだ。

ところで、仏教では因縁を説き、「親の因果が子に報い」などと理不尽なことをいい、現

にある不幸・絶望の状態につばを吐きかけて「前世の報いだらう」とつきはなすような解釈をした。これも、不幸や絶望を感じないようにするには、理に合った方法だったのかも知れない。絶望や不幸は、相対的な比較において、つまり、過去に比して恵みがなく、希望がないとなげくのだから、過去について「もともと希望はなかったし、恵みもなかった、現在に見合った状態であった」と想定するなら、恵み喪失の不幸が今生で生じたわけではないと納得できるし、希望をいただくのは分不相応な妄念だと解釈できれば、絶望も感じずにすむ。

絶望的な状況との意識は、尊大な自分ゆえに生じているものなのかも知れない。謙虚に過去や周囲の世界を振り返り、「あの時、多くは死んだのに・・・、自分はこうして生きておれるだけでも、もったいないことだ」とか、「非行少年の自分を見守ってくれた恩師があったから、こうして高い望みをいただき絶望できている・・・恩師がいなかったら、今頃は、刑務所か、死んで地獄に堕ちていた身だらう・・・」と反省できれば、希望を一段も二段もさげてこそ自分にふさわしいと思いを改め、不遜な絶望であったとこれを停止できるのではないか。

「色即空」と空無の真実を知る仏教においては、絶望に抵抗しながくのではなく、これが人生だと絶望甘受の心境になることもあろうか。思えば絶望的な世の中であり、精神的にはなんの進歩もない、むしろ退化しているような人類である。希望は、空疎な観念をいだいて現実に抵抗するが、空しい試みであって、空しさを競い合っ、いずれ皆等しく無の終焉をむかえる。ひとが根本的に空しい存在なのであれば、虚無をもたらす絶望は、ごく自然の帰結である。希望を絶つ空無の絶望は、むしろ、この世の無の真実にふれる貴重な体験である。希望などの空しい生の妄想をくりかえすなかで、無の真実に至らしめてくれる絶望は、むしろ肯んじて甘受すべきこととなる。そう諦念できれば、「火もまた涼し」に等しく、絶望もまた平然と受容可能となる。毒キノコなどは、毒と思って食べるとかならずその毒に苦しめられるが、薬（麻薬）と思えば、ものによっては心地よく陶醉できるようなのである。絶望の苦悶をもたらす猛毒も、それこそが世界の真実をみせてくれる貴重な体験だと了解できることになれば、これを淡々と受け入れることができるようになるかも知れない。

宗教は、しばしばこの世の価値秩序を破壊し、あの世・彼岸に究極の価値を見出して、これを希う。この世俗の希望も絶望も、等しく下賤で、とるに足りないから見下す。試練としての宗教的価値が絶望にあるというのであれば別だが、世俗において絶望して焦燥・苦悶するなど、希望を求めることとともにナンセンスとなる。俗世の些事として、絶望からも距離をとることになる。つまりは絶望にも囚われにくい状態となるのであって、そうなれば、見出しにくかった別の希望も視野に入ってくる。受験の第一希望に絶望しても、そ

の絶望が些事ではかなければ、こころに余裕をもつことができ、視野をひろげて第三希望も考慮するような姿勢がとりやすくなる。別の希望が希望となるということは、絶望からは解放されているということである。

7. 希望は、絶望からひとをよみがえらせる

希望の断念は、現代的ではない。資本制社会は、個人の欲望を肯定しこれを肥大化させる「欲求の体系」と特徴づけられるような社会であり、ましてや倫理的に善となる社会的欲求としての希望は、大いに奨励・鼓舞される。現代の絶望克服の多くは、別の希望を見出して前進していくことを選ぶ。希望を喪失したこの絶望の暗黒に、かすかな光をもたらすのは、やはり「希望」である。それは、ささやかな小さな光だが、暗黒のなかでは、かがやいている。過酷な独裁政治の絶望的状况下で、独裁を批判する一枚のピラは、それ自体は小さなものでしかないが、反乱・革命へとはるかな希望を与える輝きを持ち、その支配転覆という大きな未来、輝く希望をそこに与えることができる。現代社会は、欲望をかきたて希望に生きることをすすめつつも、多くのものを制度的に絶望させている。社会的に有意な存在として生きるという根本的な欲求に関わる希望は、ミス日本一への希望や難関受験校への希望とちがひ、みんながいただくものであり、これが満たされない場合、根本的な欲求についての（希望のもてない）絶望感を社会は生み出すことになる。若者から生きがいの未来を奪い、壮年の者から生きる糧を奪うといった根本的なことへの絶望は、その欲望を無化して、世捨て人として生きるようなことで済ませられるものではない。制度的政治的に、別方向での多様な希望とその充足の道を用意することが求められる。

絶望の暗闇のなかに、自身の生を鼓舞するべつの希望が可能となるなら、その絶望は小さくなるか、消えることになる。青春の失恋の絶望では、無の境地になるよりは、新規の恋人を見つけ新たな希望の歩みを積極的に進めていく方が望ましいであろう。絶望の闇夜であっても、どこかに希望の星がかすかにでも瞬いているのを見つけられる。現代の精神は、希望に生きる。かすかな星影であっても、希望は希望であって、精神は、それを新たな未来の目的にし現在をその有意義な手段として、積極的に生きることが可能となる。一人息子を亡くした母親は、決してその子をよみがえらせることはできないけれども、その絶望は希望には変わりようがないとしても、人生全体への絶望から、別の方向になんらかの希望を見つけ出すことで絶望を薄めていくことは可能である。

新たに希望を見出せば、かすかな光ではあっても、これへとひとは目を見開き、未来へと自身を向け、その場を開放していける。絶望の現実自体は、なお、そこにしっかりとあり、さしあたりは暗黒に変わりはない。ちがひは、かなたに小さく輝く星を見出しているか否かのちがひでしかない。だが、絶望に閉じたとびらをわずかであっても希望は開く

のであり、その星の方向に進んでいくか否かは、大きなちがいとなる。希望の星は、やがて大きな太陽となってくる。

突然盲目となり、自分の人生に絶望し自己に閉じこもっていた者のまえに、ヘレン・ケラーのような、「希望の星」の役割をもったひとが現われると、自身にも希望が可能と思えるようになってくる。絶望し閉じられていた生は、それなりに未来のあることを確認でき、あらたな道を切り開こうとの意欲をさそわれ、そのささやかな希望において、生をよみがえらせはじめる。希望は現実的な展開をする。だれかがことを現実化しているということは、現にそれが可能だということである。自分以上の悪条件の者が希望を実現しているということは、自分にはそれ以上に可能性があり、従ってそれを希望できるということである。希望は、一方では、その希望実現をひとに依頼し願い求める受動的なものであるが、他方では、期待や願望とちがひ、自らがその希望の目的へと能動的に働きかけ、希望を自らが実現していくものでもある。希望のかすかな光を見出すのも、これを大きな輝きとしていくのも、その希望をいただく者自身の積極的な姿勢がなくては、かなわないことである。とはいえ、現に絶望に打ちひしがれている者に「希望を見出せ」というのは、多くは無理な話である。そんなに簡単に希望が見出せるぐらいなら絶望したりはしない。

絶望した当のことについて、なんとといっても、これを受け入れて断念しきる時間が、気持ちの整理のつく一定の時間がある。しかし、その諦めがつけば、残されている可能性の方へと目を移していく余裕も出てくる。足は失って絶望したとしても、手の残っていることに目が向けられるようになる。どこかに、かすかにせよ希望は残っている。その能動性をよみがえらせるのは、そのはじめは、与えられる「希望の星」によることが大きい。自身では不可能と絶望し断念していても、同じ悪条件で事実として希望をもち可能性があると思っている者があれば、自分にも可能性があるのだと思わざるをえなくなる。

なお、「希望の星」は、絶望の暗闇に輝くだけのものではない。みんなが希望を持って歩みを進めているとき、先頭にたってこれをリードしているひとについて、明るい昼間の状態であっても、この理想的なひと、憧れのひとを「希望の星」という。あこがれのひとの場合、おだやかな航路の満天の星空にひとときわ明るく輝く星になる。だが、絶望における「希望の星」は、大嵐の中でかすかに見いだされた一点の星影である。嵐がおさまって難破の危機を脱したことを示したり、進むべき方向を示す救いの星である。

絶望的な現在に閉塞し停滞しているものには、かすかな小さな希望でも、それは、未来の方向に自分を切り開かせていくものとして、その意義においては大きい希望となる。希望の星は、絶望の暗闇に瞬く。そのかすかな光に、生きる希望を見出し、生きる勇気が与えられるのである。そういう類いの希望は、その生が未来へと開かれているか否かという違いをつくり、その現在に生命をよみがえらせるものとして、絶望した者のうちに確かな

活力を呼び起こすことができる。「希望の星」を見出すことで、「その絶望の暗闇に、生きていく勇気と自信をあたえられた」といった話を、絶望からよみがえった個人や民族に聞くことは少なくない。

この種の希望は、まずは実践よりもはるかな未来への「観望」にはじまるといえよう。自身はなお、それへと実践的な歩みは踏み出せているわけではないが、そういうかなたがあり、輝く星のあるのを確認する訳である。「水を希望する」というような場合は、観望ではなく実践的に求め請い願うことだろうが、希望は、はるかなものの場合、実現には時空において相当の距離があるから、まずは、その希有なものへの「望み」は、観望することからはじまる。それをはるかにと望み見ながら、自身の現実をそれに結び付けてその最も手前にあるものから手をつけていく。希望への歩みのはじめは、おそらく、現実自身にその希望の星自身になっていけるとは思いがたく、あこがれ・憧憬にとどまるだけのものであろう。それでもそのさやかな希望の現実は、未来へととびらを開き、生気をとりもどす。現在をその有意義な手段と位置づけ、やがて真に希望の実現へと本腰をいれることもできるようになっていく。

かすかな希望の星は、絶望の現実のもとに再び同じ希望の可能性を見出していくこともあるが、多くは別の希望の道を見出す。絶望したのは、希望がなくなり一縷の望みを託す最期の場面までいったのことであれば、もとの同じ希望の可能性は残っていないのが普通であろう。別の新規の希望をかなたにかすかな星影として見出して、それを踏まえて現実の絶望の虚無のなかに、その希望とその現実的手段を確保していくのである。

希望が真に希望となるには、かなたに夢・望みを描くのみではなく、この現在にそれに至る手段を見出し、これを自身のものとする必要がある。サッカーに希望を見出す者は、まずは、憧れの選手を希望の星として望み見ながら、やがて自身がサッカーボールを手元においてこれを自身の足で蹴ることをはじめる。かなたの希望は、現在を照らし導き、現在のサッカーの練習は、希望を自分の希望として輝かせはじめ、未来と現在は、相互に希望の歩みを促進し、一步一步これを確かなものにしていくことができる。

8. 絶望を貫いて希望へと突き抜けていく

重い障害をもった子が生まれたとき、親はおそらくはまず絶望的になる。未来になんの希望ももてなくなる。だが、この絶望に耐え抜くなかで、自明化していた「親とは」「家庭とは」を問い直し、「そもそも生きるとは」「人間の幸福とは」と根本的なことを思うにいたり、ほかの親にはもてないような、新規の希望を見出していくことが可能となる。成長の節目毎に繰り返し絶望が襲ってきて、その絶望から抜け出すのはそう簡単なことではないであろうが、人には大きな適応能力があり、絶望を乗り越えることが可能である。ある

いは、未来志向の希望型ではない生き方もとれるかも知れない。そうでなかったら抱き続けたであろう一般的な希望とその絶望から抜け出すのであり、ふつうにはできない体験をして、人生を深めていける。

希望の一步を踏み出したものが絶望する「挫折」や、得意となりうるはずだったものへの望みが絶たれての「失意」も、その克服においては、それ以前の状態から一段と高く広いところへと飛躍することが少なくない。挫折も失意も、その絶望に耐えて再び同じ希望を復活させていくことを、ときに可能とする。得意な分野であれば、再チャレンジにおいてその能力は飛躍することになる。我意・我がままが常に通じ、我を曲げることなしに生きている場合、自己の有限性・限界に気づくことは難しい。尊大になってしまう。だが、挫折や失意は、その我の鼻をへし折り、自身の有限性を客観的にとらえることを強制する。それは辛い経験であろうが、自己を客観的に反省してその社会的位置を自覚し、謙虚さをもつことにつながる。敗者の無念さを身をもって知ることによって周囲への配慮・優しさも培うことになる。いうまでもなく、自負心のいだけの分野であれば、失敗の原因をふまえてこれを改めその能力にみがきをかけることになる。忍耐力をつけ根性ができ、負けじ魂も養われる。失意や挫折は、ひとを高め成長させる。

失意について「得意澹然、失意泰然」ということがある。得意の絶頂でも、威張ることなく淡々（静かな水のように澹澹）としておれ、失意のうちでも、堂々と泰然としておれということであるが、泰然とかまえることにおいて、失意の「意」は、ときを移すなかでチャンスをつかみ、捲土重来を期すことができる。失意は、猛省をさそう。自己と真剣に向かい合って自己を否定し根底から改めることへと向かわせてくれる。「得意の絶頂」にあるものは、なにも反省することはない。そこが絶頂・終点である。だが、失意のどん底のうち沈められた者は、そこに留まることを肯定しないどころか、それがどん底との意識であれば、そこから這い上がろうとの強い意欲をもつことになる。絶望に踏みつけられて折られた麦は、それにくじけず泰然と構えておれば、おのずから力をつけて大きく伸び広がっていくことが可能となる。

「南無地獄大菩薩」と白隠は言ったが、絶望の地獄は、ひとを鍛える。これに挑戦することでひとは成長する。人間には計り知れない能力が、希有の適応能力が備わっており、それは、苦難・危機においてはじめて眼を覚ます。挫折し失意のうちに煩悶をつづけ、漆黒の闇の絶望に耐え抜くことで、備わってはいても平凡な状態では眠ったままであった能力にスイッチが入って、これが成長しはじめ、そのもとの新規の希望を見出していくことが可能となる。絶望の壁が立ちふさがっているということは、これを超える力が可能になっているということでもある。越える力があるから、それが壁となって現われているのである。これを突き抜ければ飛躍がある。そういうチャンスが与えられているのである。

絶望には、挑戦してみる価値がある。その非日常のもとには、人生を一変するようなチャンスが与えられているのかも知れない。天国での安逸にではなく、地獄の責め苦の絶望的体験において、おのれでおのれの存在を創造していくような神々しい希望も可能となってくる。

(第六章は、本論文集が初出になる)